
香癒の人 2

aromaman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香癒の人2

【Nコード】

N7039H

【作者名】

aromaman

【あらすじ】

夫のキザシと離婚して以来、木の葉隠れの里で平和に暮らしていたアキ。しかしある男性に結婚を申し込まれたことをきっかけに、再びトラブルに巻き込まれる。

キザシの事件から、1年たった。

当時は復興中だった里も、今はほぼ完成している。

あれ以来大きな事件はなく、時々任務で怪我をしたという話を聞くほかは、平和な日々が続いていた。

「アキさん！」

自分と呼ぶ声に、畑でハーブの観察をしていたアキは顔を上げた。

「ああ、修司さん。こんにちは」

柊修司はアキより少し年上の34歳。町で靴屋を営んでいる。よくサロンを利用してくれるし、新しい客も紹介してくれるお得意様だ。「お店はいいんですか？」

アキの質問に、修司はにこやかに答えた。

「今日は定休日ですよ。午後に予約を入れたじゃないですか」

「そういえば……。1時からのご予約でしたね」

そう言いながら、アキは時計を確認した。

「まだ11時半ですが……」

修司は照れ笑いを浮かべながら、

「もうすぐ昼食の時間ですから、ご一緒にどうかと思ひまして。奢りますよ」

と答える。

「そうでしたか。……お誘いはすごく嬉しいんですけど……。ハーブの様子をもう少し確認しなくてはいけないので、町まで出かける時間の余裕はないんです。せっかく声を掛けていただいたのに、申し訳ありません」

アキが困っている様子を見て、修司は慌てて手を振った。

「いいいえ。こちらこそ、急なお誘いをしてしまって……。気にしないでください。じゃ、1時にまた来ます」

と言に残し、町へと戻っていった。

その姿を見送りながら、アキは小さくため息をつく。

アキが木の葉の里に來た頃、修司は妻を病気で亡くしていた。その後半年もの間、悲嘆に暮れ続けて家に引きこもっていたところ、周囲からサロンでの施術を勧められたのだ。深層心理への接触を行ったあと、朔日草でのケアを1ヶ月ほど続けたところ、ずいぶん前向きになり、ふさががちだった表情も今では明るくなっている。以来、修司はアキへの感謝の気持ちを表そうとサロンに通い、靴屋に來店する人々への宣伝活動も行ってくれていた。とてもありがたい思っ
てはいたものの、最近アキの都合を考えずにほぼ毎日誘いにやってくるので、少し重く感じ始めていた。

「せっかく誘ってくれたのに」

背後から、カカシの声が聞こえた。振り向いたアキは、軽く会釈して挨拶する。

「ああ、カカシさんも來てたんですねですか」

「ええ、本を返そうと思って」

カカシとは、読書友達のような関係が築かれている。イチヤイチャシリーズはまだしも、メロドラマのような表紙の女性向けロマンス小説はさすがに自分で買えないようで、時々アキから借りては自宅で楽しんでいるらしい。外出時は、今でもイチヤイチャシリーズを携えている。

「じゃ、新しいのを持っていきますか？」

「え？ あるんですか？」

「すごいのが」

と言いつつ、アキはニヤリと笑う。

「ぜひ！」

家に入ろうとしたアキは、カカシに「どうぞ」と声を掛けながら振り向く。すると、遠くで修司がこちらを見つめているのが目に入った。アキが自分に気づいたと分かったとたん、慌てて背を向け、走り去る。アキがまた小さくため息をついたのに気づき、カカシが尋ねた。

「どうしたんですか？」

相談するほどの問題でもないのです、アキは首を横に振った。

「……いえ、何でもありません。」

1時になる10分前に、修司はサロンにやってきた。

リラクゼーションチェアに横になりながら、

「さっき、はたけ上忍が来てましたね」

と、どこか責めるような口調で質問する。

「……ええ、本を返しに。ついでに新しい本をお貸ししただけですよ」

修司の保護者めいた態度に辟易したが、アキは無理に笑顔を作った。

「そうですか……。いえ、私の誘いを断ったのは、はたけ上忍との約束があったからなのかと、少し心配に……」

「本を渡したら、すぐに帰りました」

どうしてこんなことを説明しなくてはいけないのだろう……。確かに、修司のおかげでお客様は増えている。しかし、自分の私生活について細かく説明する義務はないはずだ。

アキの考えを読んだように、修司が言い訳めいた口調で言った。

「はたけ上忍は里で尊敬されるすごい人ですが……。一人身の男性を気軽に家に入れるのは、やはり心配ですね」

「……そうすると修司さん、あなたもということになります。一樂の店長も、ヤマトさんも、それにナルトさんやサイさん、キバさん……。挙げればキリがありません」

とうとうアキの笑顔が消え、眉をひそめるのを見て修司は動揺した。

「す、すみません！　そうですよね！　私はただ心配で……」

「……もうこの話は止めましょう。心配してくださるのは嬉しいですし、サロンを気にかけてくださることに感謝しています。ただ……。なんて言えればいいのか……。私の交友関係については、あまり詮索してほしくないというか……」

どう伝えれば良いのか分からなくて、アキは言いよどむ。

修司はうつむいてアキの言葉を聞いていたが、急に顔を上げ、

「アキさん、私と結婚してください!」

と声を張り上げた。

「・・・は?」

突然の申し出に驚き、アキはその場に固まった。

「え・・・っと・・・。え? 結婚?」

アキは修司の足元に跪いたまま、硬直している。修司は身を起こし、アキと向かい合った。

「はい。最近、ずっと考えてました。・・・亡くなった妻への思いを断ち切れたのは、アキさんのおかげです。そして、未来のことを考え始めた。そうしたら、今度はつねにあなたのことが頭から離れなくなりました」

修司の真剣なまなざしに、アキはたじろいだ。

「それは、愛情の置き換えというか・・・。奥さんへの思いが強すぎて、私を代わりにしようとしているのでは・・・? ストックホルム症候群・・・は少し違うか・・・。ええと、なんて言えばいいんでしょう。混乱しているので、うまく言葉が出てこないんですが・・・」

しどろもどろに答えるアキに、修司はニツコリと笑いかけた。

「妻の代わりだなんて思ってます。私は、アキさん自身が好きになったんです。あなたが元夫にひどい目に合わされたのは知ってますから、結婚を躊躇されるお気持ちちは良く分かります。私なら絶対にそんなことをしません。大切にします」

「はぁ・・・。結婚に対しての躊躇とか、暴力が心配とか、そういうことではなく・・・」

「すぐに返事が欲しいという訳ではありません。ぜひ、じっくり考えてください。アキさんの答えが出るまで、私は待ちます」

修司はそう言いながら靴を履き、

「じゃ、今日はこれで帰ります。ああ、やっと言えた!」

と、晴れ晴れとした表情で出ていった。

「・・・やっと言えたって・・・。マッサージはなしってことではないのかな・・・」

修司は告白してすっきりしたかもしれないが、その場に残されたアキは途方に暮れるだけだった。

結婚を申し込まれたことで、最近の修司のおかしな言動の理由が分かった。しかし分かったことによって、ことがかえって面倒になったような気がする。

キザシとの結婚は形だけのものだったし、それまで男性と付き合い合った経験もない。木の葉の里に来てからはサロンや何やらで忙しく、特定の男性と親しくなることもなかった。

はつきり言えば、男性に告白されたのはこれが初めてだ。

「どうしよう・・・」

修司のことは嫌いではなかったが、だからといって結婚までは考えられない。

誰かに相談したいが・・・。

「綱手様だと、修司さん呼びつけて怒鳴りそう。シズネさんは・・・うん・・・恋愛に無頓着な感じだし・・・。サクラさんやヒナタさんは若すぎる。こういうこと、男性には相談できないしなあ・・・。えーっと、あと相談できそうな女性というと・・・」

アキが悶々と悩んでいると、

「こんにちは」

と玄関の方角から声がした。次の予約客がやってきたのだ。

あれからずっとリラクゼーションチェアーの前に蹲り、考え込んでいたことに気づき、慌てて立ち上がる。

玄関へ向かうと、ヤマトが立っていた。

「あれ？　なんだか顔色が悪いですよ。今日は帰りましょうか」

「・・・そうですか？　ぜんぜん平気ですよ。どうぞ中へ」

アキは気持ちを切り替えようと、満面の笑顔を作った。

「今日のアキさん、なんだか変なんですよ」

カカシに会ったヤマトは、心配そうな表情で言った。

「そう？ 午前中に会ったときは普通だったけど……。でも、言われてみれば少し変だったかも。変というより、心配事があるような、そんな感じ」

カカシはふと、アキを食事に誘っていた修司のことを思い出した。

「うーん、あの靴屋の主人が関係しているのかな」

「え？ 最近よくサロンで顔を見かけるあの人？ 去年、奥さんを亡くしたっていう……」

「うん。食事の誘いは断ってたけど、その後、なにやら考えこんでいたような……」

「ふうーん。気になりますねえ……」

「なんで？」

カカシの問いに、ヤマトは眉間に皺を寄せながら答えた。

「すぐく顔色が悪かったんですよ。マッサージは次の機会でいいって言ったら、大丈夫って言うので受けたんですが、ずっと心ここにあらずで。マッサージで眠らなかったのは、今日が初めてですよ」

「要するに、気持ちよくなかったってことね」

「だって、いつものアキさんらしくないんですよ？ 足を握り締めたまま動かなくなったり、急に大きなため息をついたり……。気になって、寛ぐどころじゃないですよ」

「なるほどね。でも、オレに言われてもねえ……。直接聞いてみればよかったのに」

「聞きましたよ、『何かあったんですか』って。でも、『あつ、私ったら……。ごめんなさい。ちよつと考え事があって……。でも、もう大丈夫！』と言って、必要以上に元気なフリをするんです」
ヤマトはため息をついた。

「アキさんが落ち着くまで、しばらくマッサージは遠慮したほうがいいかもしれませんね」

するとカカシは

「タダでやってもらってるんだし、もっと遠慮してもいいんじゃない？」

とからかった。

その日の施術が終わると、アキは一楽へ向かった。

（今日はほんと、お客様に迷惑掛けてばかりだったなあ……。お詫びに無料券を差し上げたけど……。また来てくれるかな……。）
 時間に余裕があれば心を落ち着けてから施術に当たりたかったが、今日は予約がびっしり入っていた。集中しようとするが、ふと修司のことが思い出され、身が入らなかったのだ。

（私が混乱していると、お客様にも伝わってしまう。反省しなきゃ・・。）

今夜は朔日草を使おうと考えながら、うつむき加減でとぼとぼ歩く。すると、サイが声を掛けてきた。

「こんにちは、アキさん」

アキがとっさに笑顔を作って挨拶を返すと、ジッと顔を覗き込まれた。

そして

「笑顔がこわばってますよ」

と言いながら、サイは両手でアキの頬を挟み、ぐりぐりと回し始めた。

「さ・・・サイさん？」

「表情筋を柔らかくしてあげますよ。作り笑顔はけっこう疲れますからね」

「・・・・・」

道行く人が皆、二人の様子を面白そうに眺めていく。

「も・・・もう大丈夫。ありがとう」

アキはサイの手を取り、頬から離れた。

「ほら、顔色がよくなった」

サイは満足げに微笑む。

「・・・ありがとう・・・。今、一人なの？ ナルトさんやサクラ

さんは？」

「さあ？ 今日のは休日ですから。僕は図書館から帰ってきたところ
です」

サイは本を数冊掲げて見せた。

「アキさんは？」

「一楽に行くところ」

「僕も行こうかな」

「じゃ、一緒に行きましょうか」

サイと並んで歩きながら、アキは

(アカネさんに相談しようと思ったんだけどな)
と心の中でつぶやいた。

一楽に着くと、いつもより口数の少ないアキに気づいたアカネが、
怪訝な顔をした。

「何か心配ごとでもあるんですか？」

「ええ、ちょっと……。アカネさん、お店が終わってからお話で
きませんか？」

アキの申し出を聞いて、店長が両腕を組んだ。

「なんだ。相談ごとなら、オレも聞くぜ？」

隣に座っていたサイも、

「僕でよかったら、聞きますよ。アキさんにはいつもハーブティー
をもらってるし、できることがあれば協力します」

と身を乗り出す。

3人に見つめられ、アキは困り顔になった。

「ええっと……。そんなに大げさなことじゃないんですけど……」

。じゃ、ここだけの話にしてもらえます？ 絶対に口外しないでく
ださいね」

アキは簡単に事の顛末を説明した。

「ええー！ 結婚?!」

アカネの大声に、アキは慌てて背後を確認した。

「しー！ 大声出さないで……。ここ、人通りが多いし」

すると声をひそめ、アカネが聞いた。

「で、相手は誰？」

「それは……。内緒。一応、里で商売やってる人だし」

「ああ、私も結婚を申し込まれてみたーい」

夢見るような瞳でボーっとするアカネを、店長が渋い顔で睨んだ。

「アカネさん……。実際に申し込まれると、けっこう困るものですよ……」

相談する相手を間違えたと思い、アキが肩を落とすと、サイが冷静に尋ねた。

「それで、アキさんは断りたいんですよね？」

「ええ……。良い人なんだけど、結婚までは考えられなくて……」

「対処の方法は、まず敵を知ることが大事です。僕に任せてください。とりあえず、対象の名前を教えてくださいませんか？」

サイが立ち上がる。

「え？ まだラーメン食べてないし……。それに、その人は敵じゃないから……」

アキがサイを止めようとしたとき、

「なるほど。そういうことですか」

とカカシがサイの後ろに立った。

「カカシさん……。え？ もしかして、今の話……」

アキが慌てる。

「のれんの下からサイとアキさんの後姿が見えて、声を掛けようとしたら……。たまたま」

カカシが答えると、サイはニッコリ笑った。

「それで僕にも気づかれないよう、気配を消して話を聞いていたと」サイの指摘に、カカシは苦笑いを返した。

「ま、面白そうな話だなーと思ってね。とりあえず、ラーメンを食べよう」

カカシが椅子に座ると、サイも隣に腰を下ろした。

その後はとくに対策を練るでもなく、ラーメンを食べただけで帰ることになったが、最後にサイは

「情報収集は、僕に任せてください」

と言いつつ、自宅へと帰っていった。

「結婚の申し出を断るのに、情報収集って必要なんですか？」

アキが聞くと、カカシは笑った。

「ま、どういう言葉を選ぶべきか、どんなタイミングで切り出せばいいか、その辺は分かるかもしれませんが」

「だいいいんですけど・・・」

「お相手は・・・もしかして、靴屋のご主人？」

アキの驚いた表情を見たカカシは説明した。

「ヤマトから、アキさんの様子がおかしいって聞きましたね。オレが行ったときは普通だったのに、オレが家に入ろうとするのを彼がジッと見ているのに気づいたとき、アキさんの表情が変化したってことを思い出したんです」

アキはカカシの観察眼の鋭さに感心した。

「気づいてたんですか・・・」

「あのときは食事に誘われただけのようですが？」

アキはうつむいた。

「ええ……。あのあと予約が入っていて、施術を始めようとしたら、急に……。何しろ初めての経験で、もうどうしたらよいのかまったくわからなくて。施術になかなか集中できず、ヤマトさんにも申し訳ないことをしました」

「いや、アイツはどうせタダでやってもらっているんですから、どうってことないですよ」

「それでもお客様ですから……。とにかく、今の話は聞かなかったことにしてください。サイさんが情報を集めてくれるのなら、それを元に自分で考えることにします」

思いがけず多くの人に知られたので、アキは気まずさを感じていた。
「そうですか。なら、そういうことで」

「じゃ、今日はこれで……。お休みなさい」

カカシは片手を挙げて挨拶しながら、さりげなくチラリと扉の影に視線を送る。そして、何事もなかったかのようにそのまま歩き去った。

日が落ちるとアキの家の周りは真っ暗になるが、今夜は月が明るく照らしている。ハーブ畑をのんびり横切りながら月を眺めていると、背後になんとなく気配を感じて振り返った。

「こんばんは」

ニッコリ笑う修司が立っていた。

「外で食事をするなら、私も誘ってくれればよかったのに」

アキは背筋に冷たいものを感じながら、無理に笑顔を作った。

「本当は一人で一楽に行くつもりだったんですが……サイさんとカカシさんは、偶然ご一緒したんです」

修司はアキに近づいた。

「じゃ、食後のお茶をご一緒したいのですが」
家に入れてほしいということなのだろうか。

アキは不安を感じながら答えた。

「でも、これからやらなくてはいけない作業が残っていて……。
また次の機会に」

すると、修司の顔から笑顔が消えた。

「どうして……。忍者の人たちはしょっちゅう家に入っているのに、
どうして私は施術のときだけなんですか？」

「……。え？」

「いつも彼らには『お茶でも飲んでいきますか？』って声を掛けて
るのに」

「だって……お友達ですから……」

修司がアキの腕を掴む。

「私とは親しくできないってことですか？」

「・・・痛い・・・。離してください・・・」

アキが言うと、修司はハッとしたように腕を離した。

「すみません。でも・・・。私があなたと結婚したいという気持ちは、本気ですから。それだけは忘れないでください」

そして、その場を逃げるように走り去る。

修司の行動に恐怖を感じ、アキも家へと急いだ。

その日の夜遅く、ベッドに入っていたアキは、窓をコツコツ叩く音で目覚めた。

ベッド脇の窓に目をやると、サイが覗き込んでいる。窓を開けると、サイがソツと音を立てずに入ってきた。

「こんな遅くに、すみません。それにしても・・・驚かないんですね。こんな状況なのに」

「ええ、皆さんはお友達ですし。窓からの登場にも慣れました」アキは微笑む。

キッチンへ移動すると冷蔵庫で冷やしていたハーブティを取り出し、サイに渡した。

「どうも・・・。ところで、帰り道に修司さんと出会ったようですね」

「ええ・・・って、なんで修司さんだと知ってるの？ カカシさんから聞いたの？」

アキが尋ねると、サイは笑顔になった。

「僕たちの様子をずっと伺っている人物がいたんです。帰宅するフリをして戻ったら、その人がアキさんの後をつけていたので、すぐに分かりましたよ。カカシ先生も気づいてましたが、僕がついていたので、そのまま帰宅したようです」

「え？ いつから？」

驚いたアキが尋ねると、サイはアゴに手を当てて考えるポーズを取った。

「そうですね……。僕が道でアキさんにマッサージをした頃からかな」

「え？　もしかして、それで一緒に来てくれたとか……」

「いえ。そのときは、純粹にラーメンを食べようと思っただけです。アキさんの話を聞くうち、僕たちをつけていたのはその人かと」

朔日草を使い、心を落ち着けてから眠りについたのに、アキは再び背筋が冷たくなるのを感じた。

「あの後は素直に家に帰ったようですが……。この調子だと、結婚を断つてもしばらくは付け回されるかもしれませんよ」

「そんな……」

アキは言葉を失った。

「奥さんを亡くした喪失感を、アキさんで埋めているのでは？」

サイが言うと、アキは頷いた。

「確かに……。それは私も感じていました。でも、その喪失感をケアしたつもりだったのに。私、施術で何か間違えたのかな……」
修司には、朔日草を使ってかなり念入りの施術を行った。通常なら、常軌を逸した行動など起こさなはずなのに……。

「完全に立ち直る前に、何かきっかけがあったのでは……？」

サイの問いに考え込んだアキは、何かを思いついたようにハッと顔を上げた。

「そういえば……」

修司の冷たい悲しみに触れていたとき、親しい人を亡くした経験のあるアキの心が同調し、絡み合ったことを思い出す。アキはすでに悲しみに対処していたのでそのままやり過ぎしたが、まだ暗闇の中にいた修司の心は、その同調を恋愛感情と勘違いしたのかもしれない。

「私のせいだ……。もっと気を配るべきだった……」

アキはがっくりと肩を落とした。

「もう一度施術すれば、心に残っているひずみを消せるかもしれないけど……。修司さんが施術に承諾してくれるかどうか……」

アキの腕を掴んだときの修司の表情を思い出すと、承諾を得るのは無理のように感じられた。

「施術についてはあとで考えましょう。とりあえず今は、早めに警備を依頼するか、事情を知る人の家に滞在したほうがいいと思います。この場所は孤立しているし、何か起きてもすぐに助けは来ませんからね」

「そこまでする必要があるのかしら？」

アキの問いに、サイは首をかしげた。

「だって、さっきは危なかったですよ。もう少しで助けに飛び出すところでした」

アキは修司に掴まれた辺りをさすった。

「確かに、少し怖かったかも……。でも、事情を知る誰かの家といっても、一楽さんとサイさんとカカシさんだけだし。それに、彼がキザシのようになるとは思えない」

サイはニツコリして

「それでも、万が一ということがあります。修司の施術を行うまでは、身の回りに気をつけてください。一楽のおやつさんにはもう話してあります。快く泊めてくれると言っていましたよ」

と言った。

「お邪魔じゃないかしら・・・」

アキが躊躇すると、サイは窓から身を乗り出し、外へ出ながら答えた。

「それどころか、ぜひ来てほしいって。たぶん、仕事後のマッサージを期待しているんじゃないかな」

翌日の朝、アキがハーブの種をまいていると、アカネがやってきた。
「アキさん、サイさんから話は聞きましたよね？　今夜からうちにいらしてください。開店後は何もできないので、今からうちへ案内します」

アキは立ち上がり、洋服についた土を払った。

「わざわざありがとう。・・・少しだけ待ってもらえますか？」

アキは家に入ると、手早く荷物をまとめた。

「じゃ、行きましょうか」

アキとアカネが並んで町へ向かっていると、カカシとヤマトに出会った。

「はたけ上忍！　今夜から、アキさんはうちに泊まることになったんですよ」

アカネが言うと、ヤマトが驚いた顔をした。

「どうして？　家が傷んだんですか？　だったらすぐに直し・・・」

「いや、いいんだ。ちよつと事情があってね」

カカシがヤマトの言葉をさえぎる。

「事情って何ですか？」

「ひみつ」

「えー？　アキさん、何かあったんですか？」

ヤマトに詰め寄られ、アキは困り顔になった。

「いえ・・・。たいしたことでは・・・」

カカシはヤマトの肩に手を置き、頭を振った。

「しつこいぞ、ヤマト。人にはそれぞれ言えない事情ってものがあるんだ」

「・・・わかりました」

ヤマトは渋々引き下がった。

「でもアキさん、僕はいつもタダでやってもらってるし・・・。困

ったことがあるなら喜んで力を貸しますから、遠慮せずに言ってくださいね」

ヤマトの言葉に、カカシが頷く。

「確かに。こいつ、こう見えてもけっこうすごい忍術使いですから。家を建てる以外にも、いろいろできちゃうんですよ。何かあったら、頼るのが正解です」

アキはニツコリ笑った。

「知ってますよ。ナルトさんからいつも自慢話を聞かされていますから。修行ではすぐ助けられたって言ってたし」

話している途中、アキの袖をアカネが引っ張った。

「あの・・・開店の準備もあるので・・・」

「あっ、ごめんなさい。じゃ、私たちは行きますね。ヤマトさん、昨日は集中できなくてごめんなさい。近々、また来てくださいね」

そう言うと、アキとアカネは急いでその場を去った。

その姿を見送りながら、ヤマトがつぶやく。

「先輩・・・？」

「ああ。後ろでずっとこっちを覗いてたあいつが、アキさんの心配のもとだ。事を大きくしたくないからって口止めされてたけど、一応、お前にも説明しといたほうがいいかもな」

ヤマトはまじめな顔で頷いた。

「そうですね。それにしてもアキさん……。男運がとことん悪いようですね」

「じゃ、アキさんは私の隣の部屋ね。荷物置き場に使ってたから、ちょっと狭いけど・・・」

扉を開けながら、アカネが説明する。

「これで十分です。寝るだけですから・・・」

アカネは時計を確認し、

「いけない！ そろそろ店に行かないと……。道は覚えましたよね？」

と慌ててアキに鍵を渡す。

「これ、うちの鍵です。サロンの用事が終わったら、直接こっちに来ちゃっていいですから」

アキが頷くと、

「じゃ！ また今夜！」

と言い残し、部屋から飛び出していった。

（もとはといえば、私の力不足が原因なのに……。修司さんを悪者にしてしまったようで、なんだか申し訳ない気がしてきた……。アカネに相談しようとしたことで、話を本来のものより大きくしてしまったように感じ、アキは罪悪感を覚え始めていた。

（私がほかの人に話してしまったから、修司さんは余計にムキになってしまったのかも……。）

考えれば考えるほど、自分を責めてしまう。気がつく、背中を丸めて地面を見つめながら歩いてた。

（いけない、いけない。今日も1時から予約が入っているし……。それまでにハーブの手入れを終わらせないと）

急いで畑に向かったアキは、目の前に広がる光景に愕然とした。

成長途中のハーブや咲きかけの花々が、無残にむしりとられている。駆け寄って確認してみると、荒らされたのは畑のおよそ3分の1程度。ほとんどが手折られているため、植え替えはほぼ絶望的だった。

「うそ……。」

泣きそうになりながら、すでにしなびかけている植物を集めていく。ドライハーブとして使えそうなものをより分けてカゴに入れ、ダメなものは畑の端にまとめた。

一通り片付けるとカゴを持って家に入り、保管室として使っている部屋に置く。

キッチンへ移動し、寂しくなったハーブ畑を窓から眺めた。

（今回成長したものは、蒸留して精油にしようと思っていたのに……。私が家を空けたのは1時間くらい？ いったい、何が起きたん

だろう？)

すると、1時に予約を入れた客がこちらに向かってくるのが見えた。アキは両頬を手でパンと叩き、気持ちを奮い起こす。呼吸を整えてから、玄関を開けた。

「いらっしやいませ。お待ちしていました」

その日の予約を全部終えて一人になると、アキはテーブルに突っ伏し、仕事を振り返った。

(昨日と比べると、今日はなんとか無事にやり遂げたほうかな……。なんだか……。だんだん打たれ強くなっているような……。) それでもすべての気力を使い果たしたような疲労感を覚えており、立ち上がることができない。

テーブルに顔を乗せてボーッと窓を眺めていたら、ふいにサイの顔が現れた。

「こんにちは」

と挨拶してから家を回り、玄関から入ってくる。

「まだ一楽の自宅へは行かないんですか？」

アキはなんとか身を起こすと、首をもんだ。

「ええ……。今朝、ハーブ畑が荒らされてたの。使えそうなものは拾っておいたから、これからその処理をしないと……」

「修司の仕業でしょうか？」

アキは力なく首を振った。

「荒らしている現場を見たわけじゃないから。もしかすると、野生動物の仕業かもしれないでしょ？」

「だといんですが」

と言いながら、サイは冷蔵庫を指差した。

「アイスハーブティ、いただいてもいいですか？ ……あ、いいですよ。自分で入れますから、アキさんは仕事の続きをどうぞ。それが終わったら、一楽さんちまで送ります」

保管室へ向かっていたアキが、ふと立ち止まる。

「その件なんだけど・・・。不在の間に畑が荒らされたでしょ？
やっぱり、自宅にいたほうがいいんじゃないかと思って・・・」
サイはコップをテーブルに置いて、首をかしげた。

「だからよけいに、一人でここにいちゃいけないんですよ・・・
まだ警備の依頼はしてないんですよね？」

アキは頷き、

「必要ないかと思ってたんだけど・・・。畑を荒らされたとなると、
損失は大きいわよね。警備の依頼、しようかな」とつぶやいた。

任務の依頼ついでに火影室に寄ると、

「久しぶりだな、アキ！」

と綱手が書類から顔を上げ、迎えてくれた。

「薬が完成したとき以来かな。サロンはどうだ」

「おかげさまで、軌道に乗りました。でも・・・」

アキが依頼の内容を伝えると、

「畑が荒らされたのか。見張るだけなら、現在訓練中の下忍で十分
だな。すぐに手配するから、安心しろ」

と、大きな胸を叩いた。

「最近、サロンにいらっしやいませんね。お忙しいのですか？」

アキが聞くと、綱手は大きなため息をついた。

「行きたいのだが・・・平和なら平和で、何かと書類仕事が多くて
な」

「そうですか。今日はバタバタしていて用意する時間がなかったの
で、今度来るときは入浴剤を作ってきますね」

「おお、助かる！」

「では、また近々お伺いします」

机の上に重なっている膨大な書類を見たアキは、早めに立ち去った
ほうが良さそうだと判断して暇を告げた。

その後アキは一楽へ寄り、警備を依頼したので自宅で過ごすことにしたと伝えた。

「えー？　今夜は語り明かそうと思っていたのに」

アカネは残念そうにしていたが、手間をかけたお詫びに次回はマツサージをサービスすると伝えると、顔を輝かせた。

「じゃ、お時間があるとき、遠慮なく声を掛けてくださいね」

そう言いながら一楽を出ると、男の子2人、女の子1人を連れたヤマトが現れた。

「アキさんの依頼、僕とこの3人で遂行することになりました」

「ヒビキです」

「ゲンタです」

「ヤオイです」

アキは子供たちにニッコリ笑いかけ、

「私はアキです。よろしくね」

と挨拶する。

「先日アカデミーを卒業したばかりでまだまだひよっこですが、私がしっかり監督しますから、安心してください」

ヤマトが言うところ3人はふくれっ面になったが、意外にも反論はしなかった。

「ひよっこだなんて・・・みんなが来てくれて、とても心強いわ」

アキの言葉に、一番小さなヒビキが顔を輝かせる。

「頑張るよ！」

「よし。じゃ、行きましょうか」

ヤマトを先頭に、5人はアキの家へと向かった。

「ほんとに・・・畑がずいぶん小さくなりましたね」

本来より一回り小さくなったように見える畑を見て、ヤマトが言っ

た。

「ええ。でも、使えるものもけっこうありましたから、被害は思ったより小さく済みました。ただ、これ以上荒らされちゃうと、サロンの運営に影響してしまいます」

ヤマトは3人の下忍に向き直り、指示を出した。

「じゃ、さっき説明した配置で、しっかり見張るんだよ。居眠りなんかしちゃダメだからね。・・・散！」

掛け声と同時に、子供たちの姿はあっという間に消えた。

「すごい。まだ子供なのに、やっぱり忍者なんですね」

アキは感心した。

「いや、あいつらはまだまだですよ。・・・ところで」

ヤマトが真顔になって言う。

「アキさんが置かれている状況については、昨日、カカシ先輩から聞きました」

驚いたアキが何か言おうとするのを片手を挙げて止め、話を続ける。
「どちらにしても、任務を引き受けたら聞く必要がありますから。アキさんの様子がおかしかったのは、その修司という男が原因なんですね？ 畑を荒らしたのも・・・」

アキは慌てて手を振った。

「それは分かりません。誰も現場を見てないんですから。・・・とにかく私は、ハーブを守りたいだけです」
小さくため息をついて、ヤマトが頷いた。

「『疑わしきは罰せず』ですね。とりあえず、畑を荒らした犯人が分かるまで警護します。僕も配置に着くので、何かあったら窓から合図を送ってください」

そう告げてヤマトが姿を消すと、アキは家に入った。

翌日の朝、アキが窓から顔を出すと、ヤマトと子供たちが目の前に集合した。

「ゆうべは何も現れませんでした。昼間は交代で休みますが、必ず

誰かがここに残っているので安心してください。とりあえずゲンタとヤオイ、先に休憩に入っているよ」

二人が去る後姿を、ヒビキが寂しそうな表情で見送った。

「お二人とも、一緒に朝食はいかが？ 簡単なものしかないけど」アキが誘うと、ヒビキのお腹がキューッと鳴る。

ヒビキに上目使いで見つめられたヤマトは、苦笑いしながら

「・・・おいおい・・・。仕方ないな。じゃ、遠慮なく」

と申し出を受けることにした。

ものすごい勢いで食事をかきこむヒビキに、アキが尋ねる。

「ヒビキくんは何歳なの？」

「11歳！」

「そう。・・・やっぱり、ご両親も忍者なの？」

ヒビキの手が止まる。

「・・・忍者だったけど・・・母さんはオレを生んだときに、父さんは2年前に死んだ」

「あ・・・。ごめんね、イヤな質問しちゃったね」

アキが謝ると、ヒビキは再び食事に手を伸ばした。

「別にいいよ。もう慣れたし」

ヤマトは黙って食事をしている。少し考えてから、アキは言った。

「いつも食事はどうしているの？」

「うーん・・・。適当に。オレ、朝は弱いから・・・食べないこともある」

その答えを聞いて、アキはヒビキに身を寄せた。

「・・・私もね、去年両親を亡くしたの。身寄りもなくて、食事はいつも一人なんだ。よかったら、ときどきうちに来て食べない？」

豪華なものは用意できないけど」

驚きの表情を浮かべ、ヒビキはアキを見上げた。

「え？」

「二人で食べたほうがおいしいでしょ？ そんなにおいしそうに食べてくれるなら、私も作りがいがあるし」

ヒビキはヤマトのほうをチラリと見た。

「・・・いいと思うよ。育ち盛りだから、しっかり食事を摂ったほうがいいしね。ただ、食材はきちんと提供するように」

ヤマトが言うのと、ヒビキは嬉しそうに頷いた。

それから

「ところで僕も、身寄りがいなくて一人で食事を摂ってるんですけどね」

と、いたずらっぽく付け足す。

アキが笑いながら

「ヤマトさんはもう、立派に成長してるから」

と答えると、ヒビキも

「そうだ、そうだ。ヤマト先生まで来ちゃったら、アキさんが大変になっちゃう」

とふざける。

「ふーん。この僕に、そんな生意気なことを言っているのかい？」

ヤマトが顔を覗き込むと、ヒビキは青ざめ

「・・・す、すみません・・・」

と小さくなった。

「ごちそうさまでした。・・・さて、任務に戻ろうか」

ヤマトが立ち上がると、ヒビキはモジモジした。

「せ・・・先生。オレ、トイレ・・・」

「つたく、仕方がないヤツだな、ほんとに。すみません、コイツにトイレを貸してやってくれませんか？」

「どうぞ」

ヒビキをトイレに案内してアキが台所に戻ると、ヤマトは食器を流しに片付けていた。

「そのままでもいいですよ。あとで私がやりますから。それにしても・・・みんなかわいい子たちばかりですね」

「いやいや。もう、毎日とんでもないことばかりしでかすので、冷

や汗をかきっぱなしです」

二人が笑っていると、ヒビキがすっきりとした表情で戻ってきた。

午後になるとゲンタとヤオイが戻ってきたので、ヤマトとヒビキは帰宅した。

アキは予約客の対応に追われ、何事もなく1日が過ぎていく。

日が暮れてヤマトとヒビキが戻ってきたときも、こちらに向かう途中で気になるようなものは見かけなかったと言っていた。

ベッドに入る頃には、もう何も起こらないのではないか・・・とアキは思い始めていた。

翌日の朝、みんなを朝食に誘おうと扉をあけると、すぐ目の前にヤマトの背中があった。何かを警戒しているようで、緊張感が伝わってくる。

「おはようございます。・・・どうしたんですか？」

ヤマトの視線を追うと、畑の向こうからこちらを睨んでいる修司の姿が見えた。

アキに気づくと、ゆっくりこちらに歩いてくる。

「おはようございます、アキさん。こんなに朝早く、どうしてヤマト上忍がいるんですか？」

先日会ったときより、修司の目つきが鋭くなっている。

「畑を荒らされたので・・・警備を頼んだんです。今は見当たりませんが、ほかにも3人、この辺りにいるはずですよ」

アキが答えると、修司はジッと黙り込んだ。

「それで、修司さんこそ、朝早くにどうしたんですか？」

アキが尋ねると、ヤマトを押しつけるようにして進み出る。

「実は・・・この間の返事をいただきたいと思います」

「そ・・・そうですか・・・」

朝食時に何を言い出すのかと、アキは戸惑う。

「ええと・・・これから任務についている皆さんと朝食をと思ったんですが、修司さんも一緒に食べますか？」

アキが尋ねると、

「いえ、二人きりで話したいですね。返事を聞くだけですから、済んだらすぐに帰ります」

と、修司は苦い表情で答えた。

ヤマトが尋ねるような視線を送ってきたので、アキは頷いて、修司を中に通す。

「僕はここにいますから、何かあったら声を掛けてください」

修司に厳しいまなざしを投げながら、ヤマトは言った。

アキが扉を閉めると、修司は切羽詰ったような表情でアキの肩を掴む。

「困ったことがあったのなら、私に言ってくればいいのに。アキさんにとって、植物たちがどんなに大切な、私は知っています。どんなことをしても、必ず助けますから。私ならタダですし」と言いながら、ドアヘチラリと目を向ける。

「いえ……。料金を払って、任務としてやっていただいたほうが気が楽ですから」

アキは少し後ろへ下がり、修司の手から逃れてテーブルに着いた。

「どうぞ……。座ってください」

あまり長居はしてほしくなかったので、あえて飲み物は出さなかった。

修司はアキの向かいに座ると、テーブルの上で手を組む。

「修司さん、どうして今、返事を聞きたいんですか？ 待つと言っていたじゃないですか」

アキが問うと、狂気じみた視線を投げかけてきた。

「だって……。結婚を申し込んだ私より、忍者ばかりと会っているじゃないですか。畑を荒らされたことだって、私じゃなく、彼らに相談したんでしょう？ あなたのことを一番思っているのは、私なの」

「……。そのことなんですが……」

アキは居住まいを正し、説得を試みることにした。

アキの話を一通り聞いた修司は、激しく頭を振った。

「どうして私の気持ちを消さなくてはいけないんですか？ 私は・
・私があなたと結婚したいという気持ちは、確かなものです」

「消すんじゃないありません。私の間違いを修正するんです。大切な人を失った悲しみに私が同調したことで、あなたの心にほんの小さな亀裂が入ったはず。それを愛と勘違いしているだけで・・・」

「勘違い？ 私を侮辱するつもりですか？ 結婚を申し込むほど本気だったんですよ？ それを・・・」

修司は唇をわななかせ、必死に怒りを抑えようとしている。アキは途方に暮れ、どうすれば分かってもらえるのかと頭を悩ませていた。そのとき、外が急に騒がしくなった。

「ちょっと、何してるんですか？！ やめなさい！」

ヤマトが怒鳴る声に続き、

「離してよ！ あの女が・・・あの女さえいなければ・・・！」

と、女性が叫ぶ声が聞こえる。何事かと、アキは窓から外を覗いた。

「あれ？ あの女、修司さんのお店の方じゃ・・・？」

アキの後ろから外を覗いた修司は、

「あいつ・・・何してるんだ？」

と驚き、先ほどの怒りが一気に萎んだ。

外では修司の店の店員が、ヤマトに後ろから羽交い絞めにされ、足をばたつかせて抗っている。その周りで、どう対応したらわからない様子のヒビキたちが、オロオロした様子で見守っていた。

「あ、修司さん！」

修司に気づき、女性の体から力が抜けた。

「京子、お前、ここで何をしている？」

京子のもとへ近づき、修司は尋ねた。その質問には答えず、京子はその場にぐず折れる。

「この人、いきなり植物をむしり始めたんですよ」

ヤマトが説明すると、修司は京子の腕をつかんで立ち上がらせた。

「お前だったのか？ アキさんの畑を荒らしたのは？！」

京子は修司から顔をそむけ、アキを睨んだ。

「そうですよ。こいつに早く出ていってほしいから」

「何を・・・？！ どうしてアキさんの営業妨害をする必要がある？」

驚く修司に向き直ると、

「なんでこんな女がいいんですか？」

と顔を歪めて尋ねた。

「お前には関係ないだろう？」

修司が答えると、京子の目に涙が溢れ出した。

「・・・奥様が亡くなってから家に引きこもっていたあなたを励まし、店を支えたのは私だった。ずっと、半年もの間！ この女が良くしてくれるだろうって聞いたから、勧めたのに・・・かえっておかしくなったじゃない。いつも『アキさん、アキさん』ってそればかり。何をされたんですか？ 惚れ薬とか、何か怪しいモノでも飲まされたんですか？」

京子の言葉に、アキはたじろいだ。

修司が引きこもっていた家へ訪れたとき、京子とは何度か顔をあわせたことがある。いつも修司の後ろに控えており、小さなことにも良く気がつくにこやかな女性だった。しかし最近は偶然道で出会っても、睨まれるかそっぽを向かれるだけで、何か気に障るようなことをしたのかと不思議に思っていたのだが・・・。

「もしかして京子さん、修司さんのこと・・・」

「うるさい！ 変な薬を使って男をたらしこもうとする薄汚い女が、なれなれしく話しかけるんじゃないよ！」

京子はアキに掴みかかろうとしたが、ヤマトが難なく引きとめ、ヒビキは両手を広げてアキの前に立った。

「アキさんは・・・アキさんは、優しい人だ！ このヒステリー女

！
」

ヒビキが怒鳴ると、京子は齒軋りしながら

「なんですって？　・・・そうか。あんた、男なら誰でもいいんだ

？　こんなガキまで騙しちゃうなんて・・・」

と吐き捨てるように言う。

アキはその場から走り去り、京子の中傷から逃げたいと思ったが、自分の至らなさが原因だと考え、踏みとどまった。

「・・・私がいけないんです。ごめんなさい。今、修司さんに説明してはいたんですが、足りなかった部分をもう一度ケアしようと・・・」

アキが言いかけると、修司が猛然と話を遮る。

「だから、それは違うといったじゃないですか。私は今のままでいい！」

「そうよ！　しおらしい顔をして『もう一度ケアをしようと・・・』ですって？」

京子も声を張り上げた。

「何をされるか分かったものじゃないわ！」

すると、それまでずっと黙っていたヤマトが口を挟んだ。

「とりあえず、彼女はこちらで拘束します。器物破損の現行犯ですね。修司さんも、一度お帰りください。ここでわめきあっているも、埒は明きませんから」

ヤマト一行は、二人を連れて帰っていった。

途中でヒビキが振り返り、一目散に駆け寄ってくる。

「ヒステリー女の言うことなんて、気にするなよ」

と言に残すと、すぐヤマトたちに合流した。

アキは一行が去ったあと、煙の中で呆然と立ち尽くしていた。

（なんか、状況がぐちゃぐちゃでよく分からない・・・）

考えをまとめようとするが、思いがけない人物の中傷に激しく気持ちがかき乱されている。

「ああ、もう・・・」

大きくため息をつき、家に引き返した。

この一件が落ち着かない限り、施術に集中することができないとアキは考え、今後1週間は新しい予約を受け付けないことにした。ほとんどの客は前日に予約を入れるので、今日の予定をこなせばあとはスケジュールが空くことになる。今後は荒らされたハーブ畑の手入れに集中することにしよう。

アキは時計を見た。

今は10時半。今日の最初の予約客は午後2時半に来る予定だから、まだ時間に余裕がある。昼までに種をまき、畑の状況確認をしよう。段取りを考えてから用具を用意し、外に出る。

すると、畑の向こうにナルト、サクラ、サイの姿が見えた。

「おい！」

ナルトが手を振り、走り寄ってくる。

「さっき、ヤマト隊長から話を聞いたってばよ。なんか、大変だったみたいだな」

「ええ・・・まあ・・・」

アキは説明する気力がなく、ぼんやりと相槌を打った。

「大丈夫ですか？　なんか、すっごく疲れてるみたい・・・」

ナルトに追いついたサクラが心配そうにアキの顔を覗き込む。

「ところで、ヤマト隊長からの伝言です。報告と処理はぜんぶやっておくから、今日はゆっくり休んでいてくれって」

「そうですか・・・」

ナルトはアキの肩を叩き、

「もー！　いつものアキさんらしくないってばよ！　元気出せって」と励ました。

励まされると、よけいにつらく感じるのはなぜだろう？　そう思いながら、アキは俯く。

「畑を荒らした犯人は、修司ではなかったようですね」

サイの問いに顔を上げ、アキは頷いた。

「ええ。修司さんのお店の店員さんでした。どうも・・・修司さんのことを好きだったようで、最近彼の行動がおかしいのは、私が何かしたからじゃないのかと勘違いしてしまったようです。・・・まあ、故意ではないとしても、私が原因を作ったのは確かですけど。彼女が怒るのは無理ないのかもしれないですね」

荒らされた畑を眺めながらアキが答えると、サクラが語気を強めて言った。

「アキさんがそこまで責任感じる必要はないと思いますよ。奥さんを亡くした悲しみは理解できますが、修司さんは半年もの間悲しみに暮れて、仕事もせずに家に引きこもってたんですよね。もともと精神的に弱い人だったんじゃないですか？ まして・・・あの女の人は、勝手な思い込みでアキさんを逆恨みしてるだけですから、気にする必要はありません。もう、アキさんは一人で何でも背負おうとしすぎです！」

「そうかな・・・」

自信なさげなアキを見て、ナルトはあっけらかんと言った。

「そうそう、サクラちゃんの言う通り！ 起きたこと全てが自分の責任だって思ってたなら、身が持たないぜ？」

「いずれにしても・・・」

サイが口を挟んだ。

「ここで立ち話もなんですから、そろそろ家に入りませんか？ 喉が渴いたし」

「ううん……。でもこれから、種まきをしようと思ったの」
アキは手に持っていた種の袋を持ち上げて見せた。

「種まきは明日にして、今日くらい休んだらどうですか？」

サクラはアキの腕を取り、家へ向かうよう促した。

「休息が必要そうな顔をしていますから」

「そうもいかないのよ。荒らされたぶんを早く取り戻さないとい……。でもそうね、せっかくみんなが来てくれたんだから、お茶でも飲みましょう」

アキはそう言いながら、『忍者の人たちはしょちゅう家に入っているのに、どうして私は施術のときだけなんですか？』と詰め寄った修司の言葉を思い出し、無意識のうちにつぶやいていた。

「確かにそうかも……」

「何がですか？」

サクラが不思議そうな表情を浮かべて尋ねる。

「……先日、急に訪ねてきても忍の皆さんは家に入れるのに、どうして自分を入れてもらえないんだって修司さんに責められたことを思い出したの」

するとサクラは声を上げて笑った。

「もう、そんなの当たり前じゃないですか。私たちとアキさんはお友達で、修司さんはただのお客さんだもん」

「まあ、そうなんだけど……。修司さんからすると、私とあなたたちも仕事関係に見えるのかも」

「えー？ だったらわざわざ様子を見に来ないってばよ」
ナルトに続き、サイも

「そうですよ。アキさんが依頼しなかったら、個人的に見張りをするつもりでしたから」
とニッコリ笑いかけた。

「まあ・・・そうだったの？」

アキは感激しながら、3人を招きいれた。

ナルトたちは午後の予約客が来る直前まで話していった。

会話の内容は他愛のないものばかりだったが、アキにとってかなりの気晴らしになり、その日の施術は滞りなく行うことができた。

「さて・・・これからどうしようかな」

修司の件が落ち着くまでサロンを休業することにしたが、種まきは明日の午前で終わるだろうから、しばらく時間が空くことになる。

先月は忙しくて両親の月命日に墓参りができなかったため、この機会に行こうかと思ったが、やはり修司の施術を終えてからでないと・・・とアキは思った。

修司の施術に必要なオイルを確認しようと保管室に入り、ドライハーブ類とともにテールブルの上に揃えていく。

「朔夜草、足りるかな・・・」

木の葉の里でも毎月満月の夜には朔夜草を探していたが、今も発見できていない。1年前に村から持ってきたものを、少しずつ大切に使っていた。しかし、それももうあとわずかしかない。やはり一度村に戻り、朔夜草を採集してから修司の施術に当たったほうが良さそうだ。

満月は3日後。

明日の種まきが終わったら、すぐに里を立とう。

2日後の朝、アキは村へと向かった。いつもと同じように夕刻に隣村に着き、宿屋に入る。

「あら、アキさん。先月は来なかったから、心配してたんだけど。

元気？」

「ええ。サロンが忙しかったんです。明日は命日じゃないけど、来れるときに来ておいたほうがいいかなと思って。植物採集もしたかったし」

毎回案内される部屋へ向かいながら、女主人と軽い会話を交わす。アキが荷物を降ろすと、戸口に寄りかかっていた女主人は小さくため息をついて言った。

「あのね……。いつも利用してもらってありがたいんだけど……。ここ、そろそろ閉めようかと思ってるんだ」

アキは驚いて振り向いた。

「え？ どうして？」

「いやね、この辺もどんどん廃れてきてるだろう？ 向かいの居酒屋も、今月で閉店するってさ。もっと大きな村か町に移転するそうだよ。うちも通りすがりの行商人がたまに来る程度だし、その頻度もどんどん減っていく一方だ。だから……。毎月来てくれるアキさんには悪いんだけど、私も別の村へ引っ越そうかと思ってね」
今後の墓参りの際、宿はどうしようかと不安になったが、月に一度利用する程度では十分な貢献などできない。

「残念ですが、仕方ないですよ。いつ頃移転する予定ですか？」

「とりあえず移転先はまだ決めてないから、今すぐにつてわけじゃないさ。少なくとも、来月はまだやってるよ」

「じゃ、どんなにサロンが忙しくても、来月は絶対に休みを取りますね」

「待ってるよ」

女主人はホッとした様子で、部屋を出ていった。

いつもは墓参りした当日に里へ戻るため、朝早くに宿を出る。

しかしこの日は夜間に朔夜草を探し、再びこの宿に戻ってこなくてはいけない。時間はたっぷりあるので午後まで宿でゆっくり過ごすことにして、売上に少しでも貢献しようと昼食もいただくことにした。

「新しい場所が決まっていらないのなら……。木の葉の里はどうですか？ いい人たちばかりですよ」

食事の途中、アキは女主人に提案してみた。

「そうだねえ……。あそこだったら客も多そうだけど、そのぶん競争も激しいからね。この年になると、あまり競争はしたくないねえ……。私はもっと小さなところで、安定した収入があればいいかな。場所が決まったら教えるよ」

「そうですか……」

泊まる宿がなくなるのも困るが、きさくな女主人に会えなくなると思うと、アキは寂しく感じた。

「ところで、今回は2泊お願いしてましたよね？ 墓参りのあと、夜間しか取れない植物を採集するので……戻ってくるのはかなり遅い時間になると思います」

「ああ、いいよ。鍵を渡しておくから、勝手に入っておくれ。なくさないでね」

女主人から鍵を受け取り、アキは村へと向かった。

「ないなあ……」

かつて母と一緒に通っていた場所には、満月になるとあちらこちらに朔夜草が生えていたものだ。

しかし今は用意したカゴがいっぱいになることはなく、採れた量は一握りにも満たない。

「なんでだろう？ こんなに少ないなんて……」

朔夜草は満月の夜にしか現れない植物で、その生態は草野家でも把握できていない。栽培もできないため、ここで採れなければ今後しばらくは利用できなくなる。木の葉の里でも採取ポイントを探したもの、今も見つかっていない。新しい朔夜草の採集場所を見つけるまでは、かなりの月日を要するだろう。

その後1時間ほど探し続けたが、さらに取れたのは数本だけだった。そろそろ深夜になる。これ以上探し続けても、おそらく見つからないだろう。

「どうしよう……」

アキは途方に暮れ、月を見上げた。

翌日の朝、一握りの朔夜草のみ携えて、アキは里へと向かった。

（この量じゃ、修司さんに使用するので精一杯だなあ。どんなことが起きても、これからは朔夜草に頼らないようにしないと。まあ、軽い症状なら通常のハーブでもケアできるし・・・。とにかく、ないものは仕方ない。家に着いたら、代替品を考案しないと）
道中はずっと代替品の配合を考えたが、なかなかうまくまとまらない。

いくつかの候補を道端でメモし、家に着いたら早速試用品を作ることにした。

夕暮れ時、木の葉の門をくぐる。受付にいた2人の男性に軽く手を振って挨拶し、自宅へ向かう。

早く帰って朔夜草のドライ加工を行い、試用品を作成しよう。そう思いながら、家へと続く小さな森の小道を急ぐ。

もうすぐ家が見えるという辺りで、急に背中にドスンと重い衝撃を感じた。

振り返ると、京子がこちらを睨みつけている。

「京子さん？　ここで何を・・・」

アキはなにやら背中に異物感を感じ、手を回して確認してみた。何か棒のようなものに指先が触れる。同時に、肩甲骨の下あたりに激痛が走り、息をするたび血の匂いも感じた。

「きょう・・・こ・・・さん？」

アキが再び声を掛けると、京子がうなるような声でいった。

「バカな女。丁寧に帰宅の予定をドアに張っておくなんて」

低い声でつぶやく。

「帰ってこなければよかったのに。ずっと村にいればいいじゃない。そうすれば、あの人だってあなたから解放されるのに」

痛みはどんどんひどくなり、足がガクガク震える。アキはそれ以上立っていることができず、京子の言葉を聞きながら地面に膝を突いた。

「あんたが悪いのよ」

そう言い放ち、京子は背を向けて走り去った。

「待っ・・・」

引きとめようと伸ばしたアキの手が、力なく落ちる。そのまま前のめりに地面に崩れ落ち、動かなくなった。

先日の朝食のお礼をしようと、ヒビキは弁当を2つ買ってアキの家へ向かっていた。

小さな森に差し掛かったとき、小道の向こうから走ってくる女性の姿を確認し、弁当を放り出してその腕を掴む。

子供とは思えない強靱な力に女は一瞬ひるんだが、すぐに振りほどこうと暴れ始めた。

「お前！　なんでここにいるんだ？　アキさんには近づくなど5代目に命令されただろう？」

あの日、ヤマトたちにつかまってほどなく京子は静かになり、反省の色を見せた。連絡を受けてすぐに駆けつけた両親は、自分たちがきちんと監督するから許してくれと泣き付く。今回は軽犯罪だし、初犯ということも考慮され、厳重注意と今後一切アキに近づかないことを条件に釈放したのだ。

「だって・・・帰ってくるからいけないのよ！」

京子の手には血が付いていることに気づき、ヒビキがひるむ。その隙に腕を振り解いた京子は、再び走り始めた。

「待て！」

イヤな予感に襲われたヒビキは、アキの家へ急ぐ。

すぐに、小道の途中に倒れている人影が見えてきた。

近づく、背中小さなナイフの柄を突きたてられたアキが、うつ伏せに倒れている。

ヒビキは泣きそうになりながら、傍らに膝を突いて声を掛けた。

「アキさん？　大丈夫か？」

返事はない。

首筋に指を当てると、脈はある。

「どうしよう、どうしよう・・・。アキさん、少しだけ待ってて。助けを呼んでくるから！」

ヒビキは病院へと走った。

「里中をねずみに探させましたが、京子の姿が見当たりません」

紙に戻るねずみを確認しながら、サイが言った。

「じゃ、オレの口寄せで探してみる」

カカシが忍犬を口寄せし、指示を出す。一斉に四方に散った犬たちを、カカシは厳しいまなざしで見送った。

「やはり・・・牢にぶちこむべきだったのでは？」

サイが言うと、カカシは首を横に振った。

「烟を荒らした程度じゃね・・・。牢に入っただとしても、すぐに出てくるだろうし」

「アキさん、大丈夫でしょうか。傷は肺に達していたそうですね」

「・・・心配しても、アキさんが良くなるわけじゃない。治療はシズネさんに任せて、オレたちは京子の捜索に集中するんだ」

その頃、シズネは注射針をアキの腕に突き立てていた。

「アキさんと共同開発したこの薬・・・。まさか、アキさんが使うことになるなんて。まだ一度も使用したことはないんですよ」

サクラがつぶやくと、シズネは眉をひそめた。

「ナイフを抜いたら、一気に出血しちゃうでしょ。だからといって刺したまま移動させると、少しの衝撃で肺の傷が広がる可能性もあるし・・・。ここは一か八か試してみるしかない。・・・そろそろ効いたかな」

シズネが指を当てると、アキの脈は止まっていた。

「よし。じゃあ、引き抜くわよ」

シズネは片手をかざして傷が広がらないように治療しつつ、慎重にナイフを引き抜く。すると、肺に溜まっていた血が流れ出てきた。

その後待機していた医療忍者を振り向くと、

「じゃ、担架に乗せて」

と指示を出す。

「さ、早く病院に移動して、アキさんの仮死状態が解ける前に手術

を終わらせましょう」

シズネの言葉に、サクラは固い表情で頷いた。

パツクの遠吠えに従って里の外に出たカカシは、崖のそばに立っている京子を発見した。

気配を消して素早く背後に回り、腕をつかむ。

京子は驚いて振り向き、

「止めないでください。どうせ私は・・・」
と泣きべそをかいた。

「戻って、罪をつぐなうべきです」

カカシは冷静に告げた。

「アキさんは、生きています。このまま無事なら、殺人罪には問われません」

すると京子の顔が歪んだ。

「しぶとい女！ 死ねばよかったのに」

カカシの表情が冷ややかになった。

「・・・アキさんを刺したことで、後悔していたわけじゃなかったんですね」

「当たり前でしょ！ すべての元凶はあの女なんだから。あいつが生きている限り、修司さんの心は囚われたまま。だから、殺そうと思っただんじゃない。私が後悔しているのは、あいつと修司さんを引き合わせたことだけよ」

京子が吐き捨てるように言うと、カカシは乱暴にその腕を引っ張った。

「ずいぶん心を病んでるね。別にここで死にたいっていうなら、それで構わないんだけど・・・それを知れば、アキさんがずっと苦しむことになる。さ、一緒に来て」

どんなに京子が暴れても、罵詈雑言を吐こうとも、カカシは無言で里へと引きずっていった。

牢に入れられた京子のもとへ、綱手とシズネがやってきた。

「バカなことを……。反省したのではなかったのか？」

綱手が問うと、京子は檻にしがみついて叫んだ。

「だって、あの女がいけないんですよ？！ 修司さんに変な薬を与えたに違いありません！」

「アキはそんなことはしない！」

綱手は強く否定したが、京子は激しく頭を振った。

「修司さんは……。それはそれは奥様を大切にしていました。亡くなったとき、どんなにつらかったことか……。その気持ちを理解し、支えたのは私です。修司さんも、とても私を頼ってくれました。でも……。あの女の施術を受けてから、別人になったんです。いつもいつも、アキさんの話ばかり。……。最近じゃ、靴屋とサロンを合併するとか言い出して……」

「それって、ビジネスとしては良い案じゃないですか？ アキさん、フットマッサージもするわけだし、足つながりってことで」

シズネの何気ない言葉に、京子は憤慨した。

「何を言ってるんですか？ 良い訳ないじゃないですか！ あの女、修司さんに結婚まで迫って……。最初から、修司さんを狙っていたに違いありません」

綱手は呆れた表情を浮かべ、

「バカか、お前は。アキは結婚を断るつもりだったと聞いたぞ」と教えたが、

「それだって、あの女のポーズですよ！ 周りにいい人だと思われようと、悲劇のヒロインを気取ってるだけです」

と、京子は聞く耳を持たない。

「何を言ってもダメだな、こいつは……。京子、お前はそのまま牢で過ごすことになる。アキは危篤状態から脱していない。もしあいつが死んでしまったら……。お前は終身刑だ」

綱手の言葉を聞き、京子は檻をがたがた揺すりながら叫んだ。

「どうしてみんな、あの女ばかり！ 何が正しいというのよ。騙さ

れてんのよ!」

「お前は・・・」

綱手は京子を睨み、低い声で語る。

「修司に愛されたかったのだろう? だから、必死に修司を支えようとした。お前こそ、いずれ後妻として迎えられたいと思っていたんじゃないのか? しかし半年ほど時間をかけても、その気持ちは修司に届かなかった。それはアキのせいじゃない。・・・アキは見返りを求めてサロンを開いている訳じゃないし、料金だってほとんどボランティアのような価格だ。修司のことだって、良かれと思っ
てやったことが裏目に出てしまっただけのこと。それをお前が逆恨みして・・・」

綱手は言葉を切り、小さくため息をついた。

「もういい。何を言っても無駄のようだな。・・・ご両親が来ている。たいそう嘆いているぞ。この親不孝者が」
そしてシズネと共に、牢を後にした。

綱手が病室に入ると、サクラとナルト、サイ、カカシ、ヒナタがアキのベッドを囲んでいた。

アキは酸素マスクを装着し、腕には数種類の点滴がつながっている。表情はまったくなく、顔色も真っ青だ。

「どうだ?」

綱手が問うと、サクラが立ち上がって答えた。

「怪我の割には、出血は少なかったほうだと思います。でも・・・脈がまだ戻りません」

「本来なら、すでに戻っているはずなんですが・・・」
シズネが言葉を次ぐ。

「時間がたてばたつほど、戻らない可能性も高くなります。もしかすると・・・」

そのとき、ヒビキが病室に飛び込んできた。

「アキさんは?」

一同の暗い表情を見て、ヒビキはベッドへと駆け寄り、横たわるアキの体にしがみついた。

サクラの顔を見上げ、懇願するような表情になる。

「今、どうなってんの？ アキさん、大丈夫なんだよね？」

薬のことなど知らないヒビキにどう説明すれば良いのか分からず、サクラは黙っていた。

「今日はずっと歩いて疲れてるだろうからと思って、弁当を買って持っていったんだ。これから時々、一緒にご飯食べようって言うてくれたから……。あれ、けっこう嬉しかったんだ。ヤマト先生と3人で食べた朝食も、すごく楽しかった。また……。また、一緒に……」

ヒビキは涙を耐え切れず、泣き出してしまった。

「ヒビキ、忍者は……」

サクラがヒビキの肩を掴んで諭そうとしたが、言葉が詰まってしまった。

「分かってるよ……。でも……。ちょっとの時間しか話してないけど、アキさん、すごく優しくして……。お母さんってこんな感じになって、ずっと想像していた通りの人で……」

ヒナタもベッドに近寄り、ヒビキの背後に立つ。

「うん、分かる……。最近会ってなかったけど、疲れたときはアキさんのことを思い出したし、サロンに行きたくなったもん」とするとナルトも

「オレも……。一緒にいると、なんだかあったかいんだよね」

「……。うん……」

ヒビキは袖で乱暴に涙をぬぐいながら、顔を上げた。

「アキさんは死なないよね。絶対に」

その頃アキは、光の中を歩んでいた。

体が軽く、とても気持ちが良い。

光の向こうには広い草原があり、ちらほらと人影も見える。

その光景に懐かしさのようなものを感じ、アキは心はずませながら近づいていった。

その場所まであと10メートルほどといったところまで近づくと、2つの人影が制止するように両手を挙げる。

「もしかして・・・父さん、母さん？」

アキは歩調を速める。

「やめろ・・・まだ来るな」

父が言った。

「来るには早すぎる」

母が言う。

「まだ孫の顔を見せてもらってないわよ」

アキは悲しくなり、足が止まる。

「どうして？ やっと一緒に過ごせるのに」

すると、両親の背後からもう1つ人影が現れた。

「茂三じいちゃんじゃない！ 久しぶり！」

アキは笑顔になって手を振る。

「アキ・・・久しぶりだな」

茂三も、かわいい孫に向ける独特のとりけそうな笑顔で手を振った。しかしアキが再び駆け寄ろうとすると、悲しげに首を振る。

「ダメだよ。お前にはまだまだ時間が残されている」

アキの表情が曇る。

「でも・・・私のせいで、不幸になった人がいるの。あんなに憎まれるなんて・・・。私には、知識を継承する資格はなかったのかも」とすると父が言った。

「そんなことはない。ただ、あの施術を行うには、技術と精神力が少し足りなかったんだろう。経験をもっと積みなさい。前も言っただろう？ 知識がすべてじゃない。お前次第だって」

「そうだけど・・・。でも・・・」

「『でも』は、なし。その辺がまだ足りないのよ。もっと強くなりなさい」

母が厳しい口調で告げる。

「・・・キザシのときは、父さんや母さんのおかげで何とか立ち直ったけど・・・。なんだか疲れちゃったの・・・」

アキは、力なくうなだれるだけだ。

「失敗をそのままにするのか？ 戻って、きちんと修正するのがお前の義務だ」

父も心なしか口調が厳しくなる。

アキが何うように3人へ目を向けると、父と母は口をへの字に結んでいた。茂三だけ、柔らかな笑顔を浮かべている。

「アキ、お前を必要としている子供もいるんだぞ？」

茂三の言葉に、アキは首をかしげた。

「子供？」

「今もお前のそばで泣いている」

「・・・え・・・？」

不思議そうな表情を浮かべるアキを見て、母がプツと噴出した。

「アキがお母さんみたいだって。一緒にご飯を食べたいって。私たちのそばにいたがってばかりいるあなたが、お母さんねえ・・・」

「一緒にご飯・・・。あつ、ヒビキくん？」

父が頷く。

「戻ってやりなさい。お前を慕っているあの子を、また一人にするのかい？」

アキの脳裏に、ヒビキの嬉しそうな表情が浮かぶ。

「あの子、本当にかわいい子ね。私も会いたかったわ。子供といえは・・・アキが産んだ子も早く見たいから、頑張ってね」

母はクスクス笑い続けている。

「お前はほんと、恋愛にうといからなあ……。もっと一緒に出かけて、若い男性との出会いを作れば良かったのかな」

父が言うと、母は肘でつついた。

「そうね。港へ行くとき、連れていけばよかったのに。それをあなたは……。『まだ早い』とか渋っちゃって。グズグズしていなければ、キザシの前に素敵な人と出会えたかもしれないのにね」

その言葉に、父は苦笑いする。

「まあいいじゃないか。過ぎたことだし、アキはまだまだこれからだ」

茂三はニツコリとアキに笑いかけ、頷いた。

「仕事も大切だが、たまにはのんびり休むんだぞ」

「……。わかった。戻ることにする。……。ところで」

アキは朔夜草についての疑問を口にした。

「ああ、それはだね……。」

父が答える。

「朔夜草は草野家の近くで、その周囲に暮らす人々の純粋な心が育んだ。今、村には誰もいないだろう？ だから減ったんだね。今お前がいる木の葉の里のどこか、静かなところにきっと現れるはずだよ。よく探してごらん」

「うーん……。思い当たるところは探してみただけど……。」

「あそこに住んで、まだ1年でしよう？ 時間がかかるのよ。でも、そろそろ現れてもいい頃だから、頑張って」

「……。うん……。」

「じゃ、行きなさい。そろそろ戻らないと、体が限界を迎えてしまう」

茂三が言うと、アキは名残惜しげな表情を浮かべた。

「もう！ あなたがここに来るのは、よばよばのおばあちゃんになつてからにしてよね。かわいい孫の顔、いっぱい見せてほしいし。期待してるから！」

母が元気良く手を振る。

「いっぱいって・・・私、そんなに若くないのよ」

アキは苦笑する。

「それに恋愛って、しようと思ってできるものでもないようだし・・・」

「もう時間がない。早く行きなさい。今後の活躍、楽しみにしてるよ」

父の言葉に頷くと、アキは草原に背を向けて歩き始めた。

綱手とシズネが火影室へ戻ると同時に、ヤマト、キバ、赤丸も様子を見にやってきた。

「まだ目が覚めませんか？」

ヤマトの問いに、カカシが黙って頷く。

「あの女、まだ牢で騒いでいるらしいぜ」

キバの言葉に振り返ったサクラは、尻尾を振っている赤丸を見て驚いた。

「ねえ、ここは動物禁止なのよ。アキさん、手術したばかりなんだから」

キバは舌打ちする。

「失礼だな！ 赤丸は毎日風呂に入ってるし、清潔だぜ？ シズネさんにも許可もらったしよ、いちいち騒ぐなよ。赤丸も見舞いたいわって言ってたし」

すると赤丸は同意するように、鼻を鳴らした。

「とにかく・・・なんか、病室が狭く感じる・・・」

サクラは人数を数えると

「7人と一匹か。アキさんはまだ意識を取り戻してないし、狭い病室にこんな集まってるとなんだか息苦しいから、とりあえず戻ってくれかな。変化があったら、すぐに知らせるから」

サクラの言葉に、キバは

「来たばかりだぜ？」

と文句を言ったが、ヒナタが

「一緒に帰ろう？」

と促すと、渋々病室を出ていった。

「じゃ、僕たちも・・・」

サイが促すと、カカシとヤマトが頷く。

「ま、オレたちがここにいるても、何の役にも立たないからな」
アキのそばから離れないヒビキの肩に、ナルトが手を置いた。

「オレはアキさんのそばにいる！」

ヒビキが宣言すると、ナルトはその肩をギュツとつかんだ。

「わかってるってばよ。・・・お前がこんなに心配してるんだ。アキさんはきつと戻ってくる。信じる」

「・・・うん・・・」

ヒビキが頷くと、4人は静かに病室を出ていった。

それからしばらく、サクラとヒビキは無言でアキを見つめていた。
時計を確認したサクラは、

「・・・ヒビキ、まだここにいてるつもり？ そろそろ面会時間が終わるんだけど・・・」

と口を開いた。

「アキさんが目を覚ますまで、ここにいます！ サクラ先輩は休んでいていいよ。何かあったらオレが連絡するから」

「いえ、私もここにいます。それでも5代目の弟子だからね。何かあったときは、私のほうが対処できるでしょ」

サクラの言葉に、ヒビキはうなだれる。

時が進むごとに、どんどんアキの生存率が低くなっていく。サクラはヒビキにそのことを教えるべきかどうか迷った。しかし期待が大きければ、戻らなかった場合の絶望も大きくなるはず。そう思いなおし、サクラはヒビキに告げることにした。

「アキさんの出血と肺の損傷を抑えるために、仮死の薬を投与したの。本来ならもう目を覚ましているはずなんだけどね。薬の安全性

は高めてあるけど、意識を取り戻さない場合はそのまま死・・・」
ヒビキはサクラの言葉をさえぎるように、激しく頭を振った。

「そんなことない！ 絶対に！」

アキの手を握り締め、言葉が続けた。

「アキさんは、戻ってくる。ナルト先輩は信じて言っただけじゃないか」

「アイツは医療に詳しくないし、単純だから・・・」

「サクラ先輩は、アキさんに戻ってきてほしくないのか？」

ヒビキの責めるような視線を受け、サクラは目を伏せた。

「・・・そうね、信じるしかないよね」

そのとき、ヒビキに握られているアキの指先が、ほんの少しだけピクリと動いた。

「・・・あれ？」

ヒビキがアキの手をまじまじと見る。

「今、動いたような・・・」

サクラは急いで脈を確認した。

「・・・動いてない・・・（もしかして、死後硬直が始まっているのか？）」

サクラは不安になってアキの瞳孔も確認したが、そちらもやはり反応はない。

ヒビキは希望に目を輝かせていたが、サクラが首を振るとうなだれた。

再び沈黙が降りて数分過ぎた頃、また指先がほんの少しだけピクリと動くのを感じた。

「・・・また動いた！ 気のせいじゃないって！」

疑わしげなサクラの視線を受け、ヒビキは勢いよく首を振る。

サクラはもう一度脈を確認した。

「・・・やっぱり、動いてない・・・。あ、今・・・」

「動いてるだろ?!」

「うーん……。気のせいかも……。あ、ちょっと待って……。戻ってきてるかも！」

サクラは急いで点滴のスピードを調整し、しばらくアキの首筋に指を当てていた。

「やっぱり……。戻ってきてる。不規則だし、すごく集中しないと分からない程度だけど、脈を感じるわ。私はこのまま様子を見ているから、ヒビキはシズネさんと呼んできて」

ヒビキは転がるように病室を走り出していった。静かな廊下に、バタバタという足音が響く。

「静かに！　ほかの患者さんが寝ているから……。」「サクラの声は、届いていないようだった。」

アキの診察を終えたシズネが、サクラとヒビキを振り返り、説明を始めた。

「脈が安定するまで気は抜けないけど、たぶん大丈夫。副作用を抑える効果も追加してあるから、前回みたいに目覚めた直後、猛烈な頭痛に襲われることもない。今夜は二人とも帰っていいわよ。あとは看護師に任せましょう」

「オレはついてる」

ヒビキが断固として主張した。その目に浮かぶ涙を見て、シズネは苦笑いを浮かべた。

「仕方ないわね……。じゃ、アキさんの隣のベッドを使って。サクラは帰って休んでいいわよ」

サクラはシズネに頷くと、ヒビキの肩を抱いた。

「良かったね。じゃ、私は帰るから、アキさんをよろしくね」

ヒビキは頬を染め、身を引き離す。

「わかってるよ。……お疲れ様でした」

「お疲れ。じゃ、失礼します」

サクラが病室を出ていくと、シズネはもう一度点滴のペースを確認した。

「じゃ、私もそろそろ行くわ。何か変化があったら、宿直室に知らせてね」

ヒビキに指示すると、シズネも病室を去った。

誰もいなくなると、ヒビキはもう一度アキの傍らに座り、その手を握り締める。

「良かった……。戻ってきてくれた……。父さんみたいに、いなくならなかった……。」

2年前、ヒビキは父の死を看取った。

任務で大怪我をしたと聞き、病院に駆けつけたのだが、父はその目

を開けることなく息を引き取ったのだ。

アキの体に乗らないようにベッドの端に頭を置き、つぶやく。

「また見送らなくちゃいけないのかと思った。だけど、戻ってきたんだ……」

安心したせいか、深い疲労感に襲われる。少しだけ……と目を閉じると、そのまま眠ってしまった。

誰かに頭を撫でられている感覚が、とても心地よい。

（誰だろう……）

ヒビキはそのまま心地よい眠りに戻ろうとした瞬間、耳元で

「いつまで寝ているんだい？」

と声がした。

驚いたヒビキが飛び起きると、ヤマトが覗きこんでいた。

「うわっ……。ヤマト先生……」

「アキさんの様子を見ているはずだったろう？ それなのに、何で寝てるんだ？ よだれまで垂らして……」

頬を触ると、ベトベトになっている。

「あーあ。布団に染みが広がってるよ。看護師さんに言って取り替えてもらわないとな」

ヤマトが言うと同時に、再び頭を撫でられた。ヤマトの手ではない。慌ててアキの顔を覗き込むと、顔色はまだ悪いが、目を開けてこちらを見ている。

「アキさん！ 目が覚めたんだ！」

「ずいぶん前にね」

ヤマトが言うと、アキはヒビキに小さく頷いてみせる。

「傷口はキレイだったし、細菌感染もしていないから、安静にしていれば元通りになるだろうってシズネさんが言っていたよ。でもしばらくの間、会話は無理だそうだ」

ヒビキは涙目になり、アキの手を夢中で握んだ。

「よかったね！」

「昨日のことは、さっき僕から説明しておいた。アキさんを発見したのはヒビキだってことも、ちゃんと伝えてあるからね」

ヤマトの言葉に、アキがまた小さく頷いた。そして、声を出さずに口を動かす。

ヒビキの目には

「ありがとう」

と言っているように見えた。

ヤマトはヒビキの様子を温かな目で見守っていたが、落ち着くのを見計らって告げる。

「さて、今日は午後から任務が入っているし、一度家に帰りなさい」「ここから直接行くよ」

ヒビキは動く様子を見せなかったが、握っていたアキの手に少し力がこもるのを感じた。顔を覗き込むと、困ったような顔をしている。

「でも……。わかったよ。じゃ、帰る」

アキが微笑むのを確認すると、ヒビキは立ち上がった。

「でも、任務が終わったらまた来るからね！ 待っててよ！」
そう言うと、慌しく廊下を駆けていった。

ヤマトは苦笑し、

「やれやれ、子供は単純でいいですね。……。じゃ、僕もそろそろ行きます。お大事にしてください」

一人になると、アキはぼんやり天井を眺めた。

（ここに入院するのは何度目だろう？）

任務を依頼しようと必死で里にやって来たとき、次は仮死の薬を飲んだとき、そしてキザシにボコボコにされたとき……。数えるうちに、眠くなっていく。

（家に帰りたいなあ……。）

そう思いながらアキは目を閉じ、深い眠りについた。

言葉通り、ヒビキは毎日時間を見つけては来院した。

およそ1週間後、アキがベッドの上で起き上がれるようになった日も、ヒビキはいつものようにやってきて

「・・・でき、その猫が凶暴で！」

と任務の話をしている。

「で、この傷ってわけ」

頬の傷を指差し、顔をしかめてみせる。

「消毒しなくて・・・いいの？」

かすれる声でアキが尋ねると、ヒビキは

「無理して話さなくていいよ！ オレ、勝手にしゃべってるだけだから。聞いてくれるだけで」

そのときドアが開き、

「お前の危なっかしい話を聞いていると、口を挟みたくなるもなるよ」

と言いながら、カカシが入ってきた。

アキはニツコリと笑って頷く。

「だってあの猫、逃げ慣れてるっていうか・・・こっちの手の内を知っているというか・・・とにかく大変だったんだ」

ヒビキが言い訳すると、カカシはプツと噴出した。

「ま、ナルトたちも追いかけたことがある猫だし・・・ルーキーは必ず経験する任務の1つかな」

「へー、ナルト先輩も！」

ナルトを尊敬しているらしいヒビキの顔が輝く。

「すごかったんだろうなあ・・・」

ヒビキの夢見るような瞳を見て、カカシは笑った。

「あの頃のナルトはドジばかりで、そりゃもう大変だったんだぞ」
「ええー？ 本当に？ 詳しく知りたい！」

キラキラした瞳で見つめられたカカシは、

「その話はまた今度。ところでアキさん、入院生活はかなり退屈だと思うので、本を持ってきましたよ」

アキは満面の笑顔でイチヤイチャパライスを受け取った。

「何の本？」

ヒビキが覗き込もうとしたので、アキは本を抱えて視線をさえぎる。
「ヒビキくんには・・・まだ早い・・・」

アキの呼吸が苦しそうなので、説明はカカシが引き受けた。

「それはね、18歳にならないと読めない本なの。だからお前はダメ」

「えー！　なんでー？」

ヒビキは頬を膨らませる。

カカシがその頭を撫でながら、

「大人の本だから。お子ちゃまには理解できない内容なんだよー？」
とおどけてみせた。

頭に乗る手を振り払い、ヒビキは両腕を組んで睨みつける。

「お子ちゃまじゃないよ。下忍として、ちゃんと任務をこなしてるんだから！」

「はい、はい」

カカシはふざけて降参のポーズを取った。

まだグズグズ言っているヒビキをそのままに、アキに話しかける。

「そういえば、アキさんが種まきした畑ですが、芽が出たそうです。
無事に成長しているようですよ」

「よかった・・・。サクラさんと・・・ヒナタさんの・・・おかげです」

あの日以来、サクラとヒナタが交代で毎日水撒きをしてくれていたのだ。

「カカシ先生だって、アキさんに話させてるじゃないか！」

ヒビキが責めると、苦笑しながら頭を掻いた。

「いやあ、そんなつもりはなかったんだけどね」

入院から2週間たった頃には、ベッドから降りて病院内をウロウロできるまでに回復していた。

見舞いに来たヤマトは、廊下のベンチに座り、ボーっと外を眺めているアキを発見し、笑いながら話しかける。

「よほど病室がイヤなようですね」

「あ、ヤマトさん！ ヒビキくんは一緒じゃないんですか？」

「あいつは今、チームの仲間と一緒に修行してます」

そういいながら、アキの隣に座る。

「アキさんと出会ってから、ヒビキはずいぶん落ち着きましたよ。・・・というか、明るくなったのかな。前はどこかすねたような雰囲気がありましたから」

「私と出会ったからというより、ヤマトさんをはじめとする周囲の方々の支えが大きいと思いますよ。任務だけじゃなく、皆さんと何を話したか、何を学んだかなど、とても楽しそうに話してくれますから」

「そうですか？ でも、心から安心できる場所は、アキさんが提供していると思います」

「だといいですけど」

アキは照れて赤くなった。

「あー、また病室を抜け出してる！」

声がした方角を見ると、サクラが渋い顔をして立っていた。

「退屈なのは分かりますけど・・・傷口がふさがったとはいえ、無理をするともまだ呼吸が苦しいはずですよ？」

アキは苦笑いを返した。

「大丈夫。ここに座ってぼんやりしてただけだから」

「ヤマト隊長はお見舞いですか？」

サクラがアキを挟んで座る。

「うん。3人が修行している間、少し時間ができたからね。ヒビキがいつも押しかけているし、そのお詫びもかねて・・・」

そう言うと、ヤマトはバッグからクッキーの小袋を取り出した。

「病院食だけじゃ侘しいかと思って」

アキの目はクッキーに釘付けになり、声はずむ。

「ありがとうございます！ おいしそう・・・。病室で一緒に食べましょう？」

病室でお茶を飲みながら3人がクッキーを食べていると、カカシもやってきた。

「皆さん、楽しそうだねー」

「カカシさんもクッキー・・・あ、甘いもの、嫌いでしたっけ？」

「ええ」

返事をしながら、窓際によりかかる。

「私は甘いものに目がなくて・・・。退院したら、クリーム白玉あんみつが食べたいな」

アキは宙を眺め、クリーム白玉あんみつを食べている自分を想像する。

「ええ？ それなら、私もお付き合いします。いつそ今度の退院祝い、甘味処でやるっていうのはどう？」

サクラが張り切って提案した。

「ええー？ それじゃオレは参加できないじゃない」

カカシがすねたように言うと、

「ところでんもありますよ」

と笑いながらサクラが答えた。

「じゃ、甘味処でもいいよ」

「決まり！」

サクラとカカシのやり取りを微笑ましく見ていたアキは、ふと考え込むような表情を見せた。

「・・・修司さんは？ 今、どうしていますか？」

入院して以来、修司の姿は見えていない。ずっと気になっていたのだ

が、ついこの間まで会話を交わすことが難しかったし、その話題を持ち出す者もいなかった。

そろそろ退院できる日も近いだろうし、施術の準備もしたいと思っていたので、この機会に聞いてみることにしたのだ。

「ああ……。彼なら、また家にひきこもってますよ」

カカシの言葉に、サクラが続く。

「京子さんに刺されたと聞いて以来、ずっと。アキさんは回復したと伝えに行ったんですが、扉を開けてくれなくて。一応知らせいたほうがいいと思ったので、大声で叫んだら、中から号泣する声が聞こえてきました……」

アキの表情が曇るのを見て、カカシが諭すように言う。

「今は修司のことより、体力回復のことだけ考えてください。ここであくく心配したって、状況は変わらないんですから」

「……。そうですね……。ところで、もう1つ聞きたいことがあるんですが……」

「なんででしょう？」

「この里に、自然に恵まれている静かな場所ってありますか？ 朔夜草を探したいんですが、月に一晩しか発見するチャンスがないので、ある程度場所を絞っておかないと」

3人が考え込む。

ふとサクラが顔を上げた。

「第44演習場……。とか？ でもなあ……」

「その演習場はどのような環境ですか？」

アキが勢いこんで尋ねると、ヤマトは眉を寄せた。

「死の森とも呼ばれていましたね。確かに普段はそれほど利用されることのない演習場ではありますが……。あそこに一般人が夜に入るなんて、許可は下りませんよ」

「そうですか……。ほかにはないですか？」

3人は再び考え込んだ。

「とりあえず、満月の晩になったら、予定が空いてる者が同行して案内するっていうのはどうですか？」

カカシが提案すると、ヤマトとサクラが頷く。

「そうですね。場所を絞るといっても・・・アキさんが想定している場所と、我々が考える場所が合致するとは限りませんから」

「じゃあ・・・任務としてお願いしたほうがいいですね。夜間、わざわざ時間を割いてもらうんですから」

アキが遠慮すると、サクラは顔の前で手を振りながら笑った。

「いいんですよー。友達として同行するんですから。ね？」

カカシとヤマトもサクラに続いた。

「ま、いつも本を借りてるし」

「いつもフットマツサージしてもらってるし」

「そんな・・・。ありがとうございます」

周囲には隠していたが、京子に刺されたトラウマから、背後に気配を感じるとおびえるようになっていた。しかし、残り少ない朔夜草でのケアは控えなくてはいけない。そんなアキにとって3人の申し出はいつも以上に心強く感じられ、ありがたく受けることにした。

それから10日後、アキは退院した。午後から任務があるというので遠慮したのだが、ヒビキは家まで付き添うと行って譲らない。畑に着くと、「周囲を確認してくる!」と言って姿を消してしまった。ほぼ1ヶ月ぶりの我が家に入ったアキは、背を伸ばして深呼吸をする。

「うーん。やっぱり家が一番落ち着くなあ」

すると、ヒビキが玄関から顔を覗かせ、

「大丈夫だったよ。じゃ、オレは任務に行くから!」

と報告すると、慌しく畑を抜けて駆けていった。

「そんなに心配しなくていいのに・・・」

とつぶやいたが、まだ牢で騒いでいるという京子のことをふと思いつき、背筋に冷たいものが走る。治癒したはずの背中への傷も、うず

いたような気がした。

幻覚を振り払うように首を強く振ったあと、アキは家の中を見回した。

うつすらとホコリをかぶった家具を見て、

「よし！ 掃除するぞ！」

と声を出し、気合を入れる。

ホコリを払って水拭きしている途中、村へ行ったときの荷物が目に入った。刺されたときに地面に落としたものを、誰かが拾ってここに置いてくれたらしい。荷物をほどこき、中身を確認する。

「やっぱり・・・ダメだよね」

村で採集した、たった一握りの朔夜草。風通しの悪い袋の中にずっと入っていたため、香りが変化している。一度腐ったあと、少しずつ乾いていったらしい。袋の底に、黒いシミが残っていた。

「なんのために村に行っただんだか・・・」

その場であつくり肩を落とし、大きなため息をつく。

「あれ？ どうしたんですか、そんなに落ち込んじゃって」

玄関を見ると、カカシが怪訝そうな顔をしてこちらを見ている。

「村から持ち帰った朔夜草がダメになっちゃって・・・。1ヶ月も袋に入れたまま放置してたので、予想はしてましたけど」
そして、名残惜しそうにごみ箱に捨てる。

「それは残念ですね。・・・でも、あさっては満月です。もしかすると、発見できるかもしれない」

カカシは励ますように言った。

「そうですね。ここで後悔ばかりしていたって、失ったものは取り戻すことはできませんからね」

「その通り！」

言いながら、カカシの目に何かがよぎった。

「？」

不思議に思ったアキが怪訝な顔を見ると、カカシは苦笑いをする。

「いや。後悔ばかりしているオレが言うセリフかなと思って」

アキの表情が曇った。

「・・・カカシさんは十分、彼の思いに報いたと思いますよ。十分すぎるほどに。立派な後輩たちも育てあげたし、今も里を守る前衛として立つ身じゃないですか。これ以上自分を責めるのはやめてください。なんか・・・自分には幸せになる資格がないと思っているように見えます」

カカシは目を伏せて聞いていたが、

「実際、個人の幸せを求める気持ちはありませんから。これからも里のこと、仲間のことを第一に考えて生きていくつもりです」と答えた。

アキはそれ以上踏み込むことはできず、うつむく。

カカシは雰囲気を変えようと、明るい口調になる。

「ま、ここで励ましあっているのも仕方ないし・・・。サクラたちが待ってます。甘味処へ行きましょう」

「え？　でも、ヤマトさんたちは任務で・・・」

「オレたちは明日の朝から任務で出かけるんです。全員の予定を合わせるのって、けっこう難しいんですね。あいつらとはまた今度ってことで。じゃ、行きましょうか」

少し息が切れ、立ち止まったアキは深呼吸をした。

「大丈夫ですか？」

少し前を歩いていたカカシが振り返る。

「ええ……。今回の入院は長かったから、いつも以上に体力が落ちてるみたいです」

カカシは少し考えたあと、

「おんぶしましょうか？」

と提案した。

「はあ?! お……。おんぶ……。ですか? いえ、けっこうです。大丈夫です。自分で歩けます」

おんぶされている自分を想像したアキは、その恥ずかしい姿を世間にさらすことはできないと思い、必死に断った。

「でも……」

カカシが心配そうな視線を投げる。

「いえ! ほんとに! 少し休んだから、もう平気!」

まだ息が切れているのに猛然と歩きだす姿を見て、カカシはあつけにとられた。

「いや……。そんなに恥ずかしがらなくても……。まだ苦しそうですよ?」

「いーえ! すごく恥ずかしいですよ。意識がないならまだしも……」

と言いながら、アキは親切な申し出に対して取り乱した自分が恥ずかしくなった。

「……。ご心配ありがとうございます。でも、本当に大丈夫ですか」

「苦しくなったら、いつでも言ってください」

カカシは笑いをこらえながら答えた。

甘味処に入ると、ナルト、サクラ、サイ、キバ、ヒナタがアキを手招きした。

「こっち、こっち！・・・アキさん、すごく苦しそうだぞ？」

アキが近づくと、ナルトが顔を覗き込む。

「まだ体力が戻ってないからな。おんぶしてあげようかって言ったんだけど、すごくイヤがられちゃってね」

カカシが説明すると、サクラが応える。

「そりゃそうですよー！先生、デリカシーなさすぎ！」

「そ、そうか？」

するとサイが

「どうして？」

と聞く。

「だって、よほどボロボロじゃない限り、大の大人がおんぶされるのってすごく恥ずかしいじゃない。後ろから見た光景を想像すると・・・なんだか情けないし。しかも相手が男性となるとね。手がお尻を支えるわけじゃない？しかも上半身は密着するし。やっぱり恥ずかしいわよ」

サクラが熱く解説する。

「ふーん。そういうことね」

カカシが納得したように頷く。

「とにかくアキさん、座って休んでください」

ヒナタが椅子を引いて促したので、アキはありがたく腰を降ろした。アキの呼吸が整うのを確認してから、サクラが話を切り出す。

「そうそう。今日はシカマルも呼んでるんですよ。薬の共同開発をしていたとき、何度か会ってますよね？」

「ああ・・・。あの、すごく頭が良くて、いつも『面倒くせー』って言うてる人？」

「そうそう。今回、アキさんがなかなか目を覚まさなかったの・・・。今日、もう一度奈良家の協力を得ながら配合を考え直すって

話が出たんです。もちろんアキさんの了承を得て、一緒に開発できたらですけど」

「それは構わないけど……。なかなか目が覚めなかったのは、私の意志に寄るところが大きいかも」

「ええっ？ 死にたいって思ってたのか？」

キバがギョツとした表情で問いかけた。

「ううん。そうじゃなくて……。懐かしい人と話していたものだから。久しぶりに、夢で両親と祖父に会っていたの。だから、なかなか離れがたくて」

ずっと両親のもとにいたいと思ったことは事実だが、あえて言う必要はない。

「それってやっぱり、本当に死ぬところだったってことじゃない？ カカシの質問に、アキは頷いた。

「そうみたい。こっちに來るなって言われたし……。よぼよぼのお婆ちゃんになってから来いって」

「何にせよ、死なずに済んでよかったじゃねーか。こうしてあんみつも食べられることだし！」

ナルトはテーブルに届いたあんみつに手を伸ばした。サクラはその手を素早く叩く。

「もー。だから、シカマルがまだ来てないでしょ！」

「えー？ シカマルが遅刻なんて、珍しいな」

「綱手様が話があるって言ってたから……。長引いてるのかな？」

「じゃ、いいじゃんよ。食べちゃおうよ」

ナルトはあんみつを前に、よだれをたらさんばかりだ。

「っていうか、アキさんとカカシ先生のぶんがまだ来てないじゃない。少しは我慢しなさいよ！」

そのとき、アキの前に待望のクリーム白玉あんみつ、カカシの前にはところてんが届いた。

同時に、

「遅くなっちゃったな」

とシカマルが現れる。

「おせーよ！」

ナルトが責めた。

「ったく、仕方ねーだろ？ 五代目の話が長引いたんだから」

その後、アキを見て

「アキさん、久しぶりです。なんだかいろいろ大変だったみたいで・・・」

と挨拶し、隣の席に着く。

「じゃ、今日はカカシ先生が乾杯の音頭を取ってくださいよ」

サクラが言うと、カカシは困った顔で茶碗を持ち上げた。

「乾杯の音頭って・・・この熱いお茶で？・・・ま、いいか。

それではアキさん、退院おめでとうございます。かんぱい」

「かんぱーい」

明るい声が、小さな甘味処の店内で響いた。

待望のクリーム白玉あんみつを至福の表情で口にするアキを見て、カカシはげんなりとした表情を浮かべた。

「よくそんな甘味の集合体を食べられますねえ・・・」

「私からすると、こんなにおいしいものを食べられないカカシさんがかわいそう」

アキの言葉に、サクラは大きく頷いた。

「ほんと、ほんと。ヒナタは白玉ぜんざいにしたんだ？」

「うん。いつもぜんざいだけなんだけど、今日はアキさんの退院祝いだし、たまにはいいかなって」

ヒナタも嬉しそうに口に運ぶ。

「女って、なんで甘いものが好きなんだろうな？・・・うう、食べにくい。オレはもつと噛み応えがある料理が好きなんだけど」

キバはところてんをすすりながら渋い顔をした。

「そうかな？ おいしいですよ」

同じくところてんをすすりながら、サイが言う。

「けっ。だからそんな青っちょろい顔をしてるんだろ？」

ちょうどテーブルに届いた自分のところてんに箸を伸ばしながら、シカマルが言った。

「別に人の好みはどうでもいいじゃねーか。面倒くせー奴らだな」
赤丸はキバの傍らに横たわり、分けてもらったところてんを食べにくそうに嚙んでいる。

それぞれのやり取りを聞きながらクスクス笑っているアキに、シカマルが話しかけた。

「ところで、サクラから聞いたと思うんですけど・・・」

「ああ、仮死の薬の再開発でしょ？ さきほど、OKしました」

「そっか。それは良かった。じゃ、親父にも伝えておきます」

「ああ、シカクさん？ お父様にも何度かお会いしてますよね」

二人の会話にサクラが割って入る。

「仕事の話はあと、あと」

「だってよ、今回の再開発の話がなけりゃ、この場にオレは呼ばれなかったんだろ？」

シカマルが言うと、サクラはちゅちゅと舌を鳴らした。

「仕事の話をするためじゃなくて、あんたとアキさんの親睦を深めるためよ。今までそれほど接触はなかったじゃない」

「親睦ねえ・・・」

シカマルはサクラに向かって渋い顔をしてみせたが、アキに向き直ると興味深げな表情を見せた。

「でも、アキさんとはいずれ話したいと思ってたし。奈良家も代々薬の研究は続けているけど、アキさんのはまたジャンルが違うだろう？ 融合させることで、薬効の可能性が広がると思ってたさ」

「なるほど・・・。私の知識がお役に立てるかどうかわからないけど、そういうことなら喜んで」

修司の件で自信を失いかけていたが、自分はまだ必要とされる存在だと感じる事ができて、アキは嬉しくなった。

それから1時間ほど楽しい時間を過ごしたあと、一行は店を出た。

「あー、よくしゃべった！　こんなに集まって話すのって、めったにないからなー」

ナルトが嬉しそうに言うと、サクラが相槌を打つ。

「そうね。任務で一緒の人は別だけど、こうやってみんなで集まって、ゆっくり話すは珍しいかも」

「こんどはさー、同期のみんなが集まって、あとヤマト隊長やガイ先生の班も一緒だといいな」

二人の会話を微笑みながら聞いていたアキは、ふいに後ろから肩に手を置かれて驚いた。

「ひっ」

小さく声を上げて飛び退ったアキは、その場にいた全員の注目を浴びる。

「え・・・ええと・・・」

振り返ると、カカシは手を宙に上げたまま目を見開き、固まっていた。

激しい動悸を押さえようと、アキは深呼吸する。

「ご、ごめんなさい・・・。ちょっとびっくりしちゃって・・・」

無理やり笑顔を作るが、全身が小刻みに震えているのは傍目にも明らかだ。

「・・・家まで送ろうかと言おうと思ったんですけどね・・・。送ったほうが良さそうですね」

カカシが心配げに目を曇らせる。

「・・・い、いえ。これから食材とか買わなくちゃいけないし、大丈夫です」

アキが遠慮すると、カカシはニッコリ笑った。

「まだ体力が戻ってないし、荷物を持つのを手伝ってあげますよ。借りたい本もあるし」

「そうですか・・・。じゃ、お言葉に甘えて・・・」

アキはナルトたちに軽く頭を下げると、カカシと並んで店へと向かった。

その後姿を眺めながら、ヒナタがつぶやく。

「後ろから刺されたんだもんね・・・」

「まじ、びびってたよな」

キバが言うと、シカマルは眉を寄せた。

「あれじゃ、後ろに気配を感じるたびに怯えるんじゃないか？ 大丈夫かよ」

「うん・・・。いつも精神ケアに使っていた朔日草、残り少ないから修司のために取ってあるみたい。あんなヤツは後回しにして、自分に使っちゃえばいいのに」

サクラが拳を握り締めると、サイが言った。

「でも、アキさんってそういう人だから」

「ごめんなさい。せっかく楽しく過ごしていたのに、みんなを驚かせてしまいました」

買い物を終え、家に向かっている途中で、アキは言いにくそうに切り出した。

「私、けっこう小心者だったみたいです。後ろに気配を感じるたび、びくびくしちゃって」

食材の袋を抱え、前を歩いていたカカシが振り返った。

「あんなことがあったんだから、当然です」

アキは苦笑いを返した。

「でも、京子さんは牢にいるわけだし、私に危害を加えようとする人は他にいないはずです。まして、カカシさんに怯える理由なんて、あるわけないですね」

「いえ。いきなり背後から肩を掴んだオレが悪いんです。もっと配慮するべきでした。それにしても・・・」

カカシは再び前方を向き、荷物を抱えなおす。

「一人なのに、なんでこんなに買い込むの？」

「ああ、それは・・・。今日の任務が終わったらうちに寄るってヒビ君が言ってたので、夕飯と一緒にと思ったんです」

「なるほど・・・って、退院したばかりなのに。ヒビキに弁当でも買ってきてもらったらいいんじゃないですか？」

カカシの言葉に、アキは首を振った。

「ずっと病院食だったでしょ？ だから、今日は自分の好物だけ作って食べたいんです」

最近はずいぶん減ったが、カカシも任務後に入退院を繰り返していた時期がある。アキの気持ちは理解できた。

「ま、無理のない程度に」

「はい」

先ほどの緊張感はずいぶん抜けたようで、返事をしたアキの笑顔はいつも通りのものだった。

「よかったら、カカシさんも一緒にどうですか？　もしかすると、ヤマトさんも来るかもしれないし」

「え？　ヤマトも来るんですか？　あいつ、マッサージのみならず、食事までタダで食べようとしているのかな」

カカシの言葉に、アキは声を上げて笑った。

「いえ。ヒビキくんがうちに来るって言ったとき、ヤマトさんにも声を掛けてと私が言ったんです。入院中、ときどきお菓子を差し入れてくれたので、そのお礼に夕飯でもご馳走しようかと思って」そして、アゴに指を当てて考え込む。

「サクラさんとヒナタさんにも、水撒きのお礼をしないと・・・」

「あいつらは後でいいですよ。あさっての晩は朔夜草を探しに行かなくちゃいけないんだし、それまでのんびりしてください。ところで、夕飯は残念ですが遠慮します。明日の任務の準備をしなくちゃいけないので」

「そうですか・・・じゃ、また次の機会にでも」

家に着くと、カカシが借りたいと言っていた本を探し、手渡した。

「じゃ、また後日」

畑を横切り、森の小道に入るカカシをぼんやり見送っていたアキは、その姿が見えなくなると小さくため息をついた。

「とりあえず、今日は朔夜草の代替品を作ってみよう。背後の気配にいちいち怯えてたんじゃ、身が持たないわ」

日が落ちた頃、ヒビキとヤマトがやってきた。

夕食のテーブルを囲んでいつものようにヒビキの話を聞き、和やかに時間は過ぎていく。

2人が帰ったあとも、家の中には楽しかった夕飯時の雰囲気が残っていた。

食器の後片付けを終えると、アキはいくつか作った試作品を保管室

から持ってきた。

テーブルに並べ、1つ1つの香りを確かめていく。

（うーん……。どれも物足りないというか……。やっぱり朔夜草とは違うな）

中でも一番ましだと思ったオイルを湯を張ったタライに数滴垂らし、椅子に座ったまま足を入れる。さらに手にも1滴垂らし、両手をこすり合わせ、鼻からアゴにかけて覆った。

そして、京子のことを思い出す。

後ろに衝撃を感じたこと、振り返ったときに見た京子の憎しみに満ちた表情、走り去る後姿……。そのときの言葉1つひとつも振り返り、気持ちを落ち着けようとする。

そのとき背後の窓の外で、鳥が鳴きながら飛び立つ音がした。アキの体はビクツと反応し、その反動でタライからお湯が零れ落ちる。

（……。困ったな……。やっぱり朔夜草じゃなきゃダメかも……。)

それでもやらないよりはマシだろう。毎日続けていれば、少しずつ改善されるはず。

そう思いながらタライから足を上げ、タオルで拭くと、流しに湯を捨てた。

柔らかな香りが部屋中に漂っているが、胸に巢食う恐怖はそのまま残っている。

（あさっては満月……。どうか、朔夜草を発見できますように。

そして、十分な量を採集できますように）

月を見上げながら、アキは切実にそう願った。

2日後の夕刻、カカシとヒナタがアキの家を訪れた。

「じゃ、探しに行きましようか」

カカシは言いながら、玄関に寄りかかる。

「カカシさん、それにヒナタさんも来てくれるの？ 心強いわ」

アキはカゴを手にして外に出た。

はじめに案内されたのは、満月の光もあまり届かない深い森だった。「月の光が届かないと、朔夜草も見えないんです。ここにはないと・・・」

説明しながら、急な音に怯えないよう、アキはつねに背後に意識を集中していた。おかげで足元のでっぱった石に気づかず、躓く。

「気をつけて」

カカシが腕を掴んで支えてくれなかったら、思い切り転んでいただろう。

アキに怪我がないのを確認すると、カカシはヒナタに指示を出した。

「ヒナタ、この周囲で変わった草は見当たらない？」

百眼で辺りを確認するヒナタの横で、アキが説明する。

「月の光を受けて、ほんのり輝いているのが朔夜草です」

「・・・うーん・・・。この辺にはないようですね・・・」

「じゃ、里の反対側に回ってみよう」

道々草むらの中を確認しながらゆっくり進むが、まったく見当たらない。

（今日もダメなのかな・・・）

諦めかけたとき、ちょうど里の英雄が眠る慰霊碑の辺りに差し掛かった。

「あれ・・・？ さっきは見えなかったのに・・・」

アキがヒナタの視線を追うと、慰霊碑の周りに淡く光る朔夜草がちらほら生えていた。

「あ・・・あった！ 信じられない。こんな近くにあったなんて・・・」

アキは一目散に駆けていく。その後を2人が追った。

「2カ月前にここを確認したときは、なかったのに・・・」

先月村へ行ったときも、ここに生えていたのだろうか。

「なんでだろう？ 百眼で見たときは、見えなかったんですよ」

ヒナタは頭を傾げている。

「もしかすると・・・私がある程度近づかないと現れないのかもしれない」

れない」

朔夜草を発見できるのは、草野家の血を受け継ぐ者だけなのかもしれない。だから母は朔夜草を採りに行くとき、必ずアキを連れていたのだ。

「そっか、そういうことか・・・」

一人頷くアキを、カカシとヒナタは訝しげに見ている。

「じゃ、早いところ集めて、家に帰りましょう。・・・しかし、意外とあっさり発見できましたね」

拍子抜けしたようなカカシの表情を見て、アキは申し訳なさそうに言った。

「もしかすると・・・先月から生えていたのかもしれませんが。あのとき、私は村に行っていたから・・・」

「でも、さっきはありませんでしたよ？」

ヒナタの問いに、アキは答えた。

「どうやら朔夜草を発見できるのは、草野家の直系のみのようです。何がどう作用するのかは分かりませんが、私がある程度近づかないと、姿を現さないのかも・・・」

「なるほど。そういうことですか」

自分の力不足だったのかと不安に思っていたヒナタは、安心したように微笑んだ。

アキはいそいそと朔夜草をカゴに集める。ヒナタも手伝ってくれたが、カカシは慰霊碑を見つめて立っていた。

（また・・・。今度は何を報告してるのかな）

カカシの姿を横目で見ながら、アキは胸を痛めた。

「お二人とも、今日はありがとうございました」

アキが礼を言うと、

「いえ。それほど役に立っていかなかったような・・・」
とカカシが笑った。

アキは首を振り、

「私一人じゃ、それほど歩き回れなかったはずです。お二人がいてくれたおかげで、すごく心強かったんですから」

と嬉しそうに微笑む。

先日のアキの怯え様を思い出したカカシとヒナタは、小さく頷いた。

「なら良かった」

「そうだ、ヒナタさん。押し花が好きだって言ってたでしょう？

ゼラニウムとカモミールの花が咲いたから、よかったら持っていて」

アキはそう言って、花瓶に刺して保管しておいた花を包んで手渡した。

「わぁ。このお花、かわいらしいですね」

「これだけじゃ水撒きのお礼には足りないから、あとでこの花たちから蒸留した精油も渡すわね。ちよつと時間がかかるけど・・・」

ヒナタはゼラニウムの香りを確かめ、

「お礼なんて・・・でも、すごく嬉しいです。精油、楽しみにしてますね」

と嬉しそうに微笑む。

「カカシさんには・・・」

アキは部屋の奥に行き、少し作業をしたあと、アイピロウを入れた袋を持ってきた。

「これ・・・前回差し上げたのは、3カ月前ですよ。効果はかなり薄れていると思うので、これを使ってください」

カカシも嬉しそうに受け取る。

「いやー、助かります。最近は、これがないと落ち着かなくて」

アキは微笑みながら、慰霊碑に立つカカシを思い出していた。

（今夜はたくさん朔夜草が取れてよかった。おかげでアイピロウの中に、取っておいた朔夜草を入れることができた）

翌日、アキはサクラとサイの家にハーブティーの包みを、キバには虫除けスプレーを届けた。シズネと綱手には入浴剤とフェイス用オイルを渡す。

（お見舞いに来てくれたのは、あとはガイさんでしょ、リーさんでしょ……。二人ともカレーが好きだって言ってたから、任務にも持っていけるレトルトカレーの詰め合わせをプレゼントしよう。・・・あ、そういえば、シノさんも1度来てくれたっけ）

シノが見舞いに来たとき、アキは眠っていた。目覚めたとき、サイドテーブルの花に気づき、看護師に聞いたところ、シノだと教えてくれたのだ。

（シノさん、匂いが強いのはダメだったよね……。どうしよう……。）

そのとき、八百屋で棚積みされている冬瓜を見つけた。

（確か、冬瓜が好きだって言ってたよね。でも、冬瓜をお礼の品に？ うーん……。）

冬瓜の前で考え込んでいると、遠くからナルトの声がした。

「おい、アキさん！ そんなところで何してるんだってばよ？」

アキは苦笑しながら、近づいたナルトに

「そんなに遠くから、大声で呼ばなくても」

と言った。

「だってさ、近くで急に声を掛けたら怯えちゃうかもしれないじゃん」

ナルトの言葉に、アキの顔が真っ赤になる。

「そっか……。気遣ってくれてありがとう」

「いいってばよ。・・・ところで、ずっとここで突っ立って、何やってるんだ？」

「シノさんにお見舞いのお礼を考えてたの。冬瓜が好物だって聞い

たけど、これをゴロンと持っていくのはどうかなって悩んで・・・」

「それでいいんじゃないの？ 要は気持ちだろう？」

ナルトの言葉にアキは頷く。それで、冬瓜を3つ買うことにした。

「そうだ、ナルトさんにもお礼しなくちゃね。一楽のラーメンでいい？ ちょうどお昼だし」

「ええ？！ いいのかよ！ ラッキー」

ナルトと一緒に一楽へ寄ると、アカネが顔を輝かせて迎えてくれた。

「アキさん、よかった！ 元氣そうね」

「うん。お見舞いのお花、ありがとう。お礼は何がいいか考えたんだけど・・・とりあえず、ラーメンをいっぱい食べに来ることにしようかな。あと、サロンを再開したら、いつでも来てね。サービスするから」

「わーい！」

こうして親しい人と語らううち、アキは少しずつ心がほぐれていくのを感じた。

（朔日草でのケアも必要だけど・・・こうして人と触れ合うことが、一番のケアになるのかもしれないな）

そう思いながら、アキはラーメンをすすった。

3日後は両親の月命日だ。宿屋の女主人と会える最後の機会かもしれないし、サロンもまだしばらく休むつもりなので、翌日里を発つことにした。

予定を張り紙に書こうとしたが、その張り紙を見て京子が待ち伏せしていたことを思い出す。

文字を書く手が止まり、そのままペンを置いた。

（誰かに伝えておけばいいか）

紙をまるめてゴミ箱に捨てると、荷物をまとめ始める。

「また村に行くんですか？」

カカシが玄関から顔を覗かせ、先日貸した本を差し出した。

「ええ。あさっては月命日ですから。宿は今回限りで閉まってしまうかもしれないし、行かないと」

本を受け取りながら、アキは言った。

「ちょうど良かった。今回は張り紙をしないので、もし私のことを聞かれたら、今日から3日後の夜に帰宅すると伝えてもらえますか？」

「それは構いませんが・・・」

カカシは眉を寄せた。

「退院してまだ間もないのに・・・。一人で大丈夫ですか？」

カカシが聞いているのは体力面より、精神面のことだとアキは気づいた。

「まあ、退院当初よりかなり落ち着いてますから。心配しないでください。朔夜草も十分な量を手に入れたので、自分に使うこともできましたし」

「そうですか」

カカシが頷くと、アキは本棚へ向かった。

「サロンを休んでいる間は自分の時間がたくさんあるので、この機会にと思って昨日日本を買い込んだんですよ。良かったら、2〜3冊持っていきますか？」

カカシは目を輝かせて中に入り、テーブルに置かれた新刊を手にとってぱらぱらとページをめくる。

「これと・・・これが面白そうだな」

2冊選び取ると、

「じゃ、遠慮なく・・・」

とカバンにしまう。

アキはにんまりしながら

「その2冊を選ぶなんて、さすがお目が高い。まだ4冊残っているので、返却はゆっくりでいいですよ」
と言い、残った本を片付けた。

女主人が言っていた通り、宿屋はまだ営業していた。しかし、向かいにあった居酒屋の戸は閉じられ、人の気配はまったくない。開け閉めすることのなくなった扉の前には、雑草が生えていた。

アキの視線を追った女主人は、ため息をつく。

「酔っ払いが騒いでいたときは、うるさいと文句を言いについたこともあるけど……。今は静か過ぎて寂しいっただけだよ。……でね、うちも、アキさんが帰ったら閉めることにしたんだ」

アキが寂しそうな表情を浮かべると、女主人の目に涙が浮かんだ。

「場所も決まったしさ。波の国に行く道の途中で、兄さんが料理屋を開いてるんだよ。そこそこ人は通るし、商売敵とも離れているから、いいかなと思ってね。料理屋を増築して、宿も商うことにしたんだよ」

女主人はティッシュで涙をかみ、エプロンで涙をぬぐった。

「アキさんはあの道をあまり使わないかもだけど……。機会があったら、ぜひ寄っておくれ」

アキは女主人の手を握ると、涙声で答えた。

「ええ、必ず」

女主人はアキの手をポンポンと叩き、ニッコリとする。

「約束だよ。じゃ、最後の夜だ。ゆっくりしてっておくれ。料理もいつもより豪華なものを用意するよ」

翌日、両親と村人たちの墓参りを行ったアキは、森の中へ足を伸ばして茂三の墓にも立ち寄った。

「ごめんね、茂三じいちゃん。いつもあっちのお墓ばかり行って。ここんところ、こっちには寄ってなかったよね」

そう言いながら、墓に水をかける。

「まだ問題は解決していないけど、少しずつ準備は進めてる。朔夜草もあったよ。知識を継承したのに、血族が近づかないと姿を現さないってことは知らなかった。自分で学ぶことも大事ってことなのかな。父さんが言ってた、『知識がすべてじゃない』ってそういう

ことなのかな」

そして、かつて畑があった場所にひっそりと生えていたラベンダーの花を供える。

「隣村もね、どんどん人がいなくなってるの。居酒屋はすでに閉まっていたし、今朝は宿屋のおばさんとお別れしてきたところ。これからは、納屋に泊まらないとね。1日中歩いてくるわけだから、お風呂がないのはつらいけど・・・」

アキは墓碑に手を添えて、名残惜しそうに撫でた。

「もつと話していたいけど、そろそろ帰るね。また来るから、待ってね」

木の葉に着くと、ヒビキが門の前に立っていた。

アキの姿を見つけたとたん、走り寄ってくる。

「アキさん、お帰り！ 遅いから、今日はもう帰ってこないのかと思った」

そう言って、アキが持っている荷物に手をかけた。

「持つよ。疲れただろう？ 家まで送るよ」

ヒビキの嬉しそうな表情を見て、アキは切なくなった。

（心配して待っててくれたんだ・・・。村から帰った私が倒れているのを見つけたのは、ヒビキくんだったもんね。トラウマを負ったのは、私だけじゃないんだ）

アキはヒビキの頭を胸に引き寄せ、強く抱きしめた。

「待っててくれて、ありがとう」

ヒビキは真っ赤になって身を引く。

「なんだよ、びっくりするじゃないか」

アキはヒビキのおでこを指で突付いてからかう。

「嬉しいくせに、照れないの・・・じゃ、道の途中で弁当でも買って一緒に食べましょう。お腹空いちゃった」

アキはヒビキの手を握り、そのまま歩き出す。

二人は手を繋いで門をくぐり、家へと向かった。

朔夜草は多く取れたので、修司に十分な量を使用できるうえ、翌月の満月まで切らすこともないだろう。

修司の施術の件を相談しようと、アキは綱手のもとを訪れた。

「前回の失敗は、私の技術不足・精神力の弱さのせいでした。本当はもっと鍛錬してからにしたいのですが、彼が引きこもってからもう1ヶ月以上たっています。健康状態も心配なので、早めに施術を行いたいのですが、私一人では無理かもしれません。そこで、任務を依頼しようかと」

「それは構わないぞ」

「できれば、ヒビキくんたちをお願いしたいのですが……。彼らなら状況を詳しく知っているので、説明する手間も省けるかと思えます」

綱手は書類をぱらぱらとめくった。

「修司の施術はいつ行うつもりだ？」

「できるだけ早く行いたいと思っています」

アキの言葉に頷いたあと、綱手は書類をしばらく睨んでいた。そして「2日後はどうだ？」

と提案した。

「それでけっこうです。ありがとうございます」

「相手は一般人だしな。ヤマトが付いてるし、あいつらでも大丈夫だろう。ところで・・・」

机の引き出しをかき回し、書類を取り出す。

「サクラから聞いただろう？ 薬の再開発の件だが、始める前に奈良家のメンバーも呼んで一度ミーティングを行いたいと思うんだ。で、これが再開発に関する書類。目を通しておいでくれ」

綱手はしばらく受け取った書類に目を通すアキを見ていたが、突然ニヤリと笑った。

「ところでお前、いつまでも一人であそこに住んでいるつもりはないだろう？」

質問の意図が分からず、アキは首を傾げる。

「はい？」

「お前は忍者ではないが、それなりに特殊な能力を持っている。キザシのときは、そのせいで狙われたしな。今回も京子に襲われたし、これからも何がきっかけで事件に巻き込まれるかわからない。そこで、だ」

綱手は厚い表紙のついた書類の山を手渡した。

「気分転換もかねて、見合いでもしてみないか？」

「・・・はああ?!」

驚いたアキは、書類をボトボトと落としてしまった。

「私が厳選した見合い相手の写真だぞ。ていねいに扱え」

「は、はい。すみません・・・」

アキは慌てて書類を拾い集めた。

「私がよく知っている者ばかりだ。身元はしっかりしているぞ」

綱手は自信満々にそう告げた。

「身元はしっかりしているかもしれませんが・・・。私、今度結婚するときは、心から愛する人と出会ったらって・・・」

アキはオドオドとした様子で写真を返そうとする。

「その中にいるかもしれないだろう？　まずは見合いをして、相手を知ることから始めろ」

それまで静かに話を聞いていたシズネが、苦笑しながらアキに耳打ちした。

「まあ、ここは一度受け取ってあげてください。京子の件、綱手様が解放を決定したもんですから、責任を感じてるんですよ。それで柄にもなく、余計なおせっかいをしようとしているだけなんです。付き合ってあげてください」

「綱手様が責任を感じる必要はないんですけど・・・」

アキも声を潜めながら、腕を組んでこちらを睨んでいる綱手をチラ

リと見た。

「そんな風には見えませんよ？」

シズネはクックツと笑い、

「意外と照れ屋なんですよ」

と答える。

「何を二人でコソコソと話している？」

綱手が怒鳴ると、二人は飛び上がった。

「そ、そうですね……。で……。では、ありがたくお受け取りいたします……。とりあえず、お見合いをするかどうかはもう少し検討させていただきますね」

アキはささやくような声で告げると、書類を抱えて部屋を飛び出した。

家に戻ったアキは、テーブルの上に写真を置いて途方に暮れていた。

「……。お見合いかぁ……。」

つぶやくと、1つの写真を手に取り、表紙をめくる。

左側のページに写真、右側には経歴が書いてあった。

「並足ライドウさんね……。私より5歳上なんだ」

身長、体重、血液型など基本的な情報のあと、『三代目火影の側近を勤めた』とも書いてある。

「けっこうすごい人なんだ……。」

そして、次の写真を取り上げた。

「この人はエビスさん……。アカデミーの先生かぁ。ヒビキくんも教わったのかな。次は……。神月イズモさん。えっ、年下？ ふうん……。」

写真と経歴を見るのが面白くなってきたアキは、次々と開いていった。しかし途中で

「でも、こんな個人情報を私に見せちゃっていいのかな。この人たちは、このことを知っているのかな」
と少し心配になる。

そこへ

「こんにちはー」

という声と共に玄関が開き、顔を覗かせたカカシが片手を上げた。

「どうも。本を返しに来ました」

「そんなに真剣な顔をして、何を見ているんですか？」

アキは慌てて写真を閉じ、脇に除けた。

「綱手さまが、お見合い写真だと・・・」

「お見合いー？ どうして急に？ で、誰を紹介されたんですか？」

カカシは興味深々の様子で、表紙を眺めている。

「えっと・・・。一応、個人情報なので、勝手にお見せするわけには・・・」

「里の忍者の情報ならだいたい知ってますけどね。ま、無理に見たいてわけじゃないんですが・・・」

アキが黙っていると、カカシはカバンから本を取り出し、

「これ、ありがとうございます」

と言いながら、写真の横に置く。

(・・・誰の写真だろう・・・)

隠されると、よけいに見たくなる。

カカシの視線を感じ、アキは守るように写真を移動させた。

「京子を釈放した件で、綱手様が責任を感じたようなんです。一人で暮らすのは危険だから、結婚してはどうかと思われたようで・・・。別に、結婚すると決まったわけじゃありませんし、お見合いするかどうかもわかりません」

そこまで説明する必要はないのに、何を言っているんだろう・・・とアキは思った。

「いや、いいんですけどね。見てはいけないと思うと、よけいに気になるというかなんと言うか・・・。まあ、アキさんと同年代で独身のヤツといえ、だいたい想像はつきますが」

「見せないと言われると余計に気になる、その気持ちはなんとなく

わかりますが……。ご本人の承諾なしにお見せするのははばかられるので、これは片付けますね」

アキは本棚の奥に写真を置き、代わりに小説を数冊引き出した。

「ところで、今日も持っていけますか？」

「じゃ、アキさんがすでに読んだものを1冊」

カカシは渡された本のあらすじを確認し、ニッコリする。

「これも面白そうだ」

アキはテーブルに座って肘を付き、身を乗り出した。

「それ、かなり面白かったです。特に、痛めつけられたヒーローと、彼を助け出そうと必死に頑張ったヒロインが再会を果たしたところ。熱々でドキドキですよ」

瞳をキラキラさせながら熱弁する様子を見て、カカシは噴出した。

「こういう本を読むなんて、普段のキャラからは想像できませんよ。ま、オレとしては嬉しいんですけどね。イチヤイチャシリーズの良さを理解する人だって、今まで身近にいなかったんですから」

アキはニッコリ笑いながら、椅子の背もたれに身を預けた。

「そうですか？ 私が今買っているのは別として、父はイチヤイチャシリーズの熱心なファンでしたからね。その血を受け継いだんでしょう」

その後カカシが帰ると、アキはまたお見合い写真を取り出した。

（お見合いかぁ……。そういうのって、緊張しちゃうな）

それに、結婚は自分の安全を確保するためのものではない。やはり、気持ちを通じ合う相手でなくては……。ただ、出会いがなければ愛する人に巡り会えるはずもない。もしかすると、お見合いの席で見つかるかも。でも……。

そこまで考えたところで、アキは気持ちを切り替えた。

どちらにしても、修司の件を解決しないと。自分のことは、その後考えることにしよう。

やっと・・・というか、とうとう修司の施術を行う日がやってきた。緊張のせいか、いつもより早く目覚めたアキは、早めにハーブの手入れを終えてしまおうと畑に出た。京子に荒らされて土ばかりになった部分も、今はだいぶ緑や色とりどりの花に覆われている。そのひとつひとつの状態を確かめ、有害な虫がついていないかどうかを確かめていった。

途中、頭をすっきりさせようとローズマリーの葉を摘み取り、香り確かめる。これもやはり緊張のためなのか、胃の調子が悪いため、ハーブティに入れようとレモングラスも摘んだ。

実は今回の修司を最後に、深層心理に接触する施術はしばらく行わないことを決めていた。もっと技術を磨き、精神面を鍛え、かつて捕虜から情報収集を行っていた祖父の茂三に追いついたと確信できるまでは。今の技術力・精神力で修司の施術を行うのも不安だが、だからといって現状のまま放っておくことはできない。集中し、小さなミスも見逃さないよう対処しなくては・・・。同じ失敗を繰り返してはいけない。

一通りの作業を終えると、アキは万全の準備を行うため、家の中へ戻った。

10時に修司の家の前に着くと、すでにヤマトたちは集合しており、ヒビキがアキのもとへ駆け寄ってきた。

「さっき声を掛けてみたんだけど、ぜんぜん反応がないんだ・・・アキさん、本当に大丈夫？」

アキのこわばった表情を見て、ヒビキは不安げな様子で尋ねる。

「うん。今度は失敗できないからね。緊張してるだけ」

アキが答えていると、ヤマトも近寄ってきた。

「窓から覗いてみたんですが、カーテンがぴっちり閉まっています。」

僕の本遁で鍵を開けて入ってもよかったんですが、一応アキさんを待ったほうがいいかと思い、待っていました」

そう言うと、2階の窓で少しだけ揺れたカーテンをいぶかしげに見上げる。

「とりあえず、中にいるのは確実です」

アキは頷くと、玄関に近寄った。

「修司さ・・・」

呼び終えないうちに、玄関の戸が勢い良く開く。

「良かった！　元気そうですね」

目に飛び込んできた人物の容貌に、アキは愕然とした。これは修司なのだろうか・・・？

かつてキレイに刈り揃えられ、清潔感の漂っていた髪はボサボサに伸び、油で固まって四方好き勝手に飛び跳ねている。顔はげっそりとして青黒く、目が異様に大きい。風呂にも入っていないのか、強烈な異臭も漂わせている。以前引きこもっていたときより、数段悪くなっているのは明らかだ。

アキはひるんだが、なんとかその場に踏みとどまった。

「修司さんは、あまり元気ではなかったようですね」

修司は自分の体を見下ろした。

「確かに・・・。あいつが・・・京子がアキさんに危害を加えたと聞いて、私は、・・・私は・・・」

修司は両手で顔を覆い、泣き始めた。

「・・・私は・・・私のせいだと思って・・・」

アキは優しく微笑んで、修司の腕に手を置いた。

「そんなことはありません。原因は私にあるんですから。その原因を取り除くため、今日は施術に伺いました」

修司はうなだれ、黙って小さく頭を振った。

「まだそんなことを・・・」

アキは腕に置いた手に力を込めて

「いいえ。施術は必要です。修司さんの姿を見て、確信しました。」

でも・・・その前に、お風呂に入っていただかないと。これでは香りの効果が薄れてしまいます」と告げる。

すると修司は

「どうしてですか？ 私は今でもアキさんを・・・でも京子がアキさんにしたことを考えると、胸が張り裂けそうで、それで家に・・・」

アキは悲しげな微笑みを浮かべた。

「どんなに修司さんに拒否されても、施術しなければ。どうかご理解ください。ヤマトさん、ヒビキくん、ゲンタくん、修司さんの入浴を手伝っていただけますか？」

「えっ？」

指名された3人は、あんぐり口を開けている。

「ほとんど食べていないようですし、入浴中に倒れる可能性もあります。お願いできますか？」

「で、でも・・・」

ヒビキとゲンタは思い切り嫌がるそぶりを見せたが、ヤマトは意を決したように頷いた。

「わかりました。・・・ヒビキ、ゲンタ、これも任務だよ。さ、行こう」

そして修司の腕を掴むと、

「お風呂はどちらですか？」

と中へ促した。

「い・・・いやだ！ アキさん、ひどいですよ。どうして私がこんな奴らと風呂に・・・」

「だって、私とヤオイちゃんは女性ですから、素っ裸の修司さんを見るわけにはいきません」

小首をかしげてアキが答えると、隣に立ったヤオイもしかめっ面で頷く。

「そんな・・・だからって・・・い、いやだ。頼むから・・・」

手を離してくれ！」

立っているのが精一杯な状態までやせ細った修司は、ヤマトに引きずられるように風呂場へと向かった。

「それじゃ、私たちはお風呂上りに食べられるよう、何か用意しましょう」

修司たちが風呂場に消えると、アキはヤオイを連れて台所へ向かった。

その台所に着いた二人は、言葉を失い、呆然と立ちすくむ。

「うわ……。きつたない……」

ヤオイの言葉通り、かつて台所だった場所はゴミ置き場のような状態になっていた。

さまざまな食品の袋やトレイが床に散らばり、利用された皿や箸はテーブルの上やシンクの中で山となっている。食器に残った食品はみな茶色く乾燥してこびりつき、なんともいえない臭いが辺りに漂っていた。

「まずは……。片付けるところから始めないといけないみたいね。」

お風呂が終わるまでに、食べ物を用意までできるかしら……」

アキは先頭に立ち、恐る恐る台所へと足を踏み入れる。足の踏み場もないほど散らかったゴミをまとめるだけで、かなりの時間を取られた。

「アキさーん、これ、1日かけても無理ですよ」

背後から、ヤオイの情けない声がする。

「……じゃ、おかゆを作るための器具の洗浄とスペースの確保だけでも頑張らしましょう」

アキは妥協することにした。

風呂場からは時々「ギャー」とか「ウェツ」など、何やら叫び声が聞こえてくる。

その後二人は黙々と作業を続けていたが、ふいにヤオイが

「ひえー！」

と叫び、足を滑らせて転んだ。

「どうしたの？」

驚いてアキが駆け寄ると、

「ご、ゴキブリですう！」

としがみついてきた。

「ま、待っててね」

アキは台所の戸を開け、箒を掴んでゴキブリを探す。

目の端に素早く動く影を見つけると、箒を叩きつけて床に落とした。そのまま戸から外へ掃き出すと、

「もう大丈夫」

とヤオイに微笑みかけた。

「すごい。かっこいいー」

ヤオイはしきりに感心している。アキは照れて

「ハーブ畑にはいろんな虫がいるし、ゴキブリだってただの虫。慣れよ、慣れ」

と片手を振ってたいたことはないと伝えた。

「さて。ゴキブリも片付けたことだし、早くおかゆを作るとしまし
ようか」

「見たくもないものを見ちゃった」

忍服をとどころ濡らし、ヒビキがげっそりしている。

「大変だったみたいね、ありがとう」

アキが微笑むと、ヒビキは何を思い出したのか、なみだ目になった。

「任務とはいえ・・・今夜は悪夢を見そうだよ」

ゲンタも疲れた様子で、

「すぐく汚れててさ。湯船は2度お湯を変えないといけなかったんだぜ？ 一回目なんて、怪しげなものがプカプカ浮いてきてさ。ど
んだけ洗ってなかったんだろうな。髪は3回目でやっと泡が立った
し」

とぶつくさ言っている。

「でもね、台所だって大変だったんだから！ 蠅はぶんぶん飛んでるし、ゴミの下からゴキブリがいきなり飛び出してくるし！」

ヤオイも負けじと声を張り上げた。

「でもさ・・・オレ、手が滑って変なもの触っちゃったし・・・」
ヒビキの顔が一気に青ざめた。

「君たち、苦労自慢はそれくらいにしておきなさい」

そう言いながら修司を連れて居間に入ってきたヤマトも、どんより暗い表情をしている。よほど大変だったらしい。

垢を落とした修司は、青白さが一層際立って見えた。風呂で疲れたのか、足元がおぼつかない。アキと目が合うと、悲しげな視線を送ってきた。

「どうしても施術は必要ですか？」

「ええ」

疲れたようにため息をつき、修司は頷いた。

「分かりました。それでアキさんに迷惑を掛けることがないのなら・・・」

疲労のあまり、抗う気力が失われたのだろう。その力ない姿に、アキの胸は痛んだ。

「施術の前に、とりあえずおかゆを食べてください。今にも倒れそうですねから」

おかゆを入れた茶碗を差し出すと、修司の目が輝いた。

「ああ、ありがとうございます。まともな食事を取るのは久しぶりだ。しかもアキさんが作ってくれたなんて・・・」

「ヤオイちゃんも手伝ってくれたんですよ」

答えながら、アキは京子のことを思った。前回引きこもったときは彼女が世話をしていたから、ここまでボロボロにならなかったのだ。修司を好きだった彼女を、知らず知らずのうちに追い込んでしまったことを思うと、切なくなる。彼女も一生懸命だったんだ・・・。

「施術が終わったら、京子さんを訪ねてあげてください」

幸せそうにおかゆをすすっていた修司の表情がこわばり、手が止まった。

「なぜ、あんなヤツのことを？ あなたを刺したんですよ？」

「京子さんは、修司さんのことを好きだったんです」

アキが答えると、修司はテーブルに茶碗を置いた。

「知ってましたよ、妻が生きていた頃から・・・。何かと私につきまとして、時には妻を差し置いてでしゃばることもありました。何とかしなくてはと思っていたとき、妻が倒れて・・・。あとは、ご存知の通りです。私は殻に引きこもり、京子に抗う気力もなく、彼女のなすがままでした」

修司は小さくため息をつき、再びおかゆに口をつけながら話を続けた。

「アキさんの施術で立ち直った頃から、京子の存在がまた疎ましくなっていました。サロンに行くといえば、『何時に帰ってくるのか』と問いただし、必ず道の途中で私の帰りを待っていたんです。少しでも遅くなると責められて・・・。私がアキさんに夢中になればな

るほど、私を束縛しようとする。実はアキさんの畑が荒らされる前日、彼女に店を辞めてもらおう言い渡したんです。それがあんな結果に・・・」

するとヤオイは目を丸くしてつぶやいた。

「えー？　じゃあ、ストーカーがストーカーされてたんだ？　うわあ」

「ヤオイちゃん！」

アキが小声でたしなめると、

「だって・・・」

と小さくなる。

修司はヤオイの言葉を気にしない様子で、さらに話を続けた。

「私が解雇を言い渡すことで、彼女があんな行動に出るとは予想していませんでした。アキさんの畑が荒らされたのも、刺されたことも、ぜんぶ私のせいなんです。そう考えると、つらくてつらくて・・・」

「それで引きこもったってわけか。情けねえな」

ゲンタの吐き捨てるような言葉に、修司の身が小さく縮んだ。

「ゲンタくん！」

「ゲンタの言う通りだよ。だって、アキさんのことが好きだったら、見舞いくらい来たっていいだろう？」

たしなめようとしたアキの言葉をさえぎり、ヒビキが言う。

「それは・・・。一度はお見舞いに行っただんですが、まだアキさんは昏睡状態で会えませんでしたし、その後は考えれば考えるほど、私のせいで刺されたんだから合わせる顔がないと思って・・・」

修司はうなだれ、小さな声で言い訳をした。

「とにかく修司さん、おかゆを食べ終えてください。そのあと、アキさんの施術を開始することにしましょう」

ヤマトが言うと、修司は頷いて茶碗を傾け、飲み干すように平らげた。そして箸を置き、

「じゃ、アキさん・・・」

と呼びかけながら正座をし、深々と頭を下げた。

「よろしく願います」

テーブルを除け、カバンからオイルを取り出すと、アキも修司の前に正座した。

「こちらこそ、よろしく願います。・・・こんなことになって、本当に申し訳なく思っています」

そして、ヤオイが運んできた敷布団を指し示す。

「では、こちらに横になって胸をはだけてください」

アキは修司の胸にオイルを塗り、手を当てて目を閉じ、集中する。血流に乗って少しずつ修司の内面に接触を試みると、前回より大きく感じる暗闇に驚いた。

（まさか、こんなに大きくなっているなんて）

しかし、ひるんではいけないと自分に言い聞かせる。修司さんを立ち直らせるのは、私の義務だ。

暗闇を少しずつ狭めようとするが、温かなイメージを送り込んでも、すぐに侵食される。

「・・・修司さん、抗わないでください・・・」

眉間に皺を寄せ、集中力を高めながらアキはささやくように言った。

「抗うつもりはないんですが・・・」

苦しい口調で修司は答える。

「・・・修司さんが本来持つ温かな人柄を引き出そうとしているんです。私が送り込むイメージを受け入れてください」

アキの額に鈍痛が走る。深層心理に接触するといつも感じる痛みだが、今回は特に重かった。その痛みを無視し、ひたすら修司の暗闇にイメージを送り続けた。

どれだけ時間がたったのだろう。ほんの少しずつ暗闇の力が弱まり、その分温かなイメージが広がり始める。

（もう少し・・・）

力を緩めず、細部まで気を配りながら施術を続けるうち、やっと小さな亀裂程度にまで暗闇を狭めることができた。

（これ・・・。前回、感情が同調したところかも・・・）

そう思い、意識をこらす。しかしどんなにイメージを送り込んでも、その亀裂部分は広がりもしなければ縮みもせず、ただその場に留まるのみだ。

（どうして・・・）

アキのイメージは、亀裂に吸い込まれて消えていく。もしかすると、誰もが本来持つ心の裏側、普段は顔を見せない暗闇なのかもしれない。いつもは奥底で眠っているが、小さな傷ができることでどんな広がりを見せるのかも・・・。ならば、完全に消すことはできないだろう。

イメージを送り込み続けても無駄だと思い、今度は亀裂を縫い合わせるようなケアを試みた。

亀裂が少し狭まってきた。

頭痛がひどくなる。吐き気さえ感じるほどだ。

でも、もう少し・・・。

最後の点まで消えたと確信できたとき、頭の中で光がはじけたように感じた。そしてそのままアキの体が横に傾き、ゆっくりと床に倒れる。

「アキさん！」

じっと息を潜めて成り行きを見守っていたヒビキは、アキの傍らに駆け寄った。

修司の苦しげだった表情が和らぎ、ゆっくりと目を開く。

「・・・ああ、なんだかすっきりとした気分だ・・・」

つぶやきながら身を起こし、傍らに倒れているアキに気づいた。

「どうしたんですか？！」

尋ねたが、誰も答えない。ヤマトはアキの脈や瞳孔を確認したあと、修司の問いに答えた。

「・・・施術は終わったようですね。僕たちはこのまま、アキさんを病院に連れていきます」

「え・・・？ アキさんはどうしたんですか？」

「わかりません。急に倒れて、そのまま意識を失ったようです。あなたは・・・大丈夫のようですね。アキさんは至急医療班に診てもらう必要があるのです、これで失礼します」

ヤマトはアキを抱きかかえると、ヒビキたちに頷いた。

「君たちは任務終了の件を五代目に報告してくれ」

「オレも・・・」

ヒビキが近寄ろうとすると、ヤマトは首を振った。

「じゃ、僕は急ぐから。報告を頼んだよ」

そしてあっという間に姿を消した。

「ちくしょう・・・」

拳を握り締めるヒビキの肩に、ゲンタが手を置いた。

「さっさと報告を終わらせて、病院に行こう」

「なんだと？ また倒れたのか？ 今度は何だ？」

綱手の大声に、3人は身をすくめた。

「・・・分かりません・・・。施術が終わったと思われる瞬間、アキさんの体がビクツとして・・・。そのまま倒れてしまいました。その後すぐヤマト先生はアキさんを病院へ連れていき、私たちは報告をしなくてはいけなかったのです、こちらへ」

怯えながらも、ヤオイは説明を試みた。

「で、修司は？」

「かなりすっきりとした表情になっていました。騒動の元のくせに」ヒビキがムツとした表情で言う。

「そうか・・・。とりあえず、任務の目的は無事果たせたのだな。あとはアキか・・・。シズネ、様子を見てきてくれるか？」

「はい」

シズネは3人を従え、火影室を出た。

ヤマトは待合室で、一人ベンチに座っていた。

ヒビキたちをヤマトに任せると、シズネは一人で治療室へ向かう。横たわるアキの頭に手をかざしている医療忍者はシズネが入っても無反応だったが、その横で記録を取っていた者が近寄ってきて、小声で説明した。

「クモ膜下出血でした。彼は現在、出血の原因となった血管を修復しているところです。早期に対処できたので、後遺症の心配はないと思いますが・・・」

治療に当たっていた医療忍者の説明に、シズネは頷いた。

「まだ、再出血を起こす可能性が残っているわね。少なくとも、今後24時間は暗室にて絶対安静、面会謝絶をお願いします」

「わかりました」

元気なアキと会話したのは、つい一昨日のことだ。綱手が持ち出した見合い話にアタフタしていたアキの姿を思い出し、シズネの胸が痛む。

「私は綱手様の元へ戻ります。少しでも変化があったら、すぐ連絡してください。私も治療に参加しますから」

待合室に戻ると、ベンチに座っていた4人が一斉に立ち上がった。

シズネが病状を説明すると、ヒビキの目に涙が浮かぶ。

「じゃ、そばにすることはできないの？」

「今は細心の注意を払う必要のある治療を行っているし、その後も再出血を防ぐために、24時間は降圧、鎮静、鎮痛を十分に行わなくてはいけない。クモ膜下出血から完全治癒できた人は全体の2割程度と言われているけど、アキさんはその2割に入ると思う。そのためには、絶対安静、面会謝絶が必要なのよ。わかって」

シズネの説明に、ヒビキは力なくベンチに座った。

「なんでだよ・・・。アキさんばかり、こんな目に合うなんて・・・」

「もともと血管が弱かったのかもしれない。そこへ施術が大きな負担をかけて、出血してしまったのかも。もし完全治癒できたとしても、あの施術は禁止すべきね」

うつむいたヒビキの目から涙が零れ落ち、忍服にシミが広がっている。

「泣いてもアキさんは良くなりませんよ。それより、アキさんのために自分に何ができるかを考えたらどうかな。たとえば、いつも大切に行っている植物の手入れとか」

ヤマトが言うと、ヒビキは袖でゴシゴシと顔を拭いて立ち上がった。「そうだ。目覚めたとき、ハーブがダメになったって聞いたら悲しむよね。オレ、畑の様子を見に行くよ」

そう言って、待合室から駆け出していった。

「私も」

「オレも」

ヤオイとゲンタがヒビキに続く。

「別に今じゃなくてもいいんだけどね・・・」

後ろ姿を見送りながらため息をついたあと、シズネに向き直る。

「それで、本当に完全治癒するんでしょうか？」

「脳は非常にデリケートな部分なので、断言はできませんが・・・。処置が早かったこと、治療に当たっている者は脳のエキスパートであること、そして」

シズネは自分を納得させるように小さく頷いてから、話を続けた。

「一見とても運が悪いように見えるけど、それを乗り越えてきたアキさんの生命力。それを信じるしかありません」

「アキさんが?!」

シズネから話を聞いたサクラは、驚いて大声を出した。ナルトとカカシも同様に驚きの表情を浮かべている。

「そうなの。治療はさっき終わって、今は暗室で休んでいるわ」

「ちょっと様子を・・・」

サクラは病院に行こうとしたナルトの腕を掴み、引き止めた。

「ダメよ。今は絶対安静だし、面会も禁止のはず。ですよ、シズネ先輩?」

「サクラの言う通りよ。治療を行った者の話では、おそらく再出血はないだろうってことだったけど、それでもまったく危険がないわけじゃないし・・・。とにかく今は、静かな場所で安静に過ごしてもらえないの」

「何が原因ですか?」

カカシが聞くと、シズネが答える。

「おそらく、深層心理に接触する施術は、施術者の脳になんらかの負担をかけるのね。で、アキさんはもともと血管が弱かったようで、今回受けた負担に耐えられずに破裂してしまった、と。そんな感じだと思います」

カカシは少し考えたあと、

「以前、村でヒグラシさんに施術したときも、頭が痛いと言っていたような・・・。あのときは短時間だったから大丈夫だったのかな」といった。

「おそらく。様子を見ていたヤマトさんによると、今回はかなりてこずっていたようです。施術には1時間ほどかかったと言っていました」

ヒグラシのときは、数分だった。それでもあんなに苦しそうだったのに・・・。カカシは悲しげに目を伏せた。

24時間暗室で過ごしたアキの脳は、再出血を起こすことはなかった。

シズネ自らが確認したところ、不安な要素は見当たらず、脳波も安定している。

それでもアキが目を覚まし、麻痺などの後遺症が残っていないかどうかを確認しなければ、安心はできなかった。

心配する人々が、ひっきりなしにアキの様子を聞きにくる。要因となった修司も、さきほどやってきた。心配で顔を曇らせてはいたけれど、以前よりずいぶん落ち着いた雰囲気、アキの施術が成功したことを物語っている。

（よかったね、アキさん。頑張ったかいがありましたよ）

青白い顔で眠り続けるアキに、シズネは心の中で話しかけた。

ヒビキたちは毎朝アキの畑に集まり、植物の世話を行っていた。虫が苦手なヤオイは最初頻繁に叫んでいたが、次第に慣れてきたようだ。

「こうしていれば、アキさんみたいにかっこよくゴキブリを仕留められるようになるかな」

すると、かがんで葉についている虫にスプレーをかけていたゲンタが身を起こしていった。

「お前、仮にも忍者なんだからな。ゴキごときにビビって、一般人に助けられてんじゃねえよ」

「なによ！ 忍者だって、ゴキブリは苦手なのよ」

「巨大ゴキブリを口寄せする忍者と戦うことになったら、お前、一発でアウトだな」

ゲンタの言葉に巨大ゴキブリを想像したヤオイは、大きく身震いした。

「そんなときのために、チームを組むんでしょ。巨大ゴキブリが相手の場合、私は後方支援に徹するから」

無言で作業を続けていたヒビキは、二人を睨む。

「無駄口叩いてないで、早く作業しろよ。もう少しで任務の時間なんだから」

「はい、はい」

ゲンタとヤオイが作業に戻るのを確認すると、ヒビキもすぐに植物へ視線を戻した。

ヒビキは植物とアキがリンクしているように感じていた。植物が元気である限り、アキも無事であるような、そんな気がする。

（早く面会謝絶が解けないかな・・・）

アキに会いたくてたまらなかった。

3日間、アキは目を覚まさなかった。血圧を安定させるための鎮静剤を投与されているせいか、夢も見えていないようだ。呼吸のたびに胸が上下する以外は、まったく動く様子もない。

サクラはお湯で濡らしたタオルで、優しくアキの体を拭いている。その胸元にある、葉をモチーフにしたペンダントがふと目に付いた。（これ・・・。アキさん、ずっと身につけてるよね。大切なものなのかな）

よく見ると、皮ひもはずいぶんくたびれている。そっと持ち上げると、銀素材の葉がキラリと光った。

「きれい・・・」

つぶやくと、アキのまぶたがほんのわずか開いた。

「アキさん？」

驚かせないように小声で呼びかけるが、まぶたは再び閉じてしまった。

アキの頭に手をかざし、様子を確認する。

（・・・特に変化はないようだけど・・・）

サクラは、毎日来院しては肩を落として帰っていくヒビキに思いをめぐらせた。

（このままだと、ヒビキの神経が持たないかも・・・。アキさん、

早く目を覚まして)

サクラの心の声が届いたかのように、再びアキのまぶたが震える。

「アキさん？」

もう一度小さな声で呼びかけてみた。

今度はまぶたが半分ほど開く。

焦点が定まらないのか、瞳孔がせわしなく縮んだり広がったりしている。

しばらくそのままの状態が続いたが、何度かまばたきを繰り返したあと、アキのまぶたが完全に開いた。

サクラが瞳孔を確認すると、きちんと反応する。

おそらく倒れる直前の記憶は消えているだろうから、現状の把握に苦勞しているに違いない。

「アキさん、分かりますか？ アキさんは今、病院にいます。修司の施術をしたあと、クモ膜下出血で倒れたんですよ」

アキはゆっくりサクラへ視線を移した。

「しゅう・・・じ・・・さん？」

「はい。施術は成功して、本来の自分を取り戻したようです・・・
といっても、アキさんのことは心配で仕方がないみたいですけど」

アキはゆっくりと息を吐いていった。

「・・・よかった・・・」

「ちょっと待ってくださいね」

サクラは廊下を覗き、ちょうど通りかかった看護師に声を掛けた。

「シズネ先輩に、アキさんの意識が戻ったと伝えてください」

アキの傍らに戻ると、その手を握った。

「ヒビキにも伝えないとですね。でもあいつが来たら騒々しいから、もう少し後でもいいかな」

アキは小さく微笑む。

「ヒビキたち、毎日ハーブの手入れをしていたみたいですよ。今回は私もヒナタも出番なしでした。そうそう、ヤオイは虫に慣れてきたって。ゴキブリはやっぱダメみたいですけど」

アキが眠っている間の出来事を、サクラはゆっくりと話していった。しばらくすると、シズネがやってきた。

「こんにちは。お目覚めですね」

シズネの笑顔が見えると、アキも嬉しそうな表情を浮かべた。

「予後も順調ですし、後遺症の心配もなさそうですね」

目覚めたあとの様子をサクラから聞いたシズネは、安心したように小さく息を吐く。

「あとは、体に麻痺があるかどうかですが……。今すぐ確認するのは無理なので、体調を見ながら今後少しずつ確かめていきましょう」

シズネの言葉に頷くと、アキのまぶたが少しずつ下がっていく。

「疲れたようですね。では、今日はこの辺で失礼します。じゃ、サクラ、私は戻るから。あとはお願いね。面会はもうしばらく遠慮するよう、周囲には伝えておく。まだまだ安静にしてもらわなくちゃだから」

アキの意識が戻ったと聞いたヒビキはすぐにでも会いに行きたかったが、もうしばらく我慢しろと言われてなみだ目になった。

「サクラやシズネさんと数分話ただけで、疲れて眠ってしまったそうさ。お前のマシンガントークを聞かされたら、また昏睡状態に戻ってしまうかもしれないよ」

ヤマトが言うと、歯を食いしばって言う。

「わかったよ。……そんなに心配そうな目で見ないでください。

アキさんに回復してもらうためなら、面会くらい我慢できます」

「そうか。じゃ、3人とも修行に戻って。面会できるようになったら、すぐに知らせるから」

ヤマトが言うと、ヒビキたちは演習場へと向かった。

日を追うごとに、アキが目を覚ましている時間は長くなっていった。1週間たった頃には、10分程度の面会なら許されることになり、

その初日にやってきたのは施術に協力してくれたヤマトたちだった。
「アキさん！」

ヒビキがいつものように駆け寄ろうとすると、ヤマトはその襟首を
掴み、

「大きな声を出さないように」

と注意した。

「わ・・・わかってるよ」

今度は声を潜め、

「アキさん、久しぶり。元気そうだね」
と言う。

アキはクスクス笑い、

「そこまで小さくしなくてもいいのに」

と言いながら、そばに来るよう手招きした。

ヒビキの顔が輝き、アキのもとへ飛んでくると、その手を握る。

「オレたちね、アキさんの植物がちゃんと育つように、毎日手入れ
してたんだよ」

ヤオイとゲンタもヒビキの横に立ち、ニツコリと笑った。

「私ね、少しなら虫も平気になったの。アキさんの言う通り、慣れ
だね。でも、ゴキブリはやっぱりダメだなあ」

「オレ、植物育てるのって初めてだったんだけど、けっこう面白い
のな。毎日いろんな変化が見られるし」

「サクラさんから聞いているわ。あなたたちのおかげで、とても助か
った。ありがとう」

礼を言われた3人は照れ笑いを浮かべた。

後ろで話を聞いていたヤマトも明るい表情で言う。

「今日までこいつらを引き止めるの、大変だったんですよ。面会は
まだかまだかと、うるさくて」

「そうだったんですか・・・。お疲れ様です」

同情の表情を浮かべ、アキが答えた。

「早く退院して、オレたちが育てた植物を見てほしいなー。けっこ

ううまくやったと思うんだけど」

ヒビキははしゃいでいる。

「私も早く見たい。・・・もう入院生活はコリゴリだと思ってたんだけど、また入院しちゃったね。早く動けるようになっていたいな」
絶対安静が解けていないアキは、一人で勝手にベッドから降りるのも許されていなかった。

「でもさ、看護師さんはアキさんって通常の患者より回復が早いって言ってたよ」

ゲンタが言うと、

「うーん。普段からハーブを使っているからかなあ。あれって、健康増進や病気の予防に役立つのよね」

と答える。

「もともと血管が細いところに、大きな負担がかかったせいで出血したと聞きましたが・・・じゃ、ハーブのおかげで今まで無事だったってことですかね」

ヤマトが聞くと、アキは小首をかしげて考え込んだ。

「うーん・・・。どうでしょう。どちらにしても、クモ膜下出血を経験した人は再発もありえるようですから、今後はその対策を講じたオイルやお茶を利用しようと思います」
するとヒビキが青ざめた。

「再発の可能性？」

アキは苦笑した。

「まあ、大丈夫だと思うけどね。そんなに心配しないで。二度と起きないようにしないとって話なんだから」

そしてヒビキの手を両手で包み、安心させるように強く握る。

しばらくすると、アキの顔色が悪くなってきたので、ヤマトたちは暇を告げた。

「また来るからね。しっかり休んでいてくれよ」

ヒビキが言うと、アキはニッコリする。

「お願いね。ずーっと病室にしていると、退屈で退屈で」

一行が病室から出ていくと、アキはすぐ眠りについた。

ヤマトたちが病院を出ると、ちょうどカカシがやってきたところだった。

「アキさんのお見舞いですか？」

ヤマトが聞くと、

「本を返そうと思ってね」

と答える。

「ダメだよ。アキさん、疲れて寝ちゃったから。カカシ先生は明日また来てよ」

ヒビキが猛然と言う。

「え、そうなの？ お前たち、何か疲れさせるようなことしたの？」
カカシがいうと、ヤマトが笑った。

「そうなんですよ。こいつら、久しぶりに会えたもんだから、はしゃいちゃって。ヒビキなんて、ずーっと甘えてたしな」

「甘えてなんかないよ！」

ヒビキは真っ赤になった。

「ま、アキさんが寝てるなら、本は枕元に置いとけばいいか。じゃ、お前たち。しっかり修行するんだぞ。じゃな」

カカシはヒビキの頭をポンポンと叩くと、病院へ入っていった。

「そうだな。待望のアキさんに会えたことだし、今日の修行はじっくり行うよ。さ、行こうか」

「じっくりって・・・えー？」

ヤマトは不安に顔をこわばらせる3人を従え、第3演習場へと向かった。

カカシが病室に入ると、眠っているアキの横でサクラが点滴を調整していた。

「あ、カカシ先生。今日の面会はもう終わりです。アキさん、すご

く疲れたみたいで・・・」

サクラが言うと、カカシは

「いや、いいんだ。ちょっと本を返しに來ただけだから。お見舞いはまた後日改めてくるよ」

と答える。

サイドボードの上に本を置こうとして、以前アキにお土産で渡したペンダントに気づいた。

「これ・・・」

見ると、皮ひもがずいぶんくたびれて、今にも千切れそうになっている。

「あ、それ、素敵ですよー。アキさんのお気に入りなのかな。紐がそんなにボロボロになっているなんて、いつも身につけているんですね」

サクラが言う。

「これ、亡くなったご両親とお揃いなんだ。村でご両親の遺体を埋葬したとき、二人が身につけていてね」

「・・・そうなんだ・・・」

サクラは同情のまなざしでアキの寝顔を見つめた。

「任務のとき、同じものを見かけたからお土産に買ったんだけど・・・。同じ銀素材のチェーンかなにかを用意したほうが良さそうだな」
ペンダントを持ち上げながらカカシが言うと、サクラの目がキラリと光った。

「へー。優しいんですね、カカシ先生？」

「え？」

「私たちには、お土産なんて買ってくれたことなかったのに」
サクラがニヤニヤしながら言う。

「え？ だって、任務で一緒のことが多いし。それにお前たちだつて、けっこう里の外に行くじゃないか。お土産の買っこなんてしてたら、キリがないぞ」

「ふうーん」

サクラのニヤニヤ笑いに耐え切れず、カカシはさっさと病室から出ることにした。

（なんだよ、サクラのあの目は。ったく、成長するにつれて、やたら人の詮索をするようになってきたな）

その2日後、カカシは再び病院を訪れた。

病室に入ると、アキは起きて本を読んでいる。

「本なんて読んでいいんですか？」

カカシが声を掛けると、本を閉じてサイドボードに置いた。

「こんにちは。・・・大丈夫ですよ。起きている間は、退屈で仕方がないんです。といっても、長時間文字を追うのは無理なんですよね。すぐ疲れちゃって」

ベッドの横に置いてある椅子に座ると、カカシはバッグから小さな袋を取り出した。

「ペンダントの紐と取り替えてください」

アキが袋を開けると、中から銀色のチェーンが出てきた。

「これ・・・」

サイドボードに乗せてあったペンダントを取り、紐を外す。

「お風呂に入るとき以外は、ずーっと付けてましたから・・・私が眠っているとき、紐がくたびれているからってサクラさんが外してくれたようなんです。紐が切れてなくさないようにって」

ペンダントトップにチェーンを通すと、すぐ首にかけた。

「ありがとうございます。気を使っていたいて・・・」

「いえ、気にしないでください。いつも本を借りてるお礼ですから」アキが首元からペンダントを持ち上げると、窓から入る光を反射し、キラリと光る。

「これを付けていると、なんだか安心なんです。両親がそばにいるような気がして・・・」

しみりとした雰囲気は二人の間に漂った。

そこへ

「邪魔するぞ」

と綱手がやってきた。カカシが立ち上がり、椅子を勧めると

「なんだ、カカシも来ていたのか」

と言いながら腰掛けた。

「どうだ、調子は？」

「おかげさまで、ずいぶん良くなりました」

アキが答えると、綱手は大きなため息をついた。

「まったく……。死にかけたのは、これで何回目だ？」

「ええっと、あえて数えたくはないんですが。入院した回数を数えるのもイヤですし」

笑いながらアキがいうと、綱手は苦笑いを浮かべた。

「お前はいつもトラブルに巻き込まれるな」

「まあまあ、五代目。苦情を言いに来たんですか？」

カカシが言うのと、綱手は憤然とした表情になった。

「バカを言うな。それでも心配して言ってるんだ。……ところで、修司に行った施術だが、今後は……」

「ええ、わかってます。今後は控えます」

言いながら、アキはうつむいた。

「……回を重ねるごとに、頭痛がひどくなっていたのは分かっていたんですが……。まさかこんなことになるとは思っていなかったのです」

「……そうか。とりあえず、今回はなんとか無事で済んだんだ。

これからは、自分の体に気をつけろよ」

「はい。ありがとうございます」

綱手はポンと膝を叩くと、アキのほうへ身を乗り出した。

「そこでだ。この間渡した写真は見てくれたのか？」

「……。ええ、まあ……」

「どうだ、気になるヤツはいたか？」

「……気になるとか気にならないとか……。ええっと、あのときの私は施術のことで頭がいっぱいで、それどころでは……」

アキはしどろもどろに答える。

「そうか。ま、いいさ。入院中、考える時間はたくさんあるだろう？ 写真は家に置いてあるのか？ あとでシズネに取りにいかせるから、じっくり考えてくれ。じゃ、またな」

途方に暮れるアキを残し、綱手はさっさと病室を出ていった。

「五代目・・・ずいぶん力が入ってますね。どうするんですか、アキさん？」

「どうするって言われても・・・。この状態では逃げられませんしアキは深いため息をついた。

「どうしましょうね・・・」

「五代目の猛攻撃でお疲れのようですから、オレもそろそろ帰ります・・・そうだ、もし許可をもらえるなら、家に入って本を何冊か持ってきますよ」

カカシの申し出に、アキの表情が明るくなる。

「え？ いいんですか？ じゃあ、お願いします。本棚の左側に並んでいる新刊、分かりますよね。あれを何冊か持ってきてくださると助かります。カカシさんも気になる本があったら、持っていていいですよ」

「了解です。それじゃ、また」

カカシは病院を出ると、すぐアキの家へ向かった。

（まだ読んでないのが数冊あったからなー。どれにしようかなー）
本棚を物色していると、奥にしまいこまれた見合い写真が目に入っ
た。

（アキさんは見ちゃダメって言ってたけど、五代目はオレの前で見
合いの話をしてたしな。ちょっと見るくらいなら・・・）

写真を取り出すと、上から順番に見ていった。

（えー、エビスさん？ なんかアキさんと合わないような・・・。
並足さんはどうだろう？ 冗談とか言わなそうだし、あまり笑わな
いし。・・・イズモは年下だろー！ しかもイズモと結婚したら、

いつもコテツが入り浸って、どっちと結婚したのか分からなくなるぞ……。これは、暗部のトラだ。お面かぶったままの写真って・
・意味あるのか？)

意外と面白く、少しのつもりが全部を見てしまった。

(そういえば、アキさんと同じ年のオレとガイが入ってないぞ。紹介できない問題児ってことか？・・・いや、違うな。見合いつていうのは、知らない同士がするものだ)

そう考えながら、写真をもとの場所に戻す。

好奇心を満たしてすっきりしたカカシは、今度は小説の物色に取り掛かった。

見舞いを許可されてから1週間ほど過ぎた頃、アキはベッドから出ることを許された。

「あー、嬉しい！」

アキはベッドから降りると足を広げ、両手を上げて背筋を伸ばした。その瞬間、めまいに襲われる。

「もう、ずっと寝てたんですから、急にそんなことしちゃだめですよ」

叱りながらも腕を掴んで支えてくれたサクラに、アキは苦笑いを返した。

「まだ病室からは出ないくださいね。絶対ですよ」

「・・・はい」

サクラが病室を出ていくと、アキはベッドに腰掛けた。

「つまらないなー」

宙を眺めながら独り言をいう。

「・・・ですよね」

声の主を見て、アキが嬉しそうに微笑む。

「サイさん！ 久しぶりですね」

「こんにちは」

サイもニッコリしながら、カステラの箱を差し出した。

「元氣そうで良かった。この間来たときは、青白い顔で寝てたから」「そうなの？　ごめんなさい。鎮静剤の影響なのか、すぐ眠くなっちゃって。今はもう投与されてないから、大丈夫なんだけど」

話しながらサイドボードから皿を2枚取り出し、カステラを一切れずつ載せると、片方をサイに差し出した。

「一緒に食べましょうか」

「はい」

カステラを一口頬張ったあと、サイが切り出した。

「修司の件は片付いたようですし、これでアキさんもゆつくりできますね」

「ええ……。京子さんのことは、何か聞いてる？」

「まあ、少しおとなしくなったようです。そういえば、修司が面会に行ったそうですよ。彼女が静かになったのは、そのせいかな」

「そう……。修司さん、行ってくれたんだ……」

サイはしばしアキを見つめると、

「自分を傷つけた人に対して、そんなに気を使うことないの」といった。

「でも……。なんだか悪いことをしたなって、どうしてもそう思っちゃうの。……前の夫に対して、そんな気持ちを抱いたことはないのよ。たぶん、施術を失敗したことが原因だっていう後ろめたさがあるんでしょうね」

アキは悲しげな表情になった。

「身体が限界を迎える前に、修司さんの施術を終えることができてよかった」

サイは何も言わず、カステラを口に運んだ。

アキは気分を変えるように、両手を合わせて明るい口調で言う。

「そうそう。サイさんが好きなブレンド、テーブルの上に置いてあるの。もし良かったら、持って行ってね」

「え？　いいんですか？」

サイが驚いたような表情で顔を上げた。

「どうぞ、どうぞ。密封はしてあるけど、時間がたてばたつほど味も香りも劣化しちゃうから、飲んでもらったほうが嬉しいの」

「そうですか。じゃ、さっそく取りに行こうかな。実は先日いただいたハーブティが切れてしまって、欲しいなって思ってたところだったんです。・・・ついでに何か持ってきてもらいたいものはありますか？」

アキはしばし考えたあと、ニッコリ笑った。

「せっかくだから、奥の保管室から適当にドライハーブを見繕ってきてもらえますか？ 自分用のハーブティをブレンドしたいので」

「了解です」

カステラを食べ終わると、サイは早速アキの家へ行き、ハーブを持ってきてくれた。

そしてカバンからビンを取り出し、

「これはいただいていいんですよね？」

と確認する。

「どうぞ。退院したらまた作るので、なくなったら遠慮なく言ってくださいね」

「はい」

サイは嬉しそうにビンをカバンに入れ直すと、帰っていった。

その後アキはサイが持ってきてくれたハーブを確認し、血流の調整と体力強化のブレンドを調合した。

ビンに詰めている途中、再びアキの様子を見に来たサクラが顔を覗かせる。

「何してるんですか？」

と、サイドテーブルの上のハーブを手を取った。

「サイさんにハーブを持ってきてもらったんです。で、自分用のブレンドを作りました」

説明しながらアキは、カステラの箱に目を留めた。

「そうだ。サイさんがカステラを持ってきてくれたんですよ。サクラさんもどうぞ。ハーブティと一緒にいただきますしよ」

「わーい。じゃ、遠慮なく・・・」

「今度の退院祝いはどうしましょう？」

カステラを口に運びながら、サクラが聞いた。

「退院祝いは気にしないでください。この間やったばかりだし・・・」

「アキが苦笑いを浮かべると、サクラはフォークを横に振った。

「いえいえ、退院祝いはただの口実。単にみんなで集まって騒ぎただけですから」

アキは小さく笑うと、

「そういうことなら・・・」
と頷いた。

「そうそう。カカシ先生、換えのチェーンを買ってきたんですね」
サクラがアキの首元を見て言う。

「ええ。カカシさんは、すごく親切な方ですね」

「そのペンダントも、カカシ先生が買ったんですね」

サクラはニヤニヤしている。

「え・・・ええ。両親の形見の代わりにつて。ほかのものは全部燃えてしまったし、両親がお揃いで付けているものを外すのは忍びなかったからって、同じものを見つけてくれて・・・」

ニヤニヤ笑いを引つ込め、サクラはしんみりとした表情を浮かべた。

「あのときからアキさん、大変なことばかりで・・・」

アキは首を振り、

「でも皆さんに助けていただいたから、生き伸びることができました」

とニツコリしながら答えた。

「しかも、こうして仲良くしていただいているし。おかげで楽しく過ごしています・・・まあ、入院生活は退屈ですが・・・」

サクラは苦笑した。

「仕方ないですよ。最低でも病院内を歩き回れる程度まで回復しないと、退院はできませんから。早く退院したいなら、退屈でもゆっくり休んでいてくださいね」

「はい、わかっております」

アキが敬礼すると、二人は声を上げて笑った。

そこへ

「なんだ、サクラもいたの。楽しそうだね」

と言いながら、カカシがやってきた。

「なんだ、サクラも・・・って・・・。お邪魔なら出ていきますよお？」

サクラはまたニヤニヤしながら、カカシの顔を覗き込む。

「別に邪魔だなんて言っていないよ。サクラ、変な勘ぐりは止めてくれない？」

サクラの視線から逃れるようにのけぞりながら、カカシが答えた。

「いいんですよ。カステラも食べ終わったし、じゃ、私はこの辺で・・・。夕方、また様子を見に来ますね」

サクラはアキに告げると、ニヤニヤ笑いを浮かべたまま病室から出ていった。

「・・・サクラさん、どうしたんでしょうね」

アキが怪訝な表情を浮かべると、カカシは苦笑した。

「ペンダントをお土産に買ってきたといって以来、ずっとあんな感じで・・・。なにを勘違いしてるんだか」

「はぁ・・・。そうなんですか。だからさつき、チェーソンのことを聞いてきたのか・・・。そういうのが気になる年頃なんでしょうね」

「ま、そんなところでしょ」

カカシは椅子に腰を下ろすと、本を2冊取り出した。

「これで新刊は全部読みました。やっぱり、アキさん一押しの本が一番面白かったです」

「そうですか。退院したらまた本屋で物色するので、楽しみにしててくださいね」

アキは受け取った本をしまおうと、サイドボードの引き出しを開けた。その引き出しに見合い写真が入っているのに気づき、カカシが聞く。

「あ、シズネさんが持ってきてくれたんですか？」

「ええ、綱手様が見舞いに来てくれたその日のうちに……。シズネさんによると、ご本人たちにはまだ連絡していないようなんです。私が見合い相手を選んだら知らせるとかで」

引き出しを閉じながら、アキは答えた。

「で、選んだんですか？」

「いいえ。選ぶようがないですよ。写真と基本的な情報だけじゃ、どういう人かなんてわからないですし。かといって、全員とお見合いでするなんて、考えられませんしね」

アキは小さくため息をつき、言葉を続けた。

「しかも私、クモ膜下出血で倒れたばかりですし。クモ膜下出血って、再発の可能性があるんですよ。発病して10年以内の生存率って、けっこう低かったと思いますよ。そんな爆弾を抱えてるような私と、喜んで結婚する人なんているのかしら」

カカシは目を見開いた。

「10年以内って……。大丈夫なんですか？」

「まあ、治療を担当してくださった方によると、無茶なことをしなければ大丈夫ってことですが。私も二度とこんな思いをするのはいやですから、再発防止に努めるつもりです。でも、万が一ってこともありますし……」

「なるほど……。だからよけいに、綱手様は結婚させたがるのかもしれないですね。無茶をしないよう、誰かが守っているようにと」カカシは納得したように頷いた。

「守られる必要なんてありません。今回のことで自分の体のことはよくよく分かりましたし、施術に関しても今後は無理はしないつもりです。守られるために結婚するなんて、相手の方にも申し訳ないですよ。それに、私……」

「なんですか？」

「この年齢になって言うのは恥ずかしいんですが、これまで一度も恋愛らしいものをしたことがないんです。だから、今度結婚するならやっぱり恋愛から始めたいなあって思ったり」

「そういうながら、アキは照れ笑いを浮かべた。

「まあ、白馬に乗った王子様が現れるとは思ってませんけど。・・・お見合いの話はこのくらいにして、どうですか、最近？ 何か変わったことはありませんか？」

顔を赤らめながら無理やり話題を変えようとするアキの気持ちを尊重し、カカシは里の様子を話し出した。

「あー、この空気！ 気持ちいいなあ」

退院したアキはハーブ畑に着くと、思い切り深呼吸した。

「どう、立派に育ってるでしょ？」

ヒビキとヤオイ、ゲンタが得意げに鼻をふくらませている。

「ええ、すごい元気に育ってるわね。本当にありがとう。助かったわ」

「じゃ、荷物を家に入れるよ」

ヒビキは玄関を開け、病院から持ってきた荷物を寝室まで運んだ。

「退院するたびに思うけど、我が家ってやっぱり落ち着くわねー」

アキは嬉しそうに家を見回した。

「前回退院したときは、家の中がほこりっぽかったんだけど・・・。なんだか今回はキレイになってる」

「畑仕事のついでに、時々オレたちが掃除しといたんだ。帰ったとたん、掃除はしたくないだろう？」

ヒビキの言葉に、アキの心は感謝の気持ちでいっぱいになった。

「みんな、ありがとう！ 何かお礼をしないとね」

「お礼なんていいですよー。アキさんが元気に帰ってきてくれただけで」

ヤオイは後ろ手を組み、上目使いで照れくさそうに言った。

「・・・ヤオイちゃん・・・。もう・・・みんな、良い人ばかりね」
アキがなみだ目になると、

「そんなに褒めないでください。図に乗りますから」
と言いながら、ヤマトもやってきた。

「ヤマトさん・・・。良い部下に恵まれていますね」

アキは涙をぬぐいながら言葉を続けた。

「ヤマトさんにもお世話になったし・・・。もう少し落ち着いたら、
スペシャルフットマッサージを楽しみにしててください」

「ダメだよー。アキさんは病み上がりなんだから、人の世話より、
自分のことを心配してよ」

ヒビキが言うと、ヤマトは苦笑した。

「スペシャルフットマッサージにはすぐそそられますが・・・。
ヒビキの言う通りです。僕たちのことより、自分の体のことを考え
てくださいね」

「体のほうは、ほぼ大丈夫なんですけどね。ずっと入院してたので、
動きたくてうずうずしてるし。でも、お礼をするつもりがかえって
気を使わせてしまいそうだから、もうしばらくはゆっくり過ごすこ
とにします」

「そうして。畑のほうだって、任務と修行がないときは手伝ってあ
げるからさ」

ゲンタが言う。

「ありがとう」

アキは胸がいっぱいになり、また涙を浮かべた。

「ところで修司の件、聞いてますか？」

テーブルを囲んでお茶をすすりながら、ヤマトが切り出した。

「・・・いえ。何かあったんですか？」

アキの胸に不安がよぎる。

「靴屋をたたんで、別の場所へ引っ越すようです。先日京子に面会
し、そのことを報告したそうで・・・。彼女、泣き崩れたそうです

よ」

「別の場所に？　どうして・・・」

アキは驚いて目を大きく見開いた。

「やっぱりやりづらいんじゃないか？　自分はストーカーみたいなことしてたし、従業員は人を刺して投獄されたし。引きこもってた時期は店を開いてなかったから、客足も遠のいたみたいだしな」

ゲンタが言うと、アキの表情は暗く沈んだ。

「・・・そんな・・・。私が施術を一度で成功させていれば、こんなことには・・・」

するとヒビキが声を張り上げた。

「だから、今日はその話はしないほうがいいって言ったんですよ。

アキさん、落ち込んだじゃったじゃないか」

「でも、いずれは耳に入る話だし。引越したあとに知ったほうが、シヨックも大きいだろう？　・・・彼は3日後に里を出るそうです」

「そんなに早く？」

アキは呆然としたが、すぐ

「ちよつと行ってくる」

と立ち上がった。

「放っておけば？　引き止めないほうがいいよ」

ヒビキがアキの腕を引っ張る。

「でも・・・。やっぱりお話ししないと」

ヤマトは首を振る。

「よく考えて出した結論のようですよ。この間の施術で完全に自分を取り戻した彼は、再出発するつもりなんだと思います。だから、引き止めても無駄でしょうね」

アキはぐったりした様子で椅子に腰を下ろした。

「そうですか・・・」

「とりあえず、久しぶりの外出で疲れたでしょう？　僕たちはこれから任務があるので、そろそろ失礼します。どうぞお大事に」

ヤマトが立ち上がると、ヒビキたちも渋々立ち上がる。

「アキさん、無理するなよ！」
立ち去り際に、ヒビキは心配そうなまなざしでそう言い残した。

サクラは、ナルトとサイを呼び出した。

「でね、アキさんの退院祝いの件なんだけどー」

何かをたくらんでいるかのような怪しい笑顔に、ナルトとサイは不安な表情を浮かべた。

「なんだよ、なんか怖いよ、サクラちゃんてば・・・」

「女性がこういう笑顔を浮かべているときは、ろくなことはない和本に書いてありました」

二人がコソコソ話すのを見て、サクラはムツとした。

「うるさいわね！ ろくなことがないって何よ？ ……ところで、アキさんに見合い話が持ち上がったって知ってた？」

サクラはナルトの頭を軽く小突いたあと、再びニヤニヤし始める。

「えー？ 知らない。見合いって、誰と？」

「それは私も知らないんだけど。でもね、お見合いしなくても、相手は近くにいるじゃない？」

サクラはクックツツと笑い始めた。

「誰？」

ナルトとサイは声を合わせて尋ねた。

「そーれーはー。あんたたちも良く知ってる人！」

「だから、誰？ もったいつけないで、早く教えてくれてばよ」ナルトが悶えると、サクラは呆れたようにため息をついた。

「ほんと、あんたって鈍いわね。カカシ先生に決まってるじゃない。ちょうど年齢も一緒だし」

少し考えたあと、サイがいう。

「確かに仲は良いようですが・・・。僕たちと同じレベルじゃないかな。特別意識しあっているようには見えないけど」

サクラは人差し指を立て、チッチツと舌を鳴らした。

「でも、アキさんにお土産買ってあげてたんだから。亡くなったご

両親と同じものを偶然見かけたからって言ってたけど、きっと探したのよ。この間なんて、皮ひもが切れそうだからって、わざわざチエーンを買ってあげてたんだから」

「でもさ、アキさんもアイピロウを作ってあげたり、マッサージとかしてあげてたんだろ？ そのお礼じゃねーの？」

「そうだね。僕もアキさんにハーブティをもらったお礼に、お土産持っていたりしてるし。別に普通じゃない？」

二人の反応が良くなかったので、サクラはイライラとした口調で言う。

「女の勘よ。私、ビビビツときたのよね。この二人、いけるって」「ビビビ？」

ナルトが納得できない様子で言う。

「あの二人はお互い大人なんだし、僕たちが口を出すような問題じゃないと思うんだけど・・・」

サイも興味なさげな様子だ。

「でも、アキさんもカカシ先生も、恋愛に疎い感じじゃない？ やっぱり、誰かの後押しが必要だと思うのよね」

サクラは拳を握り、力強く言った。

「後押しって・・・何するんだってばよ？」

サクラはニヤリと笑い、

「私にいい考えがあるの。二人とも、耳を貸して」

気が乗らない二人の耳たぶをひっぱり、サクラは作戦の内容を話した。

（みんな、遅いなあ・・・。時間、間違えたのかしら）

退院した翌日の昼、アキは退院祝いに指定された料理屋の席に、一人寂しく座っていた。

12時に集まるといっていたが、すでに10分過ぎている。しかし、誰も来ない。

（なんだろう。急な任務でも入ったのかな）

入り口の戸が開く音が聞こえたので誰か来たのかと振り返ったところ、まったく関係のない人だった。

（もう少し待って誰も来なかったら、定食でも食べて帰ろうっと）空腹をまぎらわそうと、お茶をすすする。

一方、店から少し離れた草むらから、サクラたちはアキの様子を覗いていた。

「なあ、サクラちゃん。アキさん、かわいそうだってばよ。なんか、寂しそうだぞ?」

「カカシ先生には少し早めの時間を伝えておいたんだけど・・・。やっぱり遅刻かなあ?」

サクラも不安そうな表情になっている。

「そもそも、こんな方法でくつつくとは思えないけどな。不自然だよ」

サイが言うと、サクラはムツとした顔で答えた。

「じゃ、ほかにどんな作戦があるっていうのよ? 本の貸し借りはしてるけど、二人きりで食事したことはないはず。この機会に・・・」

「

「だから、放っておけばいいんじゃない? こういうのは、周囲が干渉するとかえってうまくいかないって本には書いて・・・痛!」サクラに小突かれ、サイは頭を抱えた。

「恋愛はねー、教科書通りにはいかないの! 昨日も言ったでしょ。せっかくなの霧囲気なのに、アキさんもカカシ先生も鈍感そうだから、ほっといたらいつまでもあのままよ」

そのとき、ナルトがサクラの肘を引っ張った。

「来たってばよ! 15分の遅刻かぁ・・・。カカシ先生にしちゃ、早い方じゃねーの?」

「11時半集合って言ったから・・・まあ、上出来よね。ああ、11時って言うっておけばよかった。そしたら調度よかったんじゃない?」

「・・・でも、いつもはもっと遅刻するんだよね? そんなギリギ

リの時間指定でよかったのかな」

サイが疑わしげな視線を送ると、サクラは得意げに胸を張った。

「ふふっ。気づいていなかったようね。カカシ先生、アキさんが関わっている場合はいつも、約束の1時間以内に来るのよ」

「へえー。すごいな、サクラちゃん。そんな細かいことに気づくなんて」

「まあね。優れた観察力、情報収集力、分析力の賜物よ。あんたたちも、もっと努力しなさいよ」

サイはげんりした表情で思った。

（単に、人の恋愛に首を突っ込みただけじゃないか。将来は絶対、仲人を買って出るタイプになるな）

「あれ？ アキさんだけですか？」

カカシはアキの向かい側に座りながら問いかけた。

「ええ……。誰も来ないので、時間を間違えたのかと思っていたところですよ。……みんな何か用事ができて来れないのかもしれないかもしれませんね。昼時でかなり混んできましたし、このまま待っていてもお店の方に申し訳ないので、何か頼みましょうか？」

「そうですね」

カカシは眉を寄せ、しぶい表情を浮かべた。

（サクラか？ きっとそうだ。こんなことを考え付くなんて、あいつ以外にない。それにしても……。）

メニューを睨んでいるアキの顔を見る。

（一人で20分近く待っていたんだ……。もっと早く来ればよかったかな）

「……カカシ先生、アキさんをジッと見てる！ いい雰囲気じゃない？」

窓から見える二人の様子に、サクラが嬉々とした表情を浮かべる。

「あれは、ずっと一人で待たされたアキさんに対する同情の視線だと思うけど」

サイの冷静な指摘に、サクラは憤然とした。

「なによ、もう！ いちいちうるさいわね！ 恋愛感情に関しては、私のほうが詳しいんだから」

すると突然、

「何やってんの？」

と背後から声がした。

「あ、カカシ先生。やっぱり気づいてましたか」

サイは振り返ると、小首を傾げて尋ねる。一方、サクラとナルトはその場で石になった。

「やっぱりお前たちの仕業か。アキさん、20分も一人で待ってたんだぞ？」

カカシが言うと、早くも自分を取り戻したサクラは憤然とした様子で指を刺す。

「先生がもっと早く来ればよかったんですよ！」

「・・・そんなことを言ってもなあ・・・。こんな子供だましの作戦、誰が考えたんだ？ ま、予想はつくけどな」

カカシはチラリとサクラを見た。

「僕は止めたんですよ。でも、サクラがどうしてもって・・・痛！」
サイはサクラに殴られた頬をさすった。

「まったく・・・。五代目には見合いを勧められ、サクラはよけいな世話を焼く。アキさんも大変だなあ」

カカシはげんなりした表情でつぶやいた。

「アキさんは喜ぶだろうから、お前たちも来れば？ と言いたところだが・・・。あいにく店はもう一杯で席は空いていない。こんなところでコソコソしてないで、帰れば？」

そう言うと、カカシの姿はポンと消えた。

「影分身かー」

ナルトが店を覗くと、こちらを見ていたカカシと視線が合う。慌てて隠れると、

「バレちゃってるんだから、今さら隠れたって仕方がないでしょ。」

とりあえず、ここを離れましょう」

とサクラが歩き出す。

「じゃ、ラーメン食いに行こうってばよ。腹が空いたよー！」

3人はぶらぶらと一樂へ向かった。

「まったく、バカなことを」

去っていくナルトたちの姿を見て、カカシがつぶやく。

「え？ どうしたんですか？」

天井のえびを口に運ぼうとしていたアキが、手を止めて尋ねる。

「いえ。何でもありません」

カカシは小さくため息をつく、秋刀魚の塩焼きに箸を伸ばした。

「あー、おいしかった。・・・結局、誰も来ませんでしたね」

店を出ると、アキはいった。

「ま、何かヤボ用でもあったんでしょ」

カカシは、サクラたちのたくらみについては伏せておくことにした。

「私はこれから本屋に行きますけど、カカシさんはどうしますか？」

アキが言う、カカシは（彼女が一緒なら、正々堂々とロマンスコーナーを物色できる）と思いついた。

「ご一緒します。いつも借りてばかりいるのは何なんで、面白そうなのがあったら今回はお金を出しますよ」

といった。

「本当に？ じゃ、行きましょか。そういえば、新刊紹介で見た本がそろそろ出てるはずなんですよね。この間お勧めした本の続刊ですよ。噂によると、前作を凌ぐすごさだとか」

アキの言葉に、カカシの表情が輝いた。

「オレもあの続きを早く読みたいと思ってたんですよ」

「今度はヒロインが囚われの身のようにですよ。再会したら、今度はどうなっちゃうんでしょうね」

二人は新刊の内容について楽しげに語り合いながら、本屋へと向かった。

「アキさん、やっぱり行かないほうがいいよ」

修司が里を出る当日、ヒビキは見送りに行くと言い出したアキを引きとめようとしている。

「そうだよ。せっかく落ち着いたんだし、会ったってお互いイヤな気持ちになるだけだろう?」

ゲンタも加勢した。

「でも、最後の挨拶くらいはしたいの。このまま会わなくなるっていうのも、なんだかね……。修司さんは私よりずっと長く……。生まれたときから木の葉隠れに住んでいたのに、私のせいで里を出ていくことを決めたんだし」

「だから、アキさんが責任を感じる必要はないんじゃないかなあ。

奥さんが亡くなったことが修司を追いつめたわけだし。京子はもともと横恋慕していて、アキさんを逆恨みしただけなんだし」

さきほど摘んだラベンダーの花の香りを確かめながら、ヤオイがいう。

「アキさんなりのケジメじゃないかな。ですよね、アキさん?」

ヤマトはアキを引きとめようとしなかった。

「そうですね。そんな感じです……。心配しないで。大丈夫だから」

アキはヒビキたちに微笑みかけた。

「ただ挨拶するだけよ。もう何も起きないから。あなたたちもこれから任務があるんでしょ? 私のことはいいから、しっかりがんばってね。そうそう、ヒビキくん、今夜来れるかしら? 久しぶりに、一緒に夕ご飯を食べましょう」

とたんにヒビキの表情が明るくなる。

「うん! 食材で何か必要なものはある? 買ってくるからさ」

「じゃ、お願いしちゃうかな」

アキはヒビキにメモを渡した。

1時間後、アキが門の手前に立っていると、大きな荷物を持った修司がこちらに向かってくるのが見えた。

視線が合うと、修司はその場に立ち止まり、小さく会釈する。アキも会釈を返し、近づいていった。

「お久しぶりです。・・・引越しされると伺ったので・・・」

アキが言うと、修司は小さく微笑んだ。

「ええ。新しい場所で、生まれ変わった気持ちで1から始めることにしました」

「私が関わったせいで、生まれ育った場所を離れることになってしまった・・・。本当に申し訳ありません」

アキが謝ると、修司は首を振った。

「いえ、アキさんに施術してもらえなかったら、今も家に引きこもっていたでしょう。どちらにしても、店はたたむことになったと思います。私こそ、いろいろとご迷惑を掛けてしまって・・・。くも膜下出血の影響で、もうあの施術はできないと聞き、心配していました。最後に元気なアキさんの姿を見ることができて、良かった。

安心しました」

修司は厳しい表情を浮かべた。

「京子とも、直接話しました。私の気持ちは理解してもらえなかったようですが・・・。でも、いつかはわかってくれると信じていますね。彼女があんなに思いつめたのは、妻が生きているときにはつきり言わなかった私にも責任があります。だから、彼女にも早く立ち直ってもらいたい」

アキは悲しげにうつむくと、小声でつぶやくように言う。

「・・・そうですね。京子さんが落ち着くまではもう少し時間がかかると思いますが・・・私なりに、なにか協力したいと思います。もちろん、私に会えば彼女の気持ちたちが乱れるのはわかっているので、気づかれないように気をつけますけど」

修司は荷物を抱えなおし、笑顔を見せた。

「アキさんは、人のことばかり気にしすぎですよ。もっと自分のことを考えてください。まあ、それがあなたの良いところでもあるんですが・・・」

アキは顔を上げ、笑顔を返した。

「私、修司さんの施術を通して、多くのことを知ることができました。自分に足りないものや、体のことなど・・・」

修司は頷くと、片手を差し出した。

「じゃ、私はそろそろ行きます。アキさん、今までありがとうございました。どうかお元気で」

アキも片手を差し出し、握手する。

「私こそ、ありがとうございました。修司さんも、お元気で」

修司は最後に握手する手に力を込め、寂しそうな表情を浮かべたが、すぐにそつと手を離して歩き始めた。

門をくぐるとき、もう一度振り返ると、

「さようなら」

と手を振る。

アキが手を振り返すと笑顔を見せたが、再び背を向けたあとは、二度と振り返らなかった。

どんどん離れていく修司の背中をジッと見つめるアキの目には、うつすら涙が浮かんでいた。

完全に修司の姿が見えなくなると、アキは門に背を向け、ため息をつく。

「ため息ばかりついていると、幸せが逃げていくぞ」

いつの間に来ていたのか、綱手が目の前に立っていた。その後ろで、シズネが同情のまなざしでこちらを見ている。

「これで、この件は落ち着いたな。今回のことで、修司も少しは強くなっただろう。お前は気にするな」

「・・・ええ、わかってます」

アキが笑顔を見せると、綱手は腕を組んでにらみつけた。

「無理に笑顔を作らなくていい。お前はもっと強気でいかないと、またトラブルに巻き込まれるぞ。・・・さて、心配の種は消えたわけだし、そろそろ仮死の薬の再開発に取り掛かるか」

綱手の呼び出しを受け、会議室にアキ、シズネ、サクラ、シカク、シカマルが集まった。

「先日アキが刺されて使用した際は、蘇生まで非常に時間がかかり、危険だった。そこで、配合率を見直そうという話になったんだが・・・。アキ、意見はあるか？」

アキは頷くと、資料を見ながら話し出した。

「綱手様から書類を受け取ったあと、詳細まで見直してみました・・・。蘇生までに余計な時間がかかった要因は見当たらないと思います。現在のところ、実際に利用したのは私だけですが、私の症例は参考にならないと思うんですね。全身の血流が止まるのですから、一度だけでもなんらかの影響は残るでしょう。私の場合、2度目の投与のあとのことですからね。それに加え、施術による脳への負担が少しずつ蓄積していたことも関連していると思います。体が死を受け入れようとしたのかもしれない。・・・あと、私自身の意思によるものも大きいと思います」

アキは言葉を切り、深呼吸してから話を続けた。

「これはここだけの話にしていたのですが・・・。正直、あのとときの私は疲れきっていました。自分の技術不足と精神力の弱さを痛感しましたし、思いがけない人からあそこまで憎まれたことも少なからずショックでした・・・。それで、このまま両親と祖父のもとへ行きたいと強く思ったんです」

驚いたサクラが口を開きかけたが、シズネが首を振って止めた。

「・・・でも、修司さんの施術を終えるのが私の義務だと、そしてヒビキくんを一人にしてはいけなさと。その意思が芽生えたとき、蘇生したのだと思います。・・・通常なら、この薬を複数回服用す

ることはないでしょうし、改良を加えたものなら、私のように時間がかかることはないはずです。ただ、蘇生までの時間をさらに短縮できるのなら、体に与える影響もより小さくなるでしょう。この薬は『絶対に安心』と言い切れるものではありませんから、さらに開発を続けることに關して異存はありません」

アキが話を終えると、ジッと資料を見つめていたシカクが口を開いた。

「前回の改良は、副作用の減少に重点を置いていた。当時の資料を見直してみましたが、やはり時間の短縮はもう少し検討したほうが良いと思います。単に仮死にいたる原料の配合を少なくする程度で済む話でもないようだから」

アキは頷く。

「ええ。全体のバランスを細かく調整しなければ、仮死に至らないばかりか、下手をすると植物状態にもなりかねない危険性があります」

「ってことは、また1からやり直してことだな」

シカマルは眉間に皺を寄せ、配合率の計算を始めていた。

「前回は私が知識として継承した配合率を再考し、修正した情報を皆さんに提供しました。でも今回は・・・もともとの配合をお渡しします。おそらく、そのほうが開発しやすいかと思うので」

「いいんですか？ 草野家の血族のみで代々引き継がれてきた秘密だと言っていたのに・・・」

驚いたシズネが尋ねると、アキはニツコリと笑った。

「いいんですよ。改良が必要な知識なら、大事に取っていても仕方ありません。どうせ継承するなら、安全性の高いものの方がいいですね。それに、もともとこの里に住んでいた先祖が、おそらく里のために開発した薬だと思いますし・・・ここで知識を公開し、協力しあって開発したほうが、完成に至る時間も短く済みます。また、奈良家の知識も借りれば幅広い視野で研究を行うことが可能になり、画期的なものができるかもしれません。前回の開発が無駄になるよ

うで、申し訳ないと思いますが・・・」

「いえ、ぜんぜん！ 申し訳ないなんて思う必要ないですよ。逆に、ずっと隠してきた知識を公開してもらえるなんて、すごく嬉しいですよ。また一緒に頑張りましたよね、アキさん」

シズネはアキに微笑みかけたあと、綱手に向き直った。

「ここにいるメンバーで、薬の再開発チームを組みましょう。今後、定期的にミーティングを開く必要がありますね。早速それぞれのスケジュールを合わせて、段取りを組むとしましょうか」

一同が頷くのを見届けると、綱手は椅子から立ち上がった。

「よし。スケジュールはそれぞれシズネに伝えろ。調整後、追って連絡する。次のミーティングまでにアキは配合表を作り、みんなに渡してくれ。あと、配合表の中身については緘口令を敷く。ではみんな、よろしく頼むぞ」

会議が終了し、帰ろうとしたアキにサクラが声をかけた。

「先日は退院祝いに行けなくてすみません・・・。カカシ先生が行ったようで、安心しました」

「いいのよ。みんな、忙しかったんでしょ？」

アキの言葉に胸が痛んだが、サクラはさりげなく二人の進展具合をさぐることにした。

「・・・で、食事のあとはどうしたんですか？」

「ええーっと・・・。本屋に行きました。楽しみにしていた新刊が出ていたの。嬉しかったなあ」

アキは無邪気にニコニコしている。

「それだけ・・・？ 一緒にお茶したとか、映画に行くとかは・・・？」

「え？ 本を買って帰りましたよ」

きよんとするアキの表情を見て、サクラは小さくため息をついた。
(私の見込み違いだったのかなあ・・・。なんか、自信がなくなってきた)

アキは家に帰ると、早速配合表の作成に取り掛かった。

そろそろサロンを再開しようと思っていたが、もう少し先延ばしして、午前中は畑の手入れ、午後は薬の再開発に当てるとしよう。

配合表にそれぞれの原料の特徴なども書き加え、一段落したのは夕暮れ時だった。窓から外を眺めると、景色が茜色に染まっている。その向こうに、ヒビキの小さな姿が現れた。手には買い物袋を携えている。

アキが退院してから、ヒビキは毎晩夕食を共にしていた。窓から手を振ると、ヒビキは笑顔で駆け寄ってくる。

「今日も一緒に食べようと思って。これ、特売で手に入れたとうもろこしとかぼちゃ。あと、鮭も安かったんだ」

家に入りながら説明し、袋をテーブルの上に置く。

「ありがとう！　じゃ、今夜は鮭のホイル包み焼きにしましょう」

「うまそー！　楽しみだなあ。じゃ、オレはこっちで忍具の手入れをしてるからさ」

そう言うと、ヒビキはテーブルに忍具を広げ、1つひとつ確かめている。

「おなか空いてる？　急いで作るね」

アキは買い物袋の中身を取り出し、食事の支度に取り掛かった。

二人が食卓を囲んでいると、

「おいしそうな香りがしますね」

と言いながら、サイが玄関から入ってきた。

「あ、サイ先輩・・・」

ヒビキはサイが苦手のようで、困惑した表情になる。

「やあ、ヒビキ。最近、よく来ているようだね。修行は進んでいる？」

サイは気にせず、笑顔で尋ねた。

「はい。今日もチャクラコントロールの修行を・・・」

「そう。まだそこなんだ？」

笑顔のままサイがいうと、ヒビキはうつむいた。

アキは慌てて立ち上がり、ヒビキの肩に手を置く。

「サイさんったら・・・。ヒビキくん、サイさんに悪気はないのよ。ただの世間話のつもりなんだから」

とフォローする。

「わかってるよ」

ヒビキは苦笑しながら顔を上げた。

「あ、ごめん。傷つけちゃったかな」

アキの対応で、サイは自分の失言に気づいた。

「そうね。もう少し柔らかい言い方のほうが・・・。ヒビキくん、頑張っているもの。毎日傷だらけになって・・・」

サイは笑う。

「僕は幼い頃から暗部の養成所にいましたからね。かなり厳しい修行でした。感情は任務の邪魔になるからと、何も感じない訓練もして・・・。おかげでついこの間までは、感情とは何かもわからなかった。だから、この子たちがなんだかのんびりして見えるんですよ」
少し変わった子だとは思っていたが、そんな過去があるとは知らなかった。アキは驚き、呆然とする。

「・・・そんな・・・。そうだったの・・・」

するとサイはプツと噴出し、

「そんなに悲しそうな顔をしなくてもいいんですよ。ナルトたちのおかげで、少しずつ感情を取り戻していますから。それに今は、なんだか毎日が楽しいんです」

といったあと、何かを思いついたように紙を取り出した。

「アキさんにはいつもハーブティをご馳走になってるし・・・。お礼代わりに、絵を描きますよ。ヒビキも一緒に」

「え？　今？」

「ええ。二人で食事をしている風景、なんだか親子みたいで絵になります。そのまま食べてみてください」

アキとヒビキは食事が続けようとしたが、サイに見つめられているので、なんだか緊張してしまう。

「・・・もつとりラックスして。さっきのように、楽しそうに食べてください」

サイに言われたが、どうしてもぎこちなくなる。

「・・・サイさん。そうジツと見つめられると、なんだか落ち着かないんだけど・・・」

アキがいうと、サイはニツコリして筆をおいた。

「仕方ないですね。下書きはしたので、あとは家に帰って仕上げをすることにします」

アキは嬉々として身を乗り出し、絵を見ようとした。

「下書きを見せてもらえる？」

サイは首を振り、筒の中に紙をしまう。

「完成まで待ってください」

食事が終わり、アキとヒビキが食器を片付けていると、サイはハーブティをすすりながらいった。

「そういえば、サクラがあなたとカカシさんをくっつけようとしたこと、知ってますか？」

「え？」

アキは驚いて振り返る。

「やっぱり聞いてないんだ。・・・先日、アキさんの退院祝いに誰も来なかったでしょう？ あれ、カカシさんと二人きりにしようとサクラがたくらんだことなんです。実はあの日、ナルトたちと一緒に外から様子を見ていたんですよ。カカシさんはすぐ気づきましたが、アキさんには言わなかったんですね」

哑然としたまま何も言わないアキを見て、サイは笑った。

「そんなに驚かなくても・・・。サクラは、二人の様子を見てビビッとしたって言ってました。僕は違うんじゃないかと言ったんで

すけど」

「・・・ビビビ？」

「女の勘がどうのって言ってました。・・・五代目からは、見合い話も出てるんですよ？」

サイの言葉に、ヒビキが反応した。

「えー？ お見合い？」

アキは苦笑して頷いた。

「そうなの。断ろうかどうか、まだすごく迷ってるんだけどね」

「だったら、オレはヤマト先生がいいと思うなー。3人で食事するの、すごく楽しかったし。任務のときは怖いけど、食事してるときの先生は面白いもん」

「それは君の気持ちだろう？ アキさんの視点で考えないと」

サイが言うのと、ヒビキはうつむいた。

「そうですね・・・」

アキが困った顔をしているのに気づき、サイはニツコリする。

「アキさんは、どうなんですか？ 気になる人とかいないんですか？」

「気になるって言われても・・・。よく分からない。でも、里の人はみんな好きよ」

サイは小さくため息をついた。

「僕もそうですよ。でも・・・周りがおせっかいを焼きたがるの、なんだか分かる気がしてきた・・・」

アキはここ数日間、畑の手入れと薬の件で慌しく過ごしていた。

今日もハーブの世話を終えると、すぐ薬の資料を開いて考察に取り掛かる。

（今回は最初から奈良家の知識を借りるわけだから・・・。わからないことが多いなあ。ジャンルが違うもんね）

先日シカマルから受け取った原料の資料を読みながら、アキは頭を

抱えた。

そのとき、玄関をノックする音が聞こえた。

顔を上げると、ドアが開いてシカマルの姿が現れる。

「シカマルさん！　ちようど良かった。資料で分らないところがあった・・・」

シカマルは中に入ると、アキが見ていた資料を覗き込んだ。

「これ、先日お渡ししたものです。で、どこがわからないんですか？」

「この鹿の角なんですけど・・・。この植物原料とどう作用するか、まったく予想がつかなくて」

「ああ、これは・・・」

シカマルの説明を聞きながら、アキは資料にメモを書き込んでいく。
「・・・なるほど。そういうことですね。私、植物の知識しか持っていないから・・・。動物性のものはからっきし」

「まあ、うちは代々薬の研究を行っていますから。アキさんのところは、違うんですね？」

「ええ。身体的なものより、心理的な作用を目的としていますから・・・。そういえばシカマルさん、うちにいらっしゃるのは初めてですよ？　サロンで利用しているものをご覧になりますか？」

シカマルが頷くと、アキはサロン用の部屋へ案内し、オイルやドライハーブを用意した。

「基本的なものは、こちらになります。もちろん薬のような効能も望めますが、即効性の点では・・・。どちらかというと、予防策として利用することが多いですよ」

シカマルは差し出されたオイルの香りを確かめた。

「なるほど」

アキは器材なども紹介したあと、

「男性は苦手な人も多いんですけど・・・。ハーブティは風邪の予防や美肌に効果があったりするの。試してみる？」
と尋ねた。

「ぜひ」

シカマルが頷くと、アキは冷蔵庫からボトルを取り出し、コップに注いだ。

「これはカモミールとローズヒップ、レモンピールをブレンドしたものです。安眠効果もあるので、寝る前に飲むといいかも。いかが？」

「・・・けっこう好きかも」

シカマルはコップを持ち上げ、色を確かめた。

「なんか、レモネードみたいだな・・・」

「レモンピールを多めにしてますからね。あと、蜂蜜も入ってます。うちによく来てくれるヒビくん、ハーブティは苦手なんですが、これなら飲めるって言うので、いつも用意してるんです」

アキは冷蔵庫にボトルをしまうと奥の部屋へ行き、ビンを持ってきました。

「気に入っていただけたようなので、同じブレンドを差し上げますね。ご家族の皆さんでどうぞ。夜飲むときは、温かいほうがいいと思います」

「いいんですか？　ありがとうございます。・・・できれば、二つに分けてもらえるとありがたいんですが」

アキが問うように小首をかしげると、シカマルは苦笑した。

「知り合いが、子供の夜泣きで大変だって言ってたもんですから・・・」

「ああ、それなら・・・」

アキは保管室へ行くと、何やらごそごそやっている。しばらくして戻ってくると、小さな布の袋を差し出した。

「これ。赤ちゃん用の匂袋です。枕にしのばせてください。夜泣きが軽減されると思います」

「そんな・・・。ありがとうございます」

シカマルは恐縮した様子で匂袋を受け取った。

「明日、ミーティングがあるそうです。それを知らせに來ただけな

んですが、なんだかいろいろもらっちゃって悪いっすね」

アキはニツコリする。

「いいんですよ。鹿の角について教えてもらえたし。また来てくだ
さいね」

翌日、アキがミーティングに指定された部屋へ行くと、シカクが笑
顔で近づいてきた。

「いやー、昨日はシカマルがお土産をいただきちゃって、ありがと
うございます。あのお茶、女房がすごく気に入ったみたいで」

「喜んでいただけて、私も嬉しいです。今度、奥様と一緒にサロン
にいらしてくださいね」

するとシカクは満面の笑顔を浮かべた。

「いいんですか？ 実は女房が顔のマッサージに興味を持っていて・
・・。サロンはいつ再開するんですか？」

「この開発の方向性が見えたらと思ってますが・・・。でも、いつ
でもいらしてください。夕方以降は時間が空いてますから」

「いや、悪いですねえ。じゃ、女房と相談してみます」

そこへシカマルが口を挟んだ。

「オヤジ！ 社交辞令を真に受けてんじゃねーよ」

アキは微笑んで言葉を返す。

「社交辞令じゃないですよ。いつでもどうぞ。シカマルさんも、気
が向いたら来てね」

ちようどそのとき、綱手の声が部屋に響いた。

「さて、始めるか。みな、席に着け」

ミーティングが終わり、帰ろうとドアに手をかけたアキは、綱手に呼び止められた。

「そろそろ見合いの返事を聞かせてもらおうか」

アキは小さくため息をつき、答えた。

「かなり迷いましたが、やっぱりお見合いはやめておこうかと・・・。なんだか忙しくて、言いそびれていました。すみません」
綱手は椅子に背を預け、腕を組む。

「そんなことだろうと思っていたさ。まあ、いい。すでに相手は見つけたようだしな。サクラから聞いたぞ」

アキが振り返ると、綱手に向かって猛烈な勢いで手を振っていたサクラが固まった。

「お前、カカシといい雰囲気なんだってなあ。ぜんぜん気づかなかったぞ。灯台下暗しだな」

綱手は面白そうに笑っている。

「いや、ちが・・・。すみません、アキさん」

サクラはシュンとしよげ返った。

「・・・・・・そのことですが、サクラさんの勘違いですよ」

アキは苦笑しながら綱手に向き直った。

「いい雰囲気も悪い雰囲気もありますから。仲のいいお友達です」
「・・・・・・そうなのか？　なんだ。期待して損した」

綱手がそっぽを向くと、シズネが口を挟んだ。

「まあまあ、綱手様。アキさんは今、サロンのことや菓の開発で手一杯でしょうし・・・・・・。お見合いも断られたことだし、結婚についてはしばらくそっとしておいてあげましょうよ」

「・・・・わかった。でも、アキ。今度トラブルに巻き込まれたら、容赦しないからな。私は忙しいんだ。よけいな心配はかけるなよ」
綱手なりの優しさなのだとわかっているので、アキはニッコリ笑う

と頷いた。

「わかってます。それじゃ、私はこれで・・・」
暇を告げて、部屋を出る。廊下を歩いていると、サクラが後を追ってきた。

「すみませんでした。私ったら、よけいなことを・・・」

「いえ、いいんです。この件については、この間サイさんが教えてくれました。正直とても驚きましたが、気にしてませんよ。というより、皆さんが気にかけてくれてるんだなってわかって、嬉しいです」

サクラは上目使いでアキの表情を確認した。

「ほんとに？　気にしてませんか？」

アキは微笑んで大きく頷く。

「ええ」

サクラはホッと息を吐き、安心したようにニッコリした。

「よかったー！　私の早とちりだったみたいです。でも、もしかして・・・・・・と思ったときは、けっこう嬉しかったんですよ。それで少しはしゃぎすぎちゃった」

「ご期待に添えず、ごめんなさいね」

アキがニヤリとすると、サクラは苦笑した。

「いえいえ。私こそ」

「この話はこのくらいにして・・・。さて、あんみつでも食べにいかない？」

「いいですねー。じゃ、退院祝いの仕切りなおしということで、私が奢ります」

「ほんとに？　私のほうがずっと年上なのに・・・・・・。でも、お言葉に甘えちゃおうかな」

二人はいそいそと甘味処へ向かった。

クリーム白玉あんみつを満喫し、サクラに礼を言って別れると、アキは今夜の食材を買おうと食料品店へ向かった。

（ヒビキくん、今夜は来れないみたいだし……。簡単なものしようっと。久しぶりにそうめんにしようかな）

食材を購入し、家路に着くと、途中でキバと赤丸、ヒナタ、シノに出会った。

「こんにちは！」

アキが手を振ると、3人は立ち止まって挨拶を返す。

「これから任務？」

尋ねると、3人とも頷いた。

「里の周囲の探索に。怪しい人物の目撃情報があったので……」
ヒナタが言うと、アキは心配そうに手を握る。

「気をつけてね。……3人で行くの？」

アキが問うと赤丸がほえたので、微笑んで頭を撫でた。

「あと、赤丸もね」

「もう一人、隊長としてネジも行くんだ」

キバが答えると、アキは少し考えるそぶりを見せた。

「ネジさんって……。ああ、ヒナタさんの従兄弟の方？」

「はい。ネジ兄さんも百眼の使い手ですから、広範囲を効率的に探索することが出来るチームになります」

ヒナタが説明すると、アキは

「そうなんだ……。なんかすごいね、みんな」

としきりに感心している。

「そういえば、退院してから会ってなかったな。元氣そうで良かったぜ。ほんととはもっと話していたんだけど、そろそろ集合時間なんだ。またな」

キバが言うと、シノが頷く。

「隊長をあまり待たせるわけにはいかないからな。いくぞ、ヒナタ」
「うん。じゃ、アキさん、また今度ゆっくりお話ししましょうね」

ヒナタはニツコリすると、キバたちと並んで去っていった。

家に着くと、アキは台所のテーブルにつき、資料を見ながらミーテ

イングの内容を振り返る。

（次回は必要なハーブ類を揃えて持っていけないと。そういえば今夜は満月よね。先月は入院してたから、朔夜草、取りにいけなかったもんなあ。今夜は行かないと）

開発時は実験などで多く利用するため、保管室に残っているものだけでは心もとない。今夜は大きめのかごを2つ用意しよう。

夜空に満月が輝くと同時に、アキは家を出た。

小柄なので、大きなカゴを両手に持っている、膝にごつごつと当たって非常に歩きにくい。

一方、深夜から里の周囲の警戒任務に就く予定のカカシは、慰霊碑の前に立っていた。

（最近は平和な時期が続いていて、お前が生きていた頃と比べれば、ずいぶん楽な任務ばかりだ。写輪眼も使う機会が減ってるしな。でも平和なら平和で、今度は金と闘いに餓えた者が抜け忍になり、盗賊行為を働いているらしい。この辺でも出沒し始めたから、今夜から警戒任務に当たることになった。里と仲間を守るという役割は、きちんと果たさなくちゃね）

心の中で語りかけていると、どこからか

「お前は今までも立派にやってきたじゃないか」

と声がした。

カカシはハッとして周囲を見回すが、誰もいない。

「真面目すぎるんだよ。っていうか、お前ってかなり頑固だよな。

今は大戦の世じゃない。いつまでもオレたちにこだわってないで、そろそろ自分のことを考えてもいい頃じゃないか？」

（・・・空耳じゃない。それに、この声は・・・でも、どこから？ 幻術か？）

カカシは額当てを上げ、左目を開いた。

（特に気配もないし、おかしいものも見当たらない・・・）
眼をこらしたとき、遠くに淡い光が出現した。その光は、どんどん

こちらへ向かって広がってくる。それとともに、甘くやわらかな香りも漂ってきた。

（朔夜草？）

カカシがそう思ったとき、再び声がした。

「いい加減、オレに心配かけるのは止めてくれ。じゃ、またな」

声の主は、正体を現さないまま勝手に別れを告げる。

「待て。お前は誰だ？」

カカシは大声で尋ねたが、声の主は答えない。カカシは頭を小さく振り、額当てを左目の上にずり下げた。

その後朔夜草が広がり始めた地点を眺めると、こちらへヨタヨタ歩いてくるアキの姿が見えた。

（アキさんの声……のわけないか。あんなに遠くにいるし、男の声だったし、オビトの声に似ていたし……）

そう考えながらなんとなく眺めていると、いきなりアキが転んだ。

（……あ、コケた……。大丈夫かな）

カカシが駆け寄ると、アキは

「もう……。やっぱりカゴは1個にして、往復するべきだったかな」

と小声でブツブツとつぶやいている。カゴは転んだ拍子に手から離れ、数メートル先に転がっていた。

「大丈夫ですか？」

カゴを拾い、アキに手を差し出す。

「ああ、カカシさん……。ありがとうございます」

カカシの手を借りて立ち上がると、アキは膝についた汚れを叩いた。

「往復するのは面倒だから、カゴを二つ持ってきたんですが、歩きにくくて」

そう言って苦笑する。

「カカシさんはどうしてここにいるんですか？」

と尋ねたあと、慰霊碑を見て

「ああ……」

と納得したような表情になった。

カカシはカゴを持ち上げ、

「これ、前回のカゴよりずいぶん大きいですね。しかも二つだなんて。これに集めるとなると、相当時間がかかるんじゃないですか？」と尋ねた。

「ええ。薬の再開発で使用するんです。月に一度しか採れないものですから、多く採るにこしたことはないと思って。配合率に関しては緘口令が敷かれているので、これ以上はお話できないんですが・・」

言いながらアキは辺りを見回し、嬉しそうに微笑んだ。

「前回よりたくさん生えてますね！」

「ほんとですね・・」

カカシは朔夜草に囲まれた慰霊碑を眺め、その幻想的な光景に感嘆した。

「亡くなった英雄たちを癒しているように見えますね。ここに生きてくれて良かった」

「・・・そうですね」

アキもぼんやりと慰霊碑を眺める。

しばらく二人は黙って慰霊碑を見つめていたが、アキはハツとしてカゴを抱えなおした。

「のんびりしてる暇はないんだった！　じゃ、その辺で摘んでますから。私のことは気にせず、ご自由にどうぞ」

と言いながら少し離れた場所へ移動し、慰霊碑に背を向けるようにしゃがみこむ。

（気を使ってくれてるのかな）

カカシはそう思い、アキの背中に声を掛けた。

「ここには十分すぎるほどいましたから、そんなに気を遣わなくても大丈夫ですよ。任務まで時間があるので、少し手伝いましょうか？」

アキは驚いた表情で振り向いた。

「え？ お手伝いしてもらえるのは嬉しいけど・・・。。でも、いいですよ。任務があるなら、余計な体力は使わないほうが・・・」

カカシは噴き出した。

「これくらい、どうってことないですよ。どちらにしても、アキさんが来なければ任務までここにいたでしょうし」

それからしばらくの間、二人は無言で朔夜草を摘み続けていた。ふとカカシが顔を上げ、眉間に皺を寄せる。

「・・・里の様子がおかしいな・・・」

「え？ 何か言いましたか？」

アキは尋ねたが、カカシは片手を上げて黙っているよう伝えた。

「アキさん、十分な量は取れていないと思いますが、今夜はもう帰ってください。オレは里の外の様子を見えます」

カカシは立ち上がると、カゴをアキに手渡した。

「何が起きているんですか？」

「・・・分かりません。とにかく、早く帰ってください」

普段は見たことのないカカシの厳しい表情に、アキは頷いてカゴを受け取る。

「では、帰ります」

「送ってあげたいのは山々ですが、急ぎますので」

「私は大丈夫ですから。・・・気がつけてくださいね」

「アキさんも。では」

カカシが背を向け駆け出すのを見届けると、アキも家へと向かい始めた。

アキが家に着くと、ヒビキが畑の中央に立つ姿に立っていた。

「ヒビキくん？ もう任務は終わったの？」

アキが声を掛けると、ヒビキはふらつきながらこちらへやってくる。

「どうしたの？ 怪我でもしたの？」

心配になったアキが駆け寄ると、ヒビキのどんよとした目が見返す。

「・・・具合悪いの？ 大丈夫？」

腕に手をかけると、乱暴に払われた。驚いたアキは一步後ろへ下が

り、ヒビキの顔をマジマジと見つめた。

「・・・・・・・・ヒビキくん？　どうしたの？」

ヒビキは答えない。その右手にクナイが握られているのを見て、アキの背筋に冷たいものが走った。

「・・・・・・・・何をするつもり？」

ヒビキは黙ったまま、クナイを構えた。

森を抜ける途中、カカシはこちらに向かってくるヤマトに気づいた。

「ヤマト！　何が起きている？」

声を掛けると、ヤマトはカカシの前で立ち止まる。

「どうやら遠距離型の幻術使いが、自分より力の弱い下忍たちに幻術をかけているようです。今、暗部が幻術使いの拘束に向かっていますが、幻術にかかった下忍たちは自分の知人を襲って金品を奪おうとしているんですよ。で、ヒビキたち3人も幻術にかかってしまいました。僕に襲い掛かってきたヤオイとゲンタの幻術を解き、再度かかったときのために拘束している間、ヒビキが・・・・・・・・」カカシはイヤな予感を覚えた。

「二人に対処している間に消えてしまったんです。あいつらの居場所を把握するため、普段から種を仕込んであるんですが、どうやらあいつはアキさんのもとへ向かっているようです」

「・・・・・・・・オレが行く！」

引き返そうとするカカシの腕をつかみ、ヤマトは毅然とした口調で告げる。

「僕の部下です。僕が行きます」

「・・・・・・・・ヒビキは傷つけない」

振り向いたカカシの表情を見て、ヤマトは手を離した。

「さっきまで、オレはアキさんと一緒にいた。何か起きていると分かっていたのに家まで送らず、一人で帰したんだ。彼女になにかあったら・・・・・・・・オレの責任だ」

ヤマトは頷いた。

「・・・・・・・・わかりました。では、ヒビキをよろしくお願いします」

「ああ」

ヒビキのクナイから逃れようとしたアキは、両手に持っていたかごに足をとられ、その場にしりもちをついた。それがさいわいし、首もとに振り下ろされたクナイの狙いがはずれ、左腕をかする。普段からよく手入れされていたクナイの切っ先は鋭く、洋服の上からアキの肌も切り裂いた。しかしショック状態に陥っているアキは、痛みを感じない。

「どうして？」

ささやくような声で尋ねる。

ヒビキは再びクナイを振り上げ、

「金を出せ」

といった。

「え？ お金？」

アキの顔にとまどいの表情が浮かぶ。

「・・・・・・・・そんなに困っていたのなら、言ってくればよかったのに。夕飯の材料だって、無理して買ってこなくてもよかったのよ？」

「・・・・・・・・金を出せ」

ヒビキは同じセリフを繰り返す。

「今は持っていないから、家に入らないと・・・・・・・・。少し待ってて」

立ち上がろうとしたアキは、左腕の痛み気づいた。切り傷から、血が流れ続けている。

「・・・・・・・・こんなことをするほど、私を憎んでいたの？ ぜんぜん気づかなかった・・・・・・・・」

「金を出せ！」

ヒビキがまたクナイを振り下ろす。アキはとっさにカゴを前に突き

出し、身を守った。竹細工のカゴはクナイに引き裂かれ、勢いで手から離れて目の前に転がる。集めた朔夜草が、辺りに飛び散った。
(違う。私を憎んでいるんじゃない……。)。何かに操られているような、そんな感じ。どうすれば……。)

そう思いながら、アキは残ったカゴで身を守ろうと抱きかかえた。
「……。今、持ってくるから。お願いだから、クナイをしまつて」
アキが言うと、ヒビキは家のほうを眺めた。

その瞬間、カゴに手をいれ、朔夜草をつかむ。そしてカゴを放り出し、ヒビキに抱きついた。勢いで倒れたヒビキの手から、クナイが離れる。

アキはヒビキに馬乗りになると、胸元に朔夜草を握った手を押し付け、深層心理への接触を試みる。

(オイルじゃないから無理かもしれないけど……。お願い、届いて)

意識を集中すると、額の辺りに鈍痛が走った。痛みにも構わず接触を試みる。アキの必死さが届いたのか、ヒビキの内面にぼんやりとしたグレーの霞のようなものが見えた。

(……。これ、なんだろう?)

接触しようとした瞬間、ヒビキに突き飛ばされ、地面に転がる。そのとき、

「解!」

と声がして、アキの隣に意識を失ったヒビキが横たわるのが見えた。

(ヒビキくん……)

アキの目から涙が零れ落ち、そのままぶたが閉じた。

「アキさん?!」

カカシはアキの脈を確かめた。動いている。気を失っているだけか……。?

血が流れているアキの左腕に布を巻きつけ、止血していると、ヒビキが低くうめいて意識を取り戻した。

「……あれ？　ここ、アキさんの畑……」

そして、横たわるアキに気づいた。

「アキさん、どうしたの？　カカシ先生、何が起きたんですか？」

「お前は幻術にかかっていたんだ。で、アキさんを襲った。下忍たちはみんな幻術にかけられたらしい。犯人が捕らえられたかどうか分からないから、お前は一度拘束させてもらうぞ。相手は遠距離型で、広範囲に術をかけるらしいから、再度幻術にかかる可能性がある」

ヒビキはアキの左腕を見て、ショックを受けている。

「じゃ、その傷は……」

「話は後だ。オレはこれからアキさんを病院に連れていくが、お前はここに残していく」

カカシは縄抜けできないように工夫しながら、ヒビキを縛る。そしてアキを抱きかかえ、泣いているヒビキを後にして病院へ向かった。

「さいわい、脳の出血はありません。念のため、今後24時間は暗室で様子をみますが」

診察した医療忍者はそう言うと、アキを乗せたベッドを押して出ていく。

カカシは心配そうなまなざしで見送った。

そこへ部下3人を連れたヤマトがやってきて、アキが横たわるベッドと鉢合わせした。

医療忍者が口に指をあて、静かにするよう伝えると、4人は沈んだ様子でアキを眺める。ヒビキが鳴咽をもらし始めた。

「……お前のせいじゃないよ。ほかの下忍たちも幻術にかかったんだから」

小さな声でヤマトが諭す。

「で、幻術をかけたやつは捕えたのか？」

カカシが問うと、ヤマトは厳しい表情で頷いた。

「ええ。シノの蟲たちが場所を確定し、暗部が向かって拘束しまし

た。あんなヤツが盗賊団にいたとはね」

「ま、詳しいことはこれからイビキさんが聞きだしてくれるだろう」
ヤマトは離れていく医療忍者とベッドを見送りながら尋ねた。

「アキさんは……?」

カカシは治療室から出ると、ヤマトと一緒に医療忍者の背中を眺めながら答えた。

「脳の出血はないそうだ。脈も安定しているし、左腕の傷も浅かった。たぶん大丈夫だろう」

ヤマトは泣いているヒビキを振り返った。

「泣いてたって仕方がないだろう?」

「だって……。アキさんを守りたいと思っていたのに。守るどころか、傷つけてしまった」

ヒビキの涙が、床にぽとぽと落ちる。

「……。それは、お前がまだ弱いからだよ」

ヤマトは突き放すように言った。

「アキさんを守りたいのなら、もっと強くならないと。そのために何をするべきか、分かっているよね」

「……。はい」

ヤオイとゲンタは、ヒビキを慰めるようにその肩に手を置いた。

「24時間は暗室で安静にするそうだから、今夜はもうアキさんのそばにすることはできない。帰ったほうがいい」

カカシの言葉にヤオイとゲンタは頷き、ヒビキに寄り添うように腕を取る。ヤオイが耳元で何かを告げると、ヒビキは小さく頷いた。

3人はカカシとヤマトに小さく会釈し、背を向けて帰っていく。

「とりあえず、大事にならなくて良かったですよ。幻術使いが拘束された時点で、下忍たちの幻術はすべて解けましたし」

「そうだな……」

「怪我をしたとはいえ、アキさんも無事でよかった」

ヤマトはため息をつき、悲しげにいった。

「自分の部下が、いつもお世話になっているアキさんを襲うってい

うのは・・・。。いくら幻術にかかっていたとはいえ、やっばり堪えますね」

「ああ。そうだろうな」

そう答えながら、カカシはアキのベッドが消えた廊下の先をジッと見つめていた。

2日後の朝、アキが暗室から通常の病室へ移ったと聞いたカカシは、様子を見ようと病院に向かった。

病室の前で、泣いているヒビキの肩をサクラが抱いている。

「どうした？ アキさんの容態に何か・・・？」

カカシが尋ねると、サクラは首を横に振った。

「アキさんは無事です。でも・・・」

「でも・・・？」

ヒビキが涙でぐっしより濡れた顔を上げ、声を上ずらせながら答えた。

「アキさん、記憶がないんだ」

「記憶がない？」

「ええ・・・」

再び激しく泣き始めたヒビキの代わりに、サクラが説明する。

「どうやらキザシに家を焼かれ、木の葉の里にやってきたところから、すっぽり抜けているようです」

「じゃ、オレたちのことは・・・」

「まったく覚えていません。もちろん、キザシと対峙したことも、離婚したことも、修司のことも、京子のこともすべて」

そこへ綱手とシズネがやってきた。

「トラブルには巻き込まれるなど言っていた矢先に、これだ。一人じゃなかったら、こんな目に合わなかったのに」

綱手の言葉に、カカシは悲しげな表情を浮かべた。

「オレが家まで送っていれば・・・」

するとヒビキが声を張り上げる。

「違う！ オレのせいだ！ オレが幻術にかかったから・・・。オレがアキさんを傷つけたから・・・」

「起きてしまったことは、もういい！ ここでああだこうだ言っ

も、アキの記憶が戻るわけではないだろう。脳の出血はないし、腕の傷もたいしたことはないんだ。記憶だって、いつかは戻るだろう」
「でも……」

ヒビキは言葉を返そうとしたが、綱手に睨まれて口を閉ざした。

「ここだめめそしている暇があるんだったら、修行の1つでもしろ！ 病院の入り口で、ヤマトたちが待っているぞ。しっかり修行して、今度こそアキを守りきれ強い忍者になれ」

綱手の言葉に、ヒビキは何かを感じたようだ。力強く頷くと、袖で顔を乱暴に拭き、廊下を走り去っていった。

「……まったく、子供は手がかかるな」

そうつぶやくと、綱手は病室のドアを開いた。

「邪魔するぞ」

4人が入っていくと、ベッドに腰掛けていたアキは少し緊張した面持ちになった。サクラはあらためてそれぞれを紹介する。

「アキさん、こちらは綱手様。5代目火影です。こちらはシズネさん。そしてこの人は、カカシ先生です」

目が合ったときのアキの表情を見て、カカシは初対面のことの事を思い出した。

初めて里にやってきたアキは、捻挫した足でヨロヨロと廊下を歩いていた。声をかけたら、驚いて転んでしまった。そしてカカシの顔を見上げたたん、怪しい者を見るような、おびえたような目で見ている。……仕方ないか。片目を除いて、ほとんど顔が隠れているんだもんな。それに、今は記憶をなくしている。

分かってはいたが、他人を見るようなアキの視線が妙に堪える。人懐こい笑顔が、本について熱弁しているときのアキが懐かしかった。

「じゃ、オレはこれで……。無事を確かめたかっただけですから」
綱手に言くと、カカシは病室から出ていった。

「カカシ先生？」

サクラが後を追おうとしたが、綱手は

「放っておけ」

と引き止める。そしてアキに向き直った。

「さて、サクラから話を聞いたと思うが・・・」

アキは頷いた。

「ええ。私、村からこちらへ依頼に来たところまでしか覚えていないんです。でも、1年以上前の話だと聞いて・・・。私の両親と村人たちも亡くなって、私はこの里に住み始めたそうですね。そして、サロンを開いていたとか。・・・ああ、でも、まったく思い出せません」

シズネはアキの肩に手を置き、静かにさすった。

「無理しなくていいんですよ。住み慣れた家に戻れば、少しずつ思い出すかもしれないし」

サクラはアキに近づき、胸元にかかっているペンダントを持ち上げた。

「アキさん、これ、覚えてますか？」

アキは切なげな表情を浮かべた。

「ええ。同じものを両親が持っていて・・・。もしかして、これは形見ですか？　両親のどちらが持っていたものでしょうか？」

サクラは泣きそうな顔になった。

「ご両親のペンダントは、ご遺体と一緒にお墓に入りました。これは・・・カカシ先生が・・・」

「止める、サクラ。記憶が戻らなければ、お前が何を言ったところで意味はない」

サクラは唇をかみ締め、そっとペンダントから手を離した。

「なんでこんなことに・・・。あの幻術使いのせいね。師匠、私も尋問に加わってもいいですか。この拳に誓って、仲間とアジトの場所を聞き出します」

「・・・いいだろう。ただし、イビキの邪魔はするなよ」

「了解です！」

サクラは肩をいからせ、拳を握り締めながら病室を出ていった。

「いいんですかあ？　サクラ、力いっぱいやっちゃいそうで、心配

だなあ」

シズネが苦笑すると、綱手は背を向け、窓の外を眺めながら言った。
「私だって、力いっぱい殴りたい気分だ」

カカシは慰霊碑の前に立つと、オビトの名を見つめた。

（また守れなかったよ。そして、後悔がまた増えた。あるときオレが一緒にいれば・・・）

「でも、彼女は生きているじゃないか」

以前のように、唐突に声が聞こえた。

「お前・・・。オビトか？」

カカシが問うと、声は笑った。

「やっと気づいたか。お前、ずっとオレの声に気づかなかっただろ？ 彼女のおかげで聞こえるようになったんだな」

その言葉に、カカシはアイピロウを思い出した。アキは何も言わなかったが、アイピロウからかすかに漂う朔夜草の香りにすぐ気づき、中にこっそりしのばせてあることがわかった。そしてその思いやりに、笑顔を誘われたのだ。

「朔夜草か」

「草のことはよく分からないけどさ。でもお前、気づいてたか？

以前は神無毘橋の戦いを思い出しては後悔ばかりしてたけど、最近は何となく楽しい話をしてくれるようになってたよな。ナルトたちの影響もあるんだろうけど」

「そうか？」

「ああ。おかげで、こっちまで暗い気分にならずに済んだよ。それで、さっきの話の続きだけど・・・」

声が一度途切れ、辺りに静寂が漂った。カカシは黙って慰霊碑を見つめる。

「・・・彼女は生きている。守れなかったわけじゃない。お前が駆けつけたから、彼女は無事だったんだ」

カカシはため息をついた。

「オレが送っていれば、記憶をなくすことは・・・」
声はいらただしげな口調になった。

「だーかーらー！　なんでそう悪い面ばかり考えるかな。記憶はいつか戻るだろう？　戻らないとしても、また最初から始めればいい。彼女は生きているんだから、どうにでもなるさ」

「・・・始めるって、何を？」

カカシの問いに、声は笑った。

「そんなの、オレに聞くなよ。自分がどうしたいかだろ？　ちなみにオレは今、リンや先生や、その他大勢の人たちと一緒に楽しく過ごしている。だから、オレたちのことはそんなに考えなくていいぞ。たまには思い出してほしいけどな」

カカシは寂しげな表情を浮かべた。

「そうか。みんなも一緒か」

「まだお前は来るなよ。・・・言いたいことは山ほどあるけど、今日はこの辺にしといてやる。じゃな」

声が別れを告げると、カカシは慌てた。

「おい！　まだ話したいことが・・・」

しかしいくら待っても、声は語りかけてこなかった。

翌日、カカシは再び病室を訪れた。

中に入ると、アキは胸元のペンダントを持ち上げ、眺めている。

「あ、カカシさん・・・ですよね？」

アキはニッコリ笑った。

「このペンダント、カカシさんがくださったそうですね」

記憶は戻っていないが、笑顔はかつてと同じものになっていた。カカシは内心ホッとして、椅子に腰掛ける。

「キザシの件も、サクラさんがいろいろ教えてくれました。あの任務では、カカシさんやガイさんが隊長を勤めてくださったそうで・・・覚えてなくてごめんなさい」

「いいんですよ」

カカシは微笑んで、カバンから本を取り出して差し出した。

「これ、どうぞ。以前、すぐく読みたがってたんですよ」

アキの顔が輝く。

「あ！ 父がいつも読んでいた本と同じだわ」

嬉しそうに受け取ると、さっそくページを開こうとした。

「あとで同じシリーズのものを持ってきます」

「いいんですか？ すごく嬉しい」

カカシはニッコリすると、後ろを振り返って言った。

「で、お前たち。そこで覗いてないで、入ってきたら？」

すると、ドアが開いてサクラとヒナタ、シズネが苦笑いしながら入ってきた。

「やっぱり、バレちゃってました？ 覗くつもりはなかったんですけど、なんか入りづらくってー」

サクラが言うと、ヒナタはうつむいてつぶやいた。

「・・・アキさんのお見舞いに来たんですけど、サクラさんが戸口で覗いていたから、つい私も・・・」

「ヒナタ！ 違うでしょ！」

サクラは慌てた様子でヒナタの腕をひじでつついた。

「私は、二人が覗いてたから、何してるのかなって思っただけですよー」

シズネが言うと、サクラとヒナタはがっくりと肩を落とす。

「ま、いいんだけどね。お前たちも暇だねえ」

カカシはげんなりした表情を浮かべた。

「じゃ、私たちは通りかかっただけなので・・・」

サクラは言うと、ヒナタとシズネの背中を押して病室を出た。

「ちょ、サクラ！ 私はアキさんと話が・・・」

抗うシズネに、サクラは耳打ちした。

「あとにしてください。せっかく仲良く話してるんだから」

「よけいな世話は焼かないことにしたんじゃないの？」

サクラは後ろ手にドアを閉め、真面目な顔で答えた。

「・・・昨日のカカシ先生の表情、気づきませんでしたか？」

シズネは少し考えたあと、首を振る。

「私、アキさんのそばにいたから見てないわよ」

「・・・すごく、寂しそうだったんですよ」

「ふうーん。でも、私も寂しかったわよ。仮死の薬の開発では、苦楽を共にした仲だもの。サクラ、あんたの考えすぎじゃない？」

シズネが言うと、サクラは諦めたようにため息をついた。

「もう、いいです。そうですね、私の考えすぎなのかもしれません」
それまで黙っていたヒナタが、ふと口を開いた。

「カカシ先生はいいとして・・・。心配なのは、ヒビキくんですね」
シズネは頷いた。

「私もそう思う。あの子、精神的に弱くなっちゃってるわね。お父様を亡くしてからずっと一人で頑張ってきたのに、アキさんに出会ってから・・・なんていうのかしら。今まで我慢してきたぶん、思い切り甘えていたっていうのかしら？ 技を磨く前に、もっと精神訓練しないといけないわね。ヤマトさんが何とかしてくれると思うけど・・・」

泣きじゃくっていたヒビキの姿を思い起こし、サクラも沈痛な面持ちになった。

3人が病室を出ていくと、カカシはアキに向き直った。

「・・・そういえば、イチャイチャシリーズ女性版のような本、アキさんのお父様がお土産に買ってくれたのがきっかけで、よく読むようになったんですよ」

アキは声を上げて笑った。

「私、そんなこともお話してたんですか？」

「ええ。オレはさすがに女性版は自分で買うことができないので、アキさんによく借りてたんです。記憶がないのなら・・・また最初から楽しめますね。よかったら、何冊か持ってきてみましょうか？」

カカシが言うと、アキは少し考えるそぶりを見せた。

「うーん・・・。体調は悪くないので、明日にでも退院できるようなんです。今日貸してくださったこの本で十分かな」

「そうですか」

記憶を失くしても、アキの笑顔は以前とまったく同じだ。カカシはホッとして、ニッコリ笑った。

そして両親の焼け焦げた死体を見たときのこと、キザシに殴られて体中痣だらけになっていたこと、京子に刺されたときのことなどを思い起こす。

（あんなことがあったんだ。このまま記憶が戻らないほうがいいのかもしれない・・・）

そのとき、サイが病室に入ってきた。

「こんにちは、アキさん。記憶を失ったと聞きました。・・・じゃ、初めましてって言ったほうがいいのかな。僕、サイっていいいます」
カカシの隣に立ったサイを見て、アキは苦笑いを浮かべた。

「こんにちは、サイさん。・・・ごめんなさいね、覚えていなくて」

「いいんですよ。一応僕たちの関係を説明すると・・・。以前はアキさんの家によく立ち寄って、ハーブティをご馳走になってました。

お土産に、お気に入りのブレンドをもらったり。あと、表情筋をほぐすマッサージもしてもらってましたよ」

サイはカバンからガラスの容器を取り出すと、サイドテーブルに置いた。

「先日いただいたハーブティ、なくなっちゃったので……。容器をお返ししますね」

「お前、まさか……。追加でもらいたくて来たんじゃないだろうな？」

カカシが呆れたように言うと、サイはムツとした表情を浮かべた。

「そんなんじゃないよ。中身がなくなると、いつも返してたんです。……。あと、これ」

サイは朔夜草の束を差し出した。

「ここに来る前に、アキさんの家に寄ったんです。ゆうべ集めた朔夜草は、ヒビキがドライ加工を施していましたよ。これは保管室にあった分です。必要かと思って、持ってきました。記憶を取り戻す手助けになるといいですね」

アキは目を見開いた。

「まあ……。ありがとう。朔夜草のこと、皆さんご存知なんですね」

カカシは頷いた。

「ゆうべ、オレも一緒に採ってたんですよ。その後事件が起きて……。」

サイが話を引き継ぐ。

「幻術を使う盗賊が里の外から術をかけたんですよ。その幻術にかかった下忍たちが知人を襲ったんです。ヒビキもその一人で……。」

「ヒビキくんって、昨日来てた子でしょ？」

病室に見舞いにやってきて、突然泣き出した少年のことをアキは思い出した。

「はい。幻術にかかったヒビキはアキさんを襲い、こういう状況になったわけです」

「だからあんなに泣いてたのね。幻術にかかっていたのなら、あの子は悪くないのに・・・」

アキが言うと、カカシは小さく首を振った。

「でも、あいつも忍者のはしくれです。たやすく幻術にかかったことが悔しいのでしょうか。それに、いつもアキさんを守りたいとあいつは思っていた。なのに、自分が傷つけてしまったんですから・・・」

「そうだったんですか・・・」

アキは悲しげな表情を浮かべ、うつむいた。

「そうそう。先日、アキさんに約束した絵ができたんですよ」

サイは紙を取り出し、アキの目の前に広げた。

「これ・・・。私とヒビキくん？」

アキはまじまじと絵を眺める。

「ええ。ちょうど食事時にお邪魔したんですが、絵を描き始めたら二人とも緊張して固まっちゃって。これはプレゼントします。ヒビキにも後で見せてあげてください」

「ありがとう！」

アキは絵を受け取ると、大切そうにサイドボードにしまった。

翌日、退院の準備をしていると、ヒビキがやってきた。

「・・・荷物、持ちます」

小さな声で告げると、カバンを持ち上げた。ヒビキはそのまま黙ってうつむいている。

アキはサイにもらった絵を取り出した。

「これ、見て。サイさんが描いてくれたのよ。あなたと私が一緒に食事をしているところですって」

ヒビキは

「あ・・・」

といったきり、絵を凝視している。

「すごく仲が良さそうね。いつも一緒に夕飯を食べてたようだし」

アキがニツコリすると、ヒビキの目に涙が浮かんだ。

「あなたがしたこと、聞いたわ。でも、気にする必要なんてないのよ。私はこうして元気なんだし、記憶なんていつかは戻る。戻らなくても、みんながとてもいい人で、すぐく仲良しだったっていうことはなんとなく分かるの。だから、これまでのように仲良くしてもらいたい。この絵にあるような、ヒビキくんの明るい笑顔が見たいな」

ヒビキは袖でゴシゴシと涙を拭いた。そしてカバンを持ち直し、ベッドから立ち上がるうとしたアキに手を貸す。

「オレ、もっともっと強くなるように頑張る。そして今度こそ、アキさんを守るから」

アキはヒビキの頭を撫でた。

「期待してるからね。頑張って」

ヒビキは嬉しそうに笑い、胸を叩いた。

「任せとけ！」

そのやりとりをドア越しに聞いていた綱手は、ため息をついた。

「子供は単純でいいなあ」

するとシズネは

「まあ、いいじゃないですか。これでヒビキも大丈夫ですね」と苦笑する。

「いや、あいつはもっと精神的に強くならなければ。そうヤマトに葉っぱをかけておけ」

「私がですか？」

シズネはやれやれというように、頭を小さく振った。

ヒビキが案内してくれた家に見覚えはなかったが、懐かしさのようなものは感じた。

「私はここで暮らしていたの？」

アキの問いにヒビキは頷き、1つひとつ部屋へ案内していく。

「ここが保管室で、ここがサロン。で、ここが寝室だね。これ、ヤ

マト先生が建ててくれたんだよ」

「ヤマトさん？」

アキは懸命に思い出そうと試みたが、頭の中がモヤモヤするばかりで、次第に気持ち悪くなってきた。その様子を見たヒビキは、説明を続ける。

「オレの先生なんだ。木遁の使い手で、家を建てることもできるんだよ。暗部にいたこともあって、すごく強いんだ。でも、アキさんのフットマッサージには弱いんだぜ。すぐ寝ちゃうし」

すると、玄関から声がした。

「余計なことは言わなくてもいいんだよ」

振り返ると、男性が立っている。

「こんにちは、アキさん。僕がヤマトです」

アキは微笑むと、会釈を返した。

「こんにちは。この家を建ててくれたそうで・・・」

ヤマトはアキの言葉を両手を振ってさえぎった。

「礼はもういいですよ。1年以上前の話だし、代わりに無料でフットマッサージを何度もやってもらえたし」

「そうですか。じゃ、これから無料で・・・」

「いえ、いえ。気にしないでください。でも、記憶がなくても言うことは同じですね。人柄はそのままだ」

ヤマトは嬉しそうにニコニコしていたが、表情を引き締めると、ヒビキに告げた。

「ところで、僕はヒビキを迎えに来たんです。五代目から、鍛え方が甘っちょろいとお叱りを受けまして……。しっかり鍛えるようにと釘を刺されましたからね」

ヒビキは身震いをした。

「今までの甘っちょろいっていうんですか・・・」

「ああ。特に、精神面の弱さを指摘されたぞ。これからはガンガン鍛えるからね。覚悟しなさい」

「・・・はい」

ヒビキは苦笑しながらアキに向かって小さく手を振ると、ヤマトの後について家を出ていった。

二人を見送りながら、アキは記憶を辿ろうとした。

「あの後姿……。以前にも見たような……」

しかしおぼろげなそのイメージは、はっきりする前にあっけなく消えてしまった。

「思い出せそうで思い出せないって、なんか気持ち悪くってストレス溜まるなあ……」

ゆうべはサイが持ってきてくれた朔夜草を使用したか、記憶の回復には至らなかった。小さくため息をつき、荷物をほどく。中からサイの絵を出し、周囲を見回した。

温かな食事の風景なので、台所の壁に飾ろうと決め、額の中に入れて位置を調節する。

「私ったら、すごく楽しそう。それに、実物より少しキレイめに描いてくれてるみたい。なんか嬉しいな」

アキはしばらくその場に立ったまま、絵を見つめ続けていた。

その日の夕方、アキが夕食の用意を始めようとしていたところ、金髪の少年とサクラ、ヒビキがやってきた。

「こんにちは、アキさん。今日はナルトを連れてきました」

サクラが紹介すると、少年は満面の笑顔を浮かべた。

「オレのことは覚えてるだろ？」

アキが小さく首を振ると、ナルトはしょんぼりとした。

「そっかー。アキさん、オレんちに泊まったことあるんだけどなー。『牛乳が腐った匂い』で思い出さない？」

アキは嘔き出し、

「なに、それ？」

と尋ねた。

「いいの、いいの。そんなの思い出したら、食事ができなくなっちゃう」

そういいながら台所を見回したサクラは

「夕食の支度はまだですね。良かった。お惣菜を持ってきたんです」と、テーブルの上に買い物袋を置いた。

「ありがとう。みんなも一緒に食べるわよね？」

アキは白米を大目に用意し、研ぎ始める。

サクラは壁の絵に気づき、近くに寄った。

「あ、これ……。サイが描いたんですか？」

「ええ。すごく上手よね。忍者を辞めても、絵描きとしてやっていけそう」

アキが答えていると、ナルトとヒビキもサクラの隣に立ち、絵を眺めた。ヒビキは照れくさそうに頬を染めている。

「オレにも描いてくれないかなー。サクラちゃんと二人の絵」

「あんたと二人の絵なんていらないわよ。私はアキさんの手伝いをするから、あんたたちはそっちに行つて」

ナルトとヒビキはサクラに追い立てられ、テーブルについた。

食事の途中、ふいにアキが尋ねた。

「そういえば、捕まえた盗賊の人ってどうなったんですか？」

サクラが眉をひそめ、

「ああ、あいつ。盗賊同士の結束はそれほど固くないようで、あっさり仲間の居所と情報を吐きましたよ。痛めつけてやろうと思ったのに！」

と言いながら、拳を叩いた。

「痛めつけるって……。サクラさん、けっこう血の気が多いのね。じゃ、騒動の元になってた盗賊団っていうのはこれで何とかなるのかな」

「ええ。彼らが活動していた里同士で討伐隊を組むことになりました。まあ、あっという間に終わるでしょうね。そうそう、討伐隊にはカカシ先生とヤマト隊長も参加するんですよ。明日の朝から出かけるようです」

サクラの言葉に、アキが心配そうに眉をひそめる。

「二人とも実力のある忍者と聞いているけど……。大丈夫かしら。怪我とかしなきゃいいんだけど……」

「あの二人なら大丈夫。その辺の盗賊くらいちゃっちゃと片付けて、涼しい顔で帰ってくるってばよ」

食事に没頭していたナルトが顔を上げ、自信満々の表情でそう告げた。

「なんたってカカシ先生は里の外でも有名な実力派だし、ヤマト隊長が率いた隊の生還率は里一番だっていうからな。あの二人が一緒なら、鬼に金棒だってばよ」

アキは安心したようにニッコリした。

「盗賊を全部確保するまでの間、里は私たちが守ります。安心してくださいね。ヒビキも修行を頑張ってるみたいだし、今度は簡単に

やられたりしないと思いますよ」

サクラが言うと、ヒビキは真っ赤になった。

「・・・あのときは本当にすみま・・・」

「気にすんなって！ オレだって、アカデミーを出たばかりの頃は失敗の連続だったもんな」

ヒビキの言葉をさえぎり、ナルトがその肩を強く叩いた。サクラは大きく頷く。

「ほんと。そりゃもう、大変だったんだから」

「えー！ 謙遜のつもりだったのになあ」

ナルトがガツクリうなだれると、台所に笑い声が響いた。

「記憶がなくても、ぜんぜん違和感がなかったな」

アキの家からの帰り道、ナルトがいった。

「うん。性格はそのままだしね。単に、里に来てからの出来事を覚えてないってだけだもん」

サクラが答えると、二人の後ろをトボトボ歩いていたヒビキが歩調を速めて追いついた。そして、

「ナルト先輩は、どうやって今のような力を身につけたんですか？」と尋ねる。

「うーん。どうやってって言われてもなあ。・・・どんなにつらくても諦めない、根性かな。なんたってオレは里を守る火影になるんだから、すっげー強い忍者にならないと。そのためには、どんな修行でもやり遂げてみせる」

ナルトの言葉に、サクラも続いた。

「私だって、師匠の下でもんのすごい修行をさせられたんだから。死を覚悟したことだってあるのよ。あんたもあのヤマト隊長の下で修行してるんだから、しっかり頑張りなさい」

ヒビキはアキの家の方角を振り返りながら、頷いた。

「頑張ります」

ナルトたちが帰ってしばらくすると、玄関のドアをこつこつ叩く音がした。

ドアを開けると、カカシが立っている。

「こんばんは。さっきナルトさんたちが来てたんですよ」

「らしいですね。帰っていく後姿が見えましたから。今日は別のイチヤイチャシリーズを持ってきました」

本当はもっと早く来ていたのだが、サクラに会ったらまた変な勘ぐりを入れられそうだと思い、面倒だったので帰るまで待っていたのだ。

「明日から任務でないので、先に渡しておこうと思って」

そう言うと、カカシはテーブルの上に2冊本を置いた。

「ありがとうございます！　じゃ、昨日お借りした本はお返ししますね」

アキはカバンから本を取り出し、カカシに手渡す。

「えーと……。私が揃えている本は全部読んだって言ってましたよね。じゃ、帰ってくるまでにまた新しいのを用意しておきます。ところで……」

アキは心配そうに眉をひそめ、カカシの顔をのぞきこんだ。

「明日の任務って、討伐隊のことですよ。さっき、サクラさんから聞きました。カカシさんはすごい忍者だから大丈夫と言ってきましたが……。怪我などしないよう、気をつけてくださいね」

カカシはニッコリ笑いながら答えた。

「心配無用です。すぐに終わらせて帰ってきますよ。アキさんこそ今までトラブルに巻き込まれることが多かったので、気をつけてくださいね」

カカシの言葉にアキはコクリと頷き、記憶を手繰ろうと両方のこめかみに指を当てた。

「……。聞いた話では、確かにいろいろあったようですね。でも、自分がどんな目に合ったのか、まったく思い出せなくて。皆

さんと話していると、楽しかった思い出は何となく分かるような気がするんですけどね。もう少し落ち着いたら、両親の墓参りをしたいと思っています。あと、キザシとも会ってみようかと……………」

「それは止めたほうがいい。もう離婚したって話は聞いているですよ？」

今のアキでは、キザシに同情してしまうだろう。そう思ったカカシは、即座に否定した。

「それは教えてもらいましたが……………。両親がどのように死んだのか、誰も教えてくれないんです」
カカシはため息をつくとき、説明した。

「ご両親は仮死の薬を飲んで、キザシの人質になるのを防ごうとしたんです。しかし、キザシが家に火を放った。それで、そのまま……………」

アキはカカシの向かいの椅子に力なく座り、両手で顔を覆う。

「……………教えてくれて、ありがとうございます。そうですか、そういうことだったんですか……………。だったら、キザシに会うのは止めておきます」

アキの声が少し震えている。涙を我慢しているのだろう。片手を顔から離し、ペンダントを握り締める。

その様子をカカシは沈痛な面持ちで眺めていたが、ふと立ち上がり、窓際へ歩いていった。

「ここは、あなたのおじいさんがかつて住んでいた土地だったという話は聞きましたか？」

「いえ……………」

アキは顔を上げ、こぼれかけた涙を慌ててぬぐう。そしてカカシの隣に立ち、窓から外を眺めた。

視線はそのまま、カカシは話を続ける。

「アキさんが来た頃は、ここはただの草原になってました。でも、あなたがここまで作り上げたんです。ご両親と、おじいさんの遺志

を継ぐために」

そしてアキの顔を覗き込み、やさしく微笑んだ。

「アキさんが開いたサロンで、たくさんの方が癒されました。マッサージだけじゃなく、アキさんの笑顔が見たくて来る人も大勢いますよ」

アキは照れてうつむいた。

「そうですか。じゃ、これからも頑張らないと」

カカシは視線を上げて月を眺め、ポツリとつぶやく。

「アキさんは、満月みたいですよね」

言ったあとで、自分の言葉に驚いたような表情になった。

「私が満月……？ そんなに丸顔ですか？」

アキが怪訝な表情で尋ねると、カカシは困ったような表情を浮かべた。

「い、いや。そういう意味ではなく、なんとなく口を突いて出た言葉で……」。じゃ、オレはそろそろ帰ります」

そういうと、カカシは挨拶もそこそこに帰っていった。

カカシが去ったあと、アキは鏡で自分の顔を確認し、

(そんなに丸いかなあ……)

と、首を傾げた。

一方、慰霊碑に立ち寄ったカカシは、何であんなことを口走ったのだろうと考えていた。

そのまましばらく立ってオビトの名を見つめていたが、今夜はオビトらしき人物の声は語りかけてこない。

ぼんやりと空を見上げ、月と重なるようにアキの笑顔を思い出す。そして、周囲を見回した。

「暗闇をほんのり優しく照らす。そんな感じかな」

確かに、アキと一緒にいると心が落ち着く。ナルトたちと話すのも楽しいが、本について語っているときの楽しさは少し違う。脳の出血を聞いたときは背筋が冷たくなったし、幻術にかかったヒビキ

がアキのもとへ向かっていると聞いたときの激しい動揺は今でも感じるができる。そして、記憶喪失になってカカシを最初に見たときのまなざしに、胸が痛んだ。

しかしオビトのことを考えたときの心の痛みは、和らいできたような気がする。時と共に癒されてきたのだろうか。それとも、アキのおかげ……？

「どう思う？」

カカシは慰霊碑のオビトの名に向かってつぶやいた。

「よくわからないんだ、オレ」

しかし今夜の声の主は、だんまりを決め込むことにしたようだ。

「ま、いいけどな。自分で考えろっていうんだろ？ 明日から任務だ。ここにもしばらく来れないな」

そして、アキにも会えない。

くも膜下出血以来、何かとアキに考えが及ぶようになっている自分には気づいていた。

彼女は自分の身を案じるより、周囲の人のことばかり気にしている。見ていてとても危うい感じで、ヒビキと同じく、そばにいて守ってやりたいと思う。任務とは別に。

カカシは小さくため息をついた。

「さて。明日は早いし、そろそろ行くよ」

そういい残し、慰霊碑に背を向けて家へ向かった。

翌日の朝、討伐隊のメンバーとして選出されたカカシ、ヤマト、キバ、ヒナタ、そしてシカマル、チョウジ、シノ、いのが門に集まった。

綱手が片手を上げて命じた。

「お前たち2小隊に盗賊の討伐を命じる。砂隠れの小隊と協力し、速やかに拘束して無事に帰還せよ」

「はい！」

全員が返事をする、綱手は頷いた。そして、再び命じる。

「散！」

出発した2小隊は別々の道を利用し、拘束した幻術使いから聞いたアジトへ向かった。

「そういえば、砂隠れからは誰が来るの？」

チョウジの問いに、シカマルが答える。

「オレたちが知っているメンバーは、カンクロウだけのようだ」

「なーんだ。あんたとおっても仲のいいテマリは来ないわけ？」

残念ねえ」

いのがからかうように言った。

「別に仲良くなんかねえよ」

げんなりした表情でシカマルが答えると、いのはクスクスと笑った。

「素直じゃないんだから」

「そういうことだったのか？」

シノが聞くと、シカマルは舌打ちした。

「どうでもいいだろ、そんなこと。いのもバカなこと言ってないで、任務に集中しろよ」

「はいはい、わかりましたー」

いのは笑いながら答えた。

木の葉の里の2小隊、砂隠れの里の2小隊が、盗賊のアジトを四方から囲んだ。無線にカカシの声が響く。

『各小隊は配置に付いたか？』

『シカマル班、配置に付きました』

シカマルが答えると、カンクロウの声も続く。

『砂の小隊も準備できてるぜ』

『周囲の見張りは？』

『見張りの2名は、砂が拘束した』

『では、残り8人だな。各小隊、突入を開始する』

カカシの声と共に、四小隊は動いた。

各小隊が2名ずつ捕獲する作戦は順調に進むかと思われたそのとき、地面から大量の手裏剣が飛び出した。討伐隊は一斉に飛んで避けたが、捕獲した盗賊を拘束している途中の砂の小隊4名の反応が一瞬遅れる。手裏剣は円を描きながら、一斉に4人めがけて落ちていった。

「お前ら、早く避ける！」

カンクロウは叫んだ。しかし4人の姿は、手裏剣の中に埋もれて見えない。

「ちっ」

カンクロウは舌を鳴らし、目を閉じた。

手裏剣の盛大な音が止み、あたりが静まり返る。

「・・・助かったのか、オレたち？」

と声がした。

見ると、手裏剣が隙間なく刺さっている木のドームのようなものが二つに割れ、数人の人影が現れた。拘束途中の盗賊は息絶えているが、砂の里の忍者4人はところどころから血を流してはいるものの、生きて立っている。その傍らに、やはり血を流しながら膝について息を切らしているカカシと、怪我1つないヤマトの姿があった。

「大丈夫か?!」

シカマルが大声で尋ねると、ヤマトは「ああ」と簡潔に答える。

「カカシ先輩が万華鏡写輪眼で直近の手裏剣を消してくれたあと、僕の本錠壁で周囲を固めたからね。おかげで先輩はチャクラを激しく消費したようだけど」

ヤマトはしゃがんでカカシに肩を貸し、立ち上がるのを手伝うと、辺りを見回した。

「盗賊は一名死亡か。自分たちが仕掛けた罠で死ぬとは、皮肉なものだね。こっちは全員無事なわけだし」

「しかし、ずいぶんと手間のかかる仕掛けをしたもんだな」

すると、ちょうどカカシたちのもとへ移動してきたシカマルが答える。

「襲撃されたらこれを稼動して、逃げる時間を稼ぐつもりだったんじゃないっすかね。あわよくば、これで敵を全滅させることもできるし。そこで死んでる奴が稼動させたんだと思います。ヤケクソでこっちを巻き添えにして死ぬつもりだったのかもしれない」

「しかも・・・毒も塗ってあったようだ・・・」

そう言ったカカシの腕はヤマトの肩から落ち、前のめりに倒れそうになる。ヤマトはすぐ腕を掴んで支えたが、カカシはまったく体に入らないようで、ヤマトの肩からぶら下がっているように見えた。砂の里の忍者4人もカカシと同様で、苦しげな表情で地面に横たわっている。シカマルはヤマトと反対側のカカシの腕を支えながら、いのとヒナタを呼んだ。

「ちょっと来てくれ。カカシ先生と、砂の忍者を頼む」

倒れている砂の忍者たちの横にそっとカカシを横たえようと、ヤマトとともにカンクロウのもとへ行く。

「とりあえず、倒れている者たちの治療はヒナタといのに任せて、僕たちは拘束した奴らを連れていこう」

ヤマトの言葉に、カンクロウが頷く。

「わかった」

そして毒にやられた仲間のもとへ行くと、

「まったく、情けないじゃん。でもまあ、無事でよかった。オレたちは先に行くから、治療が終わったらすぐ来いよ」

と声を掛けた。そしてヒナタといのに

「よろしく頼む」

と頭を下げる。いのは胸を叩いた。

「任せといて。このくらいの毒なら、日が沈むまでに全員解毒できるはず。でも、カカシ先生はチャクラの使いすぎで当分動けないから……」

するとヤマトはキバに声を掛けた。

「キバ、お前と赤丸は残れ。治療の間、念のため辺りを警戒する必要があるし、カカシ先輩の移動も助けてもらいたいからね」

「ああ、わかった」

「じゃ、後はよろしく」

そしてヤマトたちは拘束した盗賊を連れ、里へと向かった。

ヒビキと一緒に夕食を食べていたアキは、ヤマトたちが帰ってきたことを聞いた。しかしヒナタとカカシ、キバはまだだという。あと、まだ会ったことはないが、いんという女性も。

「カカシ先生と砂の忍者が毒にやられちゃったんだって。それで医療忍術を使える二人が残って治療しているらしいよ」

「毒？」

アキは心配そうに眉をひそめる。

「うん。でもそれほど強くないから、今日中には治療を終えて帰ってくるができるって。ただ、カカシ先生はチャクラの使いすぎで歩くことすら無理だから、キバさんの犬に乗って帰ってくるみたい」

「カカシさん、大丈夫なのかしら……」

アキはサロンで関わった人それぞれの記録を残してあるカルテの山から、カカシのものを探し出した。

「目を酷使すると倒れるって書いてあるわ。その対策として、アイピロウを定期的に渡していたよね。帰ってくるまでに新しいのを作って渡さないと。ヒビキくん、カカシさんが里に帰ってきたら教えてくれる？」

そういいながら、眼精疲労とチャクラの回復に役立つハーブの処方を考え始めた。

翌日の朝、ヒビキから連絡を受けたアキは病院へ向かった。

看護師が教えてくれた病室のドアをノックすると、ドアを開けたのはサクラだった。

「アキさん！ おはようございます。いらっしゃるのは、ヒビキから聞いてました」

中に入ると、カカシはベッドの上で寝ている。疲れきっているような表情に、胸が痛んだ。

「カカシさんはいかがですか？」

アキの問いに、サクラはニッコリする。

「大丈夫ですよ。瞳術を使うと、倒れることが多いんです。ゆっくり静養すれば、元通りになりますよ。ただ、術を使うたびに視力は落ちているようですが・・・」

アキはベッドに近づき、カカシの顔を覗き込んだ。

「よく寝ていますね。・・・このアイピロウ、乗せちゃっても大丈夫でしょうか？」

カバンからゆうべ作っておいたアイピロウを取り出しながら聞くと、サクラは頷いた。

「ええ。アキさんにもらったアイピロウは普段から愛用しているようですから、乗せてあげたほうが落ち着くかも」

アキはカカシの目の上にアイピロウを乗せ、今度は小袋を取り出した。

「これ・・・病院のお薬の邪魔にならないように処方してあるの
で、飲んでもらうよう伝えてもらえますか？ ハーブティは苦手と

カルテに書いてありましたが、眼精疲労とチャクラを回復する効果があるものを配合してあるので、薬だと思って頑張って飲んでほしいと」

そして、小袋をサイドボードの上に置いた。

サクラはガッツポーズをしながら、

「任せてください！ 押さえつけてでも飲ませますから」と笑った。

「それじゃ、私はこれで……。カカシさんがもう少し回復したら、またお見舞いに来ます」

「いっばいお見舞いに来てくださいね！」

妙に熱心なサクラの言葉に、アキは苦笑を返した。

「そ、そうですね……。お邪魔にならない程度に」

2日後の昼過ぎ、アキは再びカカシを見舞った。

ドアをノックして入ると、カカシはベッドの上からぼんやりとこちらを見た。

「アキさんですか……。先日は新しいアイピロウ、ありがとうございました」

額当てを付けていないカカシは、なんだか無防備に見える……。・とアキは思った。普段隠している片目の上に、縦に走る傷跡がくつきりと残っていて痛々しい。

「どうですか、調子は？」

アキが尋ねると、カカシはニッコリした。

「ハーブティのおかげでしょうか。いつもより回復が早いような気がします」

「そうですね……。・・・」

アキはサイドテーブルの上にあるピッチャーを見た。

「それは、サクラさんが作ってくれたんですか？」

カカシもピッチャーに目をやると、苦笑した。

「目を覚まして以来、なくなるたびにサクラは大量に補充するんで

すよ。どれだけ減ったかもチェックするんですから、まったく……」

「でも、目とチャクラの回復に効きますから。苦手でも、頑張って飲んでください。今日もまた持つてきましたから」

いたずらっぽく微笑むと、アキはカバンから小袋を取り出した。カカシはげんなりとした表情を浮かべる。

「……………ハーブティの効果は実感しているので……………」
頑張ります……………」

そういうと、小さくため息をついた。

「もう少し元気になったら、おいしいものをお持ちしますから。あと、これ……………」

アキはカバンから本を取り出した。

「うちにあるのは全部読んだって言ってましたよね。なので、新しいのを買ってきました。目を酷使しない程度に楽しんでください。表紙が恥ずかしいようでしたら、このブックカバーもどうぞ」
カカシの目が輝く。

「ありがとうございます！ 入院すると、楽しみは読書くらいなものですからねえ。助かります」

「じゃ、私はそろそろ帰るので、本をゆっくり楽しんでください」
そういつてアキが病室を去ると、カカシはさっそく嬉しそうにペー
ジをめくった。

カカシの見舞いから帰ったアキは、自分も読書をしようと本棚を物色した。その奥に厚表紙の書類のようなものがあつたので、表紙をめくってみる。すると、男性の顔写真とプロフィールが記載されていた。

「なんだろ、これ……？ サロンのカルテとは違うよね。私がついていてもいいもののかな」

すべてに目を通すうち、見合い写真のようなものと気づいた。

「私……お見合いをしようとしたのかな」

記憶のない今は見合いなどできるはずもなく、このまま個人情報の載っているこの書類を持っているのも気が引ける。そのため綱手に渡そうと考え、火影室を訪れた。

「これ、私の本棚にありました」

火影室に入ると、綱手のそばに控えていたシズネに見合い写真の束を渡す。

「ああ、これ……。お見合いのこと、思い出したんですか？」

棚に運びながら、シズネが尋ねた。

「いえ、何も。でも、個人情報載っていますし、私がこのまま持っているのかと思ひまして。こちらにお持ちするのが一番かな、と」

「……。そうですか。まあ、アキさんにはお見合いを断られたんですけどね」

シズネが苦笑すると、綱手はため息をついた。

「お前はいつもトラブルに巻き込まれるから、身を固めれば少しは平和に過ごせるかと思ひ、見合いを勧めたんだ。断られた直後に、今度は記憶喪失だ。本当に落ち着かない奴だな、お前は」

綱手の言葉に、アキは恐縮した。

「どうやらいろいろご迷惑をおかけしていたようですね。すみません」

「それはいいのだが、サロンはどうするつもりだ？」

アキは少し考え、ニツコリしながら答える。

「記憶がなくても、カルテに記録が残っていますから。再開に当たっては、特に問題はないと思います」

そして、少し寂しそうな表情を浮かべて付け加えた。

「ただ、その前に一度村へ墓参りに行かないと……。両親の墓さえ覚えていないんですから」

「そうか……。そうだな。しかし、1つだけ忠告しておこう」

綱手の厳しい表情にひるみながら、アキが尋ねる。

「な、なんでしょう？」

「一人では行くな。誰かと一緒に行け。これ以上トラブルに巻き込まれるのは見たくないからな。……。いや、任務は依頼しなくていい。誰か休日中の者を探すといいだろう」

「はぁ……。…」

困ったアキは、情けない表情を浮かべた。

火影室を出ると、アキはサクラを探した。

「……。…」というわけで、誰か一緒に村へ行ってくれる方はいないかなあと思って」

説明すると、サクラは小首をかしげて考え始めた。

「そうですね……。私たちならその日のうちに帰ってこれますが、アキさんの足だと泊りがけになるんですね。でも、泊まる宿がなくなったってこの間言ってたし。日帰りするとなると、アキさんに乗せて運べるような術を持っている忍がいいですよええ。思いつくのはキバと赤丸のコンビ、あとはサイかな。二人の予定を聞いて、あとで連絡します」

「よろしくお願いします」

その日の夕方、夕食を共にしようとしてやってきたヒビキは、サクラから伝言を頼まれていた。

「明後日ならサイさんが空いてるから、村に連れてってくれるって。鳥獣戯画で出した鳥で連れてってくれるらしいよ」

「へえ。サイさんって、そういう術を使うんだ」

アキが感心すると、ヒビキは拳を握って頷いた。

「うん。かなり特殊な術なんだ。墨汁で書いた動物がそのまま出てくるんだもんね。……オレもいつかすごい術を使えるように、頑張らないと」

アキも拳を握り、

「頑張れ！」

とヒビキを励ました。

「うん！ どうせなら、アキさんを村にちよちよいつと連れていけるような術がいいな。そしたらオレのスケジュールを聞けばいいだけだから、予定が空いてる誰かを探す手間がなくなるし」

アキは微笑んでヒビキの頭を撫でた。

「術の習得って、その人に合うものっていうのがあるんでしょ？」

私のことは気にしないで、ヒビキくんならではのすごい術を会得してちょうだい」

ヒビキは口を尖らせて答えた。

「でもさ、サイさんみたいな術って、戦闘でもすごく便利じゃない？ アキさんのことは置いといたとしても、やっぱりあんな術が使えるようになりたいな」

「じゃ、サイさんに相談してみたら？」

苦笑しながらアキが言うと、ヒビキはひるんだ。

「……………うん。サイさんって、話しにくいっていうか……………」

「そうかなー？ 気さくでいい人だと思うけど」
アキは首をかしげた。

翌日もカカシの見舞いに行こうと思い立ったアキは、カルテとにらめっこをしていた。

（甘いものは苦手？　じゃあ、お菓子は持っていけないわよね。ハーブティは昨日渡したぶんで十分だと思うし。……うーん、フットマッサージによると、腰痛の気配があるようだから、予防するオイルでも持っていこうかしら）

腰痛対策オイルを作成して病院を訪れると、ベッドで身を起こし、読書にふけているカカシは先日より元氣そうに見えた。

「やっぱり今回は回復が早いですよ。いつもなら、一週間は寝込んでいるんですから」

嬉しそうに告げるカカシに、お土産のオイルを渡しながらアキは申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「昨日は『おいしいものを』といいましたが、何が良いか思いつかなかったので。代わりにコレをお持ちしました」

カカシは首を横に振り、

「いえ。このオイル、以前もいただいたんですよ。ぎっくり腰になる恐れがあるからって。このオイルのおかげか、今も腰痛には悩まされることはありませんよ」

とニツコリ笑った。そしてオイルをサイドボードに乗せ、話を続ける。

「そういえば、明日はサイと一緒に村へ行くそうですね」

「ええ。両親の墓がどんなものなのか、覚えていませんし……。・。お墓参りをすれば、何か思いだせるかもしれませんね」

寂しそうなアキを見て、カカシは同情の表情を浮かべた。

「ま、焦らないで。……思い出さないほうがいいことだって、あるかもしれませんよ」

「それでも」

アキのまなざしが真剣なものになった。

「知っておかなくてはならないこともあるでしょう。特に、両親に関することは。私を守るために両親はわが身を犠牲にしました。二

人の最後の言葉は、覚えています。その後の詳細がわからないのは、気持ち悪くて仕方ありません」

力強いアキの言葉を聞きながら、カカシは心の中でため息をついた。（あのときも両親の遺体を確認しなくちゃって主張して、見たとたんに気絶したってのに……。変なところで頑固なんだから）

翌日の朝、アキが村へ行く支度をしていると、玄関からサイが入ってきた。

「あら？　門で待ち合わせじゃ……。」「サイはニツコリして答える。

「行く前にハーブティをご馳走になりたいと思ひまして」

「ああ、なるほど」

アキはサイのカルテを取り出し、好きなブレンドを確かめて保管室から持ってくる。ビンを受け取ったサイは、アキの荷物に目をやった。

「支度をしてください。ここの勝手は知っていますから、自分でやります」

「そう。じゃ、お願いします」

ヤカンに湯を沸かし、ハーブを入れたポットに注ぐと、サイはうつとりした表情で香りを嗅いだ。

「ああ、これ、これ。これが飲みたかったんです。以前いただいたブレンドがなくなっちゃって、寂しかったんですよ」

「病室に空いたガラス容器を置いていったのは、確かサイさんよね。ごめんなさい、気が回らなくて。今日は任務じゃないわけだから、何かお礼をと思っていたんだけど……。じゃあ、帰ってきたらこのブレンドをそっくり持っていって」

「実は村へ連れていく報酬として、ハーブティを狙っていたんです」サイの言葉に、アキは声を上げて笑った。

「じゃ、行きましょうか」

外へ出ると、サイは紙と筆を取り出した。

「鳥獣戯画っていう術？ 門から行かなくていいの？」

アキが尋ねると、サイは頷いた。

「ここから門はけっこう遠いし、どうせ飛んでいくんですから、わざわざあそこまで歩いていく必要はないでしょう」

そういうながら、紙にサラサラと筆を走らせる。背後から覗きこんだアキは、感嘆していった。

「台所に飾ってある絵といい、本当にサイさんって絵が上手ね」

あつという間に完成した鳥の絵が、紙から盛り上がって実体化する。アキは驚いて後ろへ下がった。

サイは鳥に飛び乗ると、アキに片手を差し出す。

「さ、乗ってください」

アキはサイの手をとり、鳥の上に乗る。

「僕の背中にしっかりとつかまっていてください」

鳥の背に馬乗りすると、サイの言葉に従って上着のすそをしっかり掴んだ。同時に、ふわりと鳥が飛び立ち、どんどん空へと向かっていく。

「・・・・・・・・こんなに高いところ、初めて！ うわー、すごい。

家が小さいー！ 里がどんどん離れてくー！」

アキの声は、緊張と恐怖に上ずっていた。洋服をつかんだ手が汗ばみ、力が入らなくなる。

「腰に手を回して、しっかりと抱きついたほうがいいですよ。手がすべって落ちたら大変ですから」

サイの言葉に、慌てて腰に手を回してしがみついた。するとサイは「も・・・・・・・・もう少し力を弱めてもらえますか？」

と苦しげに言う。アキは自分の腕を見て、渾身の力でサイの胴を締め上げていたことに気づいた。

「ごめんなさい！」

腕の力を抜くと、サイは苦笑いを浮かべた。

しばらくすると高さに慣れたアキは、下に広がる景色を楽しみ始め

た。

「村から走ってきたときは、なんて遠いんだろうって思ったけど、これならあつという間に着いちゃうわね」

風の音に負けないよう、大声で話しかけると、サイは振り返って答えた。

「そっか。そこまでの記憶しか残ってなかったんですね。・・・

・僕の場合、道は関係ないので、赤丸に乗るより早いと思いますよ。もうすぐ、アキさんの村だった場所が見えるはずですよ」

サイが前を向くと、アキはその肩越しに前方を確認した。しかし上からの風景では、今どこにいるのかもわからない。一生懸命、下界に目をこらしていると、鳥が下降を始めた。

「あそこです」

サイが指差した場所を見て、アキは呆然とした。

「・・・・・・・・あれってただの空き地じゃない？ 家がぜんぜんない・・・・・・・・」

言った瞬間、見覚えのある竹林が目に入った。その向こうにあるはずの自宅とハーブ畑はなく、代わりに草原が広がり、点々と墓のようなものも見える。

「・・・・・・・・そんな」

一年以上前にキザシの襲撃を受け、みんな亡くなったと聞いていたが、記憶をなくしているため、村の様子が分からなかった。しかしこうやってみると、記憶はなくともキザシがいかにもひどいことをしたのかは分かる。

悲しみが一気に胸に押し寄せ、手が震えた。

「・・・・・・・・大丈夫ですか？」

サイの言葉に小さく頷くと、地面に降り立った鳥の背から滑り降りる。続いてサイが飛び降りると、鳥はその場から消え、墨汁が地面にシミを作った。

アキは周囲をゆっくり見回す。その場に住んでいたことを示すものは、石造りの納屋だけだった。

納屋に向かうと、その横に二つの墓が並んでいるのに気づいた。その墓石には、父と母の名が刻んである。

「ご両親のお墓は、カカシさんが作ったそうですよ。村人の分は、キザシの件が落ち着いた頃に五代目が手配したと聞いています」サイの言葉を聴きながら、アキは墓石にそっと手を触れた。

「父さん、母さん……」
両目から涙がこぼれる。

「じゃ、ぼくはその辺をウロウロしていますから、落ち着いたら声をかけてください」

アキの震える背から目をそらし、サイは竹林のほうへとぶらぶら向かった。

サイの気配が消えると、アキは自宅から持ってきた花を供える。タオルを取り出し、涙を拭いたが、次から次へと流れてくるので、意味がない。

「里の人の話によると、私はキザシの件からずいぶん立ち直ったようだけど……父さんと母さん、そして村のみんなを一度に失った悲しみを、二度味わうことになるなんてね。1年以上前の話のようだけど、私、記憶がないから……。みんなと話したのは、ついこの間のことのように感じるの」

話すうちに悲しみが増幅し、喉が詰まって言葉が出なくなる。

アキはしばらく鳴咽を漏らしていたが、痛む胸に手を当てたとき、ペンダントが指に当たった。

取り出すと、太陽の光を反射してキラリと光る。その瞬間、村で気絶したときの光景が蘇った。

「あれは……」

心配そうにアキを覗き込んでいるヒナタ、そして沈痛な面持ちのカシ。

そして両親の焼け焦げた死体、仮死状態になったこと、キザシに殴られたこと、そして牢へ面会に行ったことまで、記憶が洪水のように一気にあふれ出す。その勢いにアキはめまいを感じ、その

まま気を失ってしまった。

e p 3 0 (前書き)

1年以上ぶりの更新となりました。当時読んでくださった方、
本当にすみません。。。

誰かがずっとアキの名を呼んでいる。最初は遠くに感じたが、意識が戻るにつれ、声は次第にはっきりと聞こえてきた。うつすらと目を開けると、サイが覗き込んでいる。

「大丈夫ですか？」

アキは起き上がろうとしたが、まためまいに襲われた。再び地面に頭を降ろし、目を閉じる。

「大丈夫ですか?! 頭痛ですか？」

いつも冷静沈着な雰囲気のカイが、珍しく慌てた様子を見せた。

「いえ………。ただのめまいです………」

いつの間に用意したのか、カイは濡れたタオルをアキの額に乗せた。

「ありがとう。すぐ気持ちいい………」

アキはタオルをまぶたの上まで広げ、手で押さえた。

「本当にめまいだけですか？ 少しでも頭が痛いのなら、我慢せずに教えてください」

顔にタオルを乗せたまま頷いたあと、アキは疲れたような声で話し出す。

「頭はちっとも痛くないの。ただ、ちよつとめまいが……。さつき、記憶がものすごい勢いで戻ってきてね。ところどころボンヤリとしているし、抜け落ちているものもあるようだけど………」

再び起き上がろうとしたアキの背に手を沿え、力を貸しながらカイは尋ねた。

「記憶が？ じゃあ、僕たちのことも思い出せましたか？」

「ええ。修司さんの件では、カイさんに助けてもらいましたよね」

カイは嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「それほど力にはなれませんでした。でも、思い出してくれて嬉しいな。……水、飲みますか？」

アキは小さく頷くと、サイが差し出した水筒を受け取って一口飲んだ。

「今日の墓参りはこの辺で終わりにしたらどうですか？ 僕なら短時間で来れるし、近々また連れてきてあげますよ。もう少し休んだら、里へ帰りましょう。頭痛はないとしても、早く医療班に診てもらったほうがいい」

周囲の墓を見回し、寂しそうな表情を浮かべるアキを見て、サイはさらに言葉を続ける。

「次の休みもアキさんのために空けておきますから。……あ、気にしないでください。次回の報酬は顔のマッサージということで」

アキは弱々しくはあるが笑顔を浮かべ、もう一口水を飲んだ。水筒を返し、差し伸べられたサイの手につかまって立ち上がる。

「じゃ、今日のところは帰りましょう」

帰り道、サイの背中にもたれながら、アキはボンヤリと取り戻した記憶を辿っていた。

アキを病院に送り届けたサイは、ついでにカカシの病室に寄るところにした。

中に入ると、ナルトとサクラがなにやら面白そうに笑っている。

「あ、もう帰ってきたの？」

サクラが尋ねると、サイは頷いた。

「うん。アキさんを病院に連れてこなくちゃいけなかったから」

「アキさん、また倒れたのか？ 何かあったのか？ お前が一緒だったってのに、何やってんだよ？」

ナルトが怒ったように言うと、サイは苦笑して答えた。

「何も起きてないよ。ただ、墓参りの途中で記憶が戻ったらしいんだけど、その勢いがすごかったせいで気を失ったんだ。頭痛はないけど、めまいがするっていったから、一応病院に連れてきたほうがいいと思っただけだよ」

すると、カカシが驚いたように目を見開いた。

「記憶が？ 全部戻ったのか？」

「ええ」

サイが頷くと、カカシは眉を寄せて再び尋ねる。

「ご両親の遺体を見たことも・・・・・・？」

「ほとんどの記憶は戻ったようです。抜け落ちているものもあるようですが、顔色が悪かったので、あまり詳しくは聞いていません」
「そうか・・・・・・」

カカシの鎮痛な面持ちを見て、サクラが病室のドアへ向かった。

「ちよっとアキさんの様子を見てきます」

「オレも行くってばよ！」

後に続こうとしたナルトを、サクラは押しとどめた。

「ダメ！ あんたはここで待ってて」

「えー、何でだよー」

口を尖らせるナルトに、サクラは苦笑を返した。

「脳の検査をしているだろうから、うるさいあんたは邪魔になるだけよ」

「えー！ 静かにしてるからさー」

ごねるナルトに、サイがにつこりと笑いかけた。

「ここで僕とおしゃべりしながら待っていようよ」

「げっ。お前と何をおしゃべりするんだってばよ」

嫌がるそぶりを見せながらも、ナルトは渋々戻った。

「詳しいことがわかったら教えてあげるから。良い子で待っててよね」

サクラはドアをくぐりながら片手を振った。

サクラが治療室に入っていくと、アキの診察はすでに終わり、ちよどベッドから降りようとしていたところだった。

「記憶が戻ったそうですね」

サクラが話しかけると、アキはニッコリした。

「ええ。二人であんみつを食べにいったこととか」

サクラは立ち上がるアキに手を貸しながら、

「で、診察の結果はどうでしたか？」

と担当の医療忍者に問いかける。

「大丈夫です。何の変化ありませんでした」

その言葉に、ホッと胸をなでおろす。

「よかったー。サイから話を聞いたときは、すごく心配したんですよ。今、ナルトとサイはカカシ先生の病室にいます。みんなも心配していますよ。もし良かったら、寄っていきませんか？」

「そうね。何も手土産はないけれど・・・」

「そんなのいいですよー。アキさんの元気な姿が一番のお土産ですって」

サクラはアキの腕を取り、ニコニコしながら治療室を出た。

記憶が戻ってからのアキは、薬の再開発やサロンの今後の方向性についての検討、今も牢で過ごしている京子に立ち直ってもらうためにはどうすればよいかなどで頭を悩ませていた。そんな日々の救いは、里の友人たちの存在だった。

ヒビキは任務が忙しくない日は必ず立ち寄り、たまにヤマトやヤオイ、ゲンタも一緒にやってきた。カカシやサクラ、ナルト、サイ、ヒナタ、キバと赤丸もたまに顔を出し、何気ない会話を交わしている。彼らの笑顔を見ることが、アキの一番の清涼剤となっていた。

その日は薬に関するミーティングが行われ、帰ろうとしたアキにシカマルが声を掛けてきた。

「先日いただいた夜泣き対策の匂い袋、効果があったと喜んでいました。慣れない子育てでバタバタしているようなので、今後何かと相談するかもしれません」

アキはニツコリした。

「お役に立てて嬉しいです。私は子育ての経験はありませんし、生まれ育った村はお年寄りばかりで、子育てしている様子を見たことさえありません。知識を提供するくらいで、実体験を伴ったアドバイスはできませんが、それでもよかったです」

そして、なにかを思い出したように両手を合わせた。

「そういえば、お父様はもう帰ったんですか？ この間のミーティングで、奥様と一緒にサロンにいらっしゃるという話が出ていたと思うんですが、そのことをお話ししようと思ったのに……」

すると、シカマルは苦笑した。

「ああ、オヤジは何か用事があるとかで、急いで帰りました。マッサージの件は、アキさんが記憶を失ってからそのまま忘れてしまったかもしれないと考えて、遠慮しているようです」

「しっかり覚えていますから、いつでもいらしてくださいと伝えられますか？」

アキの言葉に、シカマルは小さく頭を振った。

「いや、両親のことは気にしないでください。サロンを再開したら、客として行かせますから」

「しっかりした息子さんを持って、ご両親も鼻が高いでしょうね」
アキがクスクス笑うと、シカマルは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「そんなことないっすよ。おふくろは毎日がみがみうるさいし、オヤジはオヤジで今も小僧扱いするし」

「そうかなあ。葉の話をしているときは、対等に話しているように見えるけど」

「気のせいっすよ」

「まあ、親っていうのはいつまでも子供に何かを言いたがるものだから、仕方ないわよ。私だって、両親や村人たちには子供扱いされてたんだし。言ってくれるうちが花なのかもよ」

シカマルは苦笑した。

「わかつてはいるんですけどね。うざいのにには変わらないです」

「気持ちわかるわ。とりあえず、ご両親には覚えていることを伝えてね」

アキは励ますようにシカマルの肩を叩き、その場を後にした。

その日の夕方、シカマルの両親、シカクとヨシノと一緒にサロンを訪れた。

「ようこそ！ よかった。シカマルさん、ちゃんと伝えてくれたんですね」

ヨシノが満面の笑顔で答える。

「ええ。でも、今日はマッサージではなくて、ご挨拶と予約に伺ったんです」

「そうですか。では、こちらへどうぞ」

二人を台所のテーブルへ案内すると、アキはスケジュール表を取り出した。

「しばらくサロンは再開しないので、薬の再開発に関わっているとき以外は大丈夫ですよ。いつ頃がいいですか？」

「・・・・・・サロンの再開はまだ考えていないんですか？」

シカクの問いに、アキは沈んだ表情で小さく頷いた。

「ええ。いろいろあったので・・・・・・。今後、どのように施術と関わっていくか、私の脳と技術は知識をどこまで活用できるかを検討し、メニューを確定してから再開しようと思ってるんです。じゃないと、またトラブルを起こしちゃかなと思って。でも、なかなかまとまらなくて・・・・・・」

「難しく考えず、簡単なメニューだけでいいんじゃないですか？

フットマッサージとフェイスマッサージが大好きで、サロンの再開を心待ちにしている人、たくさんいるんですよ。わたしだってその評判を聞いて、フェイスマッサージをしてもらいたいってうちの人に言ったんですから」

ヨシノの言葉に、アキの表情が明るくなった。

「そうなんですか？」

「ええ。でも、早くサロンを再開してほしいっていうと、アキさんにプレッシャーかけちゃうかなってみんな遠慮してるみたいですよ。アキさんの周囲で起きたことや、体調のことはみんな知っています。だから、『どこまでできるか』は考えず、これまでやってきたなかで、負担がないと思われるメニューだけ提供すればいいのだと思いますよ」

ヨシノの言葉を聴きながら頷いていたシカクも、口を開いた。

「アキさんは、無理をしてまで人の役に立とうと考えがちですよ。あなたを刺した京子のこと、いまだ気にかけているのでしょうか。視野を広く保つのは大事だと思いますが、あなたは一人だ。できることには限りがある。それなのにムリをして体を壊しては、誰の役に立ちようもないですしね。もっと気を楽しんでもいいのでは？」

サロンを再開するだけで、大喜びする人たちは大勢います。その人たちが大切にすればいいのではないですか？」

アキは大きくため息をつき、うつむいた。

「そうかもしれないね。人のためにも思っても、相手のためにならなかったり、かえって傷つける結果を招くこともあると学びましたから」

それから顔を上げると、ニッコリと微笑んだ。

「お二人のおかげで、なんだか気が楽になりました。サロンのことは難しく考えず、できる範囲で楽しく営業することを前提に考えたいと思います。薬の再開発も頑張らなくてはいけませんね。・・・それじゃ、サロン再開のお客様第一号は、シカクさんとヨシノさんをお願いしようかしら。再開の日が決まったらお知らせするので、ぜひ来てくださいね」

アキの言葉に、シカクは力強く頷いた。

「もちろん！ 今日差し出がましいことを言っちゃい、すみませんでした。でも、心配している声をよく耳にするものですから・・・では、サロンの再開を楽しみにしています」

二人が帰ると、アキはスケジュール表を開いた。

「来週は満月かぁ。朔夜草を採取して、乾燥させたら再開ってことにしようかな。じゃ、再来週の月曜日はどうかなぁ・・・」

メニユー表も新しく作成しないと！」

京子のことかチラリと頭の中をかすめたが、シカクとヨシノの忠告を思い返し、まずはサロンのことを考えることにした。

薬の再開発については、当初の成分を大きく見直しているため、相変わらず原料の検討に留まっている。現段階では、メンバーがそれぞれ資料とにらめっこをしている状態だ。週に一度のミーティングを除けば、シカマルがときどき植物原料の確認に来るだけで、今はそれほど忙しくはなかった。

先週のミーティングから5日後。その日の夜は満月の予定だった。朝からよく晴れており、今夜も朔夜草は無事に採れそうだと、空を見上げて笑顔になる。

ふと、先月の満月の晩、記憶をなくしたことを思い出した。責任を感じてずいぶん落ち込んでいたヒビキも、アキが記憶を取り戻したことでずいぶん吹っ切れたようだ。修行の成果も出ており、やっとCランクの任務を任されるようになった。その任務で、ゆうべから里の外へ出かけている。

出かける前に一緒に夕飯を食べようと訪れたヒビキは、怪我を心配するアキに、

「かすり傷ひとつ負わずに帰ってくるからさ。何かいい植物を見つけたら、おみやげに持って帰るよ」

と言いながら、誇らしげな笑顔を見せた。アキはお守りにと、朔夜草や魔除けとして使われるハーブ類を詰めた袋を手渡す。

「私を安心させるためと思って、持っていて」

ヒビキは恥ずかしげな笑みを浮かべながらお守りを受け取り、カバンにしまった。

「アキさんこそお守りを持っていてほしいな。オレよりトラブルに巻き込まれる確立が高いんだから」

そういい残し、ヒビキはアキに手を振りながら去っていった。

(ヒビキくん、元気にやっってるかな)

これまでさまざまな出来事に巻き込まれたせいかな、以前より心配性になっている。小さくため息をついて立ち上がると、日が傾き始めた空を見上げた。

（先月採った朔夜草は、あのできごとでほとんどダメにしちゃったし、今夜は少し多めに採りたいけど・・・。。あまり欲張らないほうがいいかな。今回はカゴはひとつにしておこうっと）

その日の予定を組み立て、まずは畑の手入れをしようとアキは外へ向った。

夜もほとんど雲がなく、丸くて大きな月が輝いていた。

カゴを持って出かけようとしたとき、畑の向こうにカカシの姿が見えた。大きく手を振り、挨拶をする。

カカシは片手を上げて答えた。

「どうしたんですか？　これから朔夜草を取りに行くんです。急ぎの用なら・・・。」

近づいてきたカカシに、アキが言う。

「いえ。今夜は満月なので、朔夜草を採りに行くのかなと思いついてね。お手伝いしようかと」

「そんな・・・。もしかして、心配して来てくれたんですか？　いくら私でも、毎月何か起きるはずはないですよ」

苦笑するアキの手からカゴを受け取ると、カカシはそのまま慰霊碑の方向へと歩き始める。

「ま、いいじゃないですか。夜間の女性の一人歩きは危ないです。今夜は任務がないし、オビトにも挨拶に行きたいし。・・・・とところで、今回はカゴはひとつでいいんですか？」

振り返って尋ねたカカシに、アキは照れ笑いを返した。

「ええ。ふたつも持つと、歩きにくくって。今回は欲張らないことにしたんです」

「オレが持ちますから。ふたつでも大丈夫ですよ」

アキは嬉しそうに家の中へ戻り、もう1つカゴを抱えて戻ってき

た。

「お言葉に甘えて。でも、ひとつは自分で持ちます」

「でも……」

カカシはアキの姿を見て嘖き出した。

「抱えたら抱えたで、視界がさえぎられて歩きにくそうですね。また転ぶといけないので、オレが持ちますよ」

「でもいつもひとりで持ってますから、大丈夫ですよ」

カカシは断ろうとするアキの言葉をさえぎる。

「先月、アキさんを一人で家に帰した償いだと思ってください」

アキは驚いて目を見開いた。

「償い？ カカシさんが責任を感じることでなんて、何もないのに」

「いえ。一人で帰すべきじゃなかった。あれからどんなに後悔したとか」

アキは差し出されたカカシの手をボンヤリと眺めたあと、苦笑しながらカゴを渡した。

「それでカカシさんの気持ちが晴れるなら……。お願いします」

その後しばらく二人は無言で歩いていたが、慰霊碑が見えてきたあたりで朔夜草の光が地面を覆い始めると、カカシが小さくつぶやいた。

「この光景は何度見ても、感動しますね」

その横に立ち、アキが答える。

「ええ。朔夜草を見るたび、草野家の子でよかったと思います」

アキは慰霊碑の前に移動すると、

「こんばんは」

と挨拶をし、朔夜草を一輪摘んで慰霊碑に供えた。そのままその場でしゃがみこみ、収穫を始める。

カカシもアキにならい、少し離れた場所でしゃがみこんだ。しばらく黙々と作業を続けていたが、ふと以前の声が聞こえてきた。

『盗賊騒ぎも一段落か』

「ああ」

声に慣れたカカシは驚くことなく、返事をする。

『で、今夜は何してるんだ？』

「見りゃわかるだろ。朔夜草を摘むのを手伝っているんだよ」

『なんだかいんな事件に巻き込まれているみたいだし、そばにいないと心配だよなあ』

声にからかうような調子がにじんだ。

「ま、つねに一緒にいるわけにはいかないけどな。時間があるときは、できるだけ見ていてあげないと。これ以上怪我をさせるわけにはいかないし」

カカシのつぶやきが聞こえたのか、アキが顔を上げて尋ねた。

「どうかしましたか？」

カカシは苦笑しながら頭を振った。

「いや、ただの独り言ですから。気にしないでください」

「はあ……」

アキはいぶかしげな表情を浮かべたが、すぐ朔夜草に目を移した。『なあ。守ってあげたいっていうのもあるだろうけど、実は自分のためでもあるんだろ？ 一緒にいると平和な気持ちになるとか、安心感が得られるとか？ だったら、近くに引越しちゃえばいいじゃん。いやいっそ、一緒に暮らしちゃえば』

「は？ 何言ってるんだ、お前？」

思わず大声で答えたカカシは、心配そうな表情でこちらに向かってくるアキに気づいた。

「大丈夫ですか？ どこか具合でも悪いんでしょうか？ 私は大丈夫ですから、今日は帰って休んだほうがいいのでは……」
眉をひそめながらカカシの顔を覗き込んだアキの顔が、満月と重なった。朔夜草の甘い香りが、少し強くなったようにも感じる。

その瞬間カカシは軽いめまいを覚え、無意識につぶやいていた。

「一緒に暮らしませんか？」

アキの目が大きく見開かれ、その場に固まった。数秒後、手に持っていたかごが地面に落ちる。

カカシも自分の言葉に驚き、慌てて手を振りながら弁解する。

「あ、いや。そのほうが、安全かなって思っただけで。アキさんの家の周辺は寂しいし、近所に引っ越したほうがいいんじゃないかって話が……。それでなんとなく、一緒に暮らしませんかになっちゃって……」

なんだか苦しい言い訳だというのは自分でも分かっていたので、言葉がだんだん尻すぼみになる。

「一緒に暮らすといっても……一人暮らし用の家だし、寝室は1つしかないし……」

アキは混乱しているようで、目を見開いたまま一生懸命考えをまとめようとしている。

すると、カカシの頭の中に再び声が響いた。

『あーあ。お前って、ほんと不器用だな。素直に気持ちを伝えられないところは、相変わらずだなあ。せつかくオレが手助けしてやったのに』

カカシはアキが驚かないよう、今度は声に出さずに答えた。

『お前か。お前が言わせたのか。余計なことをしやがって』

『そうかなあ。心の奥で望んでいたから、無意識に言っちゃったんじゃないの？ ……オレが死ぬとき、最後に考えたのはリンに告白できなかったってことだった。自分の気持ちに素直にならないと、後悔するぞ』

その言葉に、カカシの表情が沈んだ。

『だから、今はリンも一緒だから楽しいって言っただろ？ そんな顔するなって。ただ、お前には、生きているうちに幸せになっほしいだけだ』

一方、黙ったまま渋い表情から鎮痛な面持ちへと表情がコロコロ変わるカカシの様子を見ているうち、アキは自分を取り戻し、また心配になってきた。

「カカシさん？ 熱でもあるんですか？ なんかいつもと様子が違いますよ。ほんと、今日は帰って休んだほうが……」

アキの言葉に、カカシがハッと顔を上げた。

「すみません。オレは大丈夫ですから、とりあえず、このまま朔夜草を集めましょう。さっきのは気にしないでください。言った自分が一番驚いているくらいですから」

「そうですか？　そういうことなら・・・」

アキは納得していないようだったが、それ以上追求することはなかった。もう一度心配そうなまなざしを向けてから、元の場所へ戻ってしゃがみこむ。

声はもう聞こえない。カカシは心の中で大きなため息をついたあと、ひたすら朔夜草の採集に打ち込んだ。その後は二人とも何かに取り付かれたかのように朔夜草を摘み続けたため、1時間ほどすると2つのカゴは一杯になった。

「予想以上に早く終わることができました。カカシさんが手伝ってくれたおかげです。ありがとうございます。じゃ、そろそろ帰りましょうか？」

カカシは頷くと、立ち上がって膝についた土をはらった。

「カゴをください。そんな様子じゃ、家まで倍以上の時間がかかりそうですから」

両手にカゴをひとつずつ持ち、カカシは先に立って歩き出す。その背中を眺めながら、アキはぼんやりと先ほどのことを思い出していた。

（さっきはびっくりしたなあ……。そんなに危なっかしいかな、私。確かに何かと事件に巻き込まれているけど、そこまで心配かけてるのかな……）

そして、元夫・キザシの面会に牢を訪れたときのことを思い出す。（あのときはカカシさんがいてくれたおかげで、気持ちを強く保てたような気がする）

それに、趣味も一緒だから、話していると楽しい。

以前カカシにもらった両親の形見代わりのペンダントを握り締めると、なんとなく胸が苦しくなった。

「……カカシさん？」

アキが声を掛けると、カカシは立ち止まって振り返る。

「どうかしましたか？」

「さっきのお話なんですけど……」

カカシは苦笑いを浮かべた。

「いや、あれは気にしないでください」

「……近所に住んでくれれば、すごく嬉しいかなーなんて」

「は？」

アキは恥ずかしそうに微笑んだ。

「里から離れているから、やっぱりちょっと寂しくて。ヒビキくんも最近忙しいから、あまりきてくれないし。カカシさんが側にいてくれると、すごく心強いし。……もしご迷惑じゃなかったら、ですけど」

「はあ……」

戸惑うカカシを見て、アキの顔が真っ赤に染まった。

「ご、ごめんなさい！ 私ったら、勝手に話を広げちゃって……。いいんです、気にしないでください」

そして猛烈な勢いで歩き出し、カカシを追い越していった。

（……え？）

まるで競歩のようにスピードを上げて歩き去るアキの後姿は、ぐんぐん遠ざかっていく。

カカシは慌てて後を追った。

戸口でカカシからカゴを受け取ったアキは、丁重に礼を述べたあと、そそくさと家の中へ入っていった。

（珍しいな。いつもなら、『お茶でも飲んでいきますか？』って言うのに）

家に背を向けて歩き出すと、再び玄関のドアが開き、アキが駆け寄ってきた。

「カカシさん！ これ、持って行ってください」

カカシは差し出された袋を受け取り、匂いを嗅いだ。

「こ、これは……もしかして……」

ひるむカカシに、アキはニツコリ笑いかけた。

「ええ。入院時にお渡しした、眼精疲労に効果のあるハーブティーです。日頃から飲むといいですよ。アイスティーにすれば、ずいぶん飲みやすくなると思います。薬だと思って、冷蔵庫に常備しておいてくださいね」

「いや、その……ありがとうございます」

「それじゃ、お休みなさい。今日は本当にありがとうございます
た」

軽く頭を下げ、アキは家の中へ戻った。

（ハーブティはあまり好きじゃないんだけどなあ。ま、確かに目の調子は良くなるから、頑張って飲んでみるとするか）

そして周囲を見回す。辺りを照らすのは、アキの家からこぼれる明かりと月の光だけ。畑は月に照らされて明るいが、森に入ると真っ暗闇だ。

（今夜は満月だからまだいいけど、この辺はやっぱり女性の一人暮らしは怖いよなあ……）

ぼんやりとそんなことを考えながら、カカシはのんびりと自宅に向かった。

一方、アキは周囲に心配をかけすぎないためにはどうすればいいのか、摘んだ朔夜草を片付けながら考えていた。

翌日、アキはキバのもとへ向かった。

「お、アキさん！ うちに来るなんて、珍しいな。どうした？」

「キバさんの一族って、犬に詳しいでしょ？ お姉さんは獣医さんだし……。もし里親を探しているワンちゃんの情報があったら、教えてほしいなと思って」

「え？ アキさん、犬を飼いたいのか？」

アキは頷いた。

「ええ。私が住んでいる場所って、夜になると真っ暗だし。何かあって助けを呼ぼうにも、近所に住んでいる人はいないし。いろんな人に心配かけてるみたいだしね。赤丸みたいなワンちゃんがいれば、心強いかな」と思ったの。あ、でも、別に特別な能力とかはなくていいのよ。普通のワンちゃん、お友達になれそうな子なら。

……前からワンちゃんを飼って見たかったのよねえ」

「なら、聞いてみるけど……。アキさん、犬は飼ったことないんだよね？　じゃ、ある程度躰が終わっている方がいいのかな」

「ううん！　やっぱり子犬から育ててみたいな！」

目を輝かせて夢見るような表情を浮かべるアキを見て、キバは少し心配になった。

「大丈夫かよ……。犬ってけっこう上下関係に厳しいぜ？　最初に舐められちゃうと、後が大変なんだけどなあ……。ま、いいか。飼い始めたら、時々訓練に行つてやるよ。じゃ、見つかったら連絡するから」

「ありがとうございます」

弾むような足取りで去っていくアキを見て、（散歩で犬に引きずられているアキさんを簡単に想像できるな……）と思い、キバは小さくため息をついた。

キバの家から帰ったアキは、ゆうべ集めた朔夜草の加工に取り掛かった。

小分けにして根元を紐でしばり、保管室のなかでも風通しがよく、直射日光の当たらない場所へ吊るしていく。見た目は悪いが、部屋の中は朔夜草の香りが満ち、心が穏やかになる。この香りに包まれてずっと保管室で過ごしたい気分になったが、3日後には薬に関するミーティング、4日後にはサロンの再開が控えており、その準備に取り掛からなくてはいけない。朔夜草の香りを胸いっぱい吸い込み、名残惜しげな視線を投げて保管室を後にした。そのとき、建物全体が大きく揺れた。

「地震かしら………?」

窓から外を覗くと、家の横にヤマトとサクラが並んで立っている。

「二人とも、どうしたんですか? 今、地震がありましたよね?」

そういうながら外に出たアキは、目の前の光景に啞然とした。アキの家のすぐ隣に、同じような建物が建っている。

「こ、これ………。何ですか?」

すると、サクラがニッコリ笑いながら答えた。

「カカシ先生のおうちでーす」

ヤマトは軽く会釈すると、苦笑いした。

「アキさんの近所に住むことにしたから、近所に家を建ててくれてカカシ先輩に頼まれたんです。そしたら、サクラと一緒に来ると言い出しましてね。それで、ここがいいって言い出して……。一応、アキさんに確認しようと思って窓から覗いたんですが、姿が見えなくて」

「ああ、保管室で作業をしていたんです。というか、これは近所というより……」

と言いながら、アキは1メートルと離れていない両家の間を眺めた。

すると、サクラがアキの腕に抱きつき、ニヤリと笑う。

「いいじゃないですか。これなら何かあっても、すぐ駆けつけてもらえますよ。修司みたいに迫ろうとする奴がいても、サロンの窓越しに隣家のカカシ先生がウロウロしている姿が見えれば、変なことはいらないだろうし」

そのとき、

「なんだよ、ヤマト。オレは近所っていったのであって、家をくつつけろとは言っていないぞ」

と声がした。

見ると、困った表情を浮かべたカカシが畑を抜けてやってくるころだった。

「僕は森付近に建てようと思ってたんですけどね、サクラがここがいいって主張したんですよ。確かに修司みたいなのがいたときは、隣のほうがいいなあと思いましたが」

「えー？ それにしたって、これじゃ近所というより、ほとんど家がつながってるようなものじゃない？」

「細かいことは気にしない！ いいじゃないですか。これなら本の貸し借りは、わざわざ歩いて移動しなくても窓越しで済みますよ」サクラが口を挟むと、カカシはゲンナリとした。

「オレは老人じゃないんだから、移動距離を気にしてもらうほど足腰は弱ってないよ」

「もう建てちゃったし、いいじゃないですか。任務から帰ってきたばかりで疲れているし、建て直すなんて嫌ですよ。間取りはアキさんの家と一緒にですが、先輩はサロンを開くわけじゃないので、部屋数に余裕がありますね。これならアキさんのマッサージのあと、先輩の家で休めるかも」

ヤマトが嬉しそうに話すと、カカシは真顔になった。

「なにそれ？ オレんちに泊まるってこと？ やだよ」

「えー？ 家をわざわざ建ててあげたのに」

「その代わり、ヒビキたちの指導を手伝ってあげるって言ったじ

やない」

そのとき、畑の向こうから

「おーい！」

と手を振りながらナルトが駆けてきた。

「なんだよ、もう建て終わっちゃったのかー。ふーん。これがカシ先生の新しい家ね。……決めた！ 今日はこちらに泊まろうっと」
そういいながら、ナルトは家の中へ入っていく。

「おい、ナルト！ ちょっと待て。引越しはまだ終わってないし。なんで急に泊まるんだよ」

カカシが引きとめようとすると、ナルトは満面の笑みを浮かべた。

「だって、新しい家ってウキウキするじゃん？ 引越し祝いってことでさ、今日はカカシ先生の新居でパーティしようぜ？」

するとサクラも顔を輝かせ、手を叩いた。

「いいね！ じゃ、夕方から時間が空いてる人を探して誘ってみる。ヒナタと、いのと、そうねえ、シカマルたちにも声掛けてみようっと」

「お前たち……。家主の意見も聞かず、勝手に計画立てないでくれる？」

カカシが文句を言うと、ナルトは無邪気に笑いながら親指を立てる。

「大丈夫、大丈夫！ オレとサクラちゃんに任せておけばよー！」

その横でずっと話を聞いていたアキが、急に噴き出した。

「いいじゃないですか、カカシさん。すごく楽しそう。私も隣に住む者として、引越しパーティのお手伝いをしますよ」

カカシはため息をつき、観念したように空を見上げた。

サクラとナルトが慌しく去っていくのを見送りながら、ヤマトが言った。

「じゃ、僕の班も今日は休みだから、ヒビキたちを誘ってきます

よ。ついでに午後、パーティの前にマッサージをお願いしてもいいですか？ 初のＣランク任務で３人が張り切りすぎてしまつて、いろいろ大変だったんですよ。もうヘトヘトで……」

「サロンはまだ再開してないぞ？ それにパーティの前につて。お前も来るつもりなのか？」

「もちろんじゃないですか。僕が家を建てたんですから、参加する権利はあると思いますよ」

「来てもいいけど、泊めないからな。ナルトも泊まるとか言つてたけど、帰すつもりだし。そもそも家が建っただけで、引越し作業はこれからだしな」

「えー？ 先輩の荷物なんて、たいした量じゃないじゃないですか。数時間もあれば終わっちゃいますつて」

ヤマトの言葉に、カカシの目がキラリと光った。

「そうか。そういえばお前、今日は休みだつて言つてたよなあ？ ヒビキたちの修行の一環として、引越しの手伝いしない？」

カカシの言葉におののいた様子のヤマトは、一步後ろに下がつて手を振った。

「ダメですよ。今朝帰ってきたばかりなんですよ。３人ともかなり疲れていましたから、休ませてあげないと。僕だつて、火影室で先輩と会わなければ、今ごろ家で休んでいましたよ」

「そういうときこそ、チームワークを磨くチャンスなんだけどな。体力が極限を迎えている状態で、いかに作業の無駄を省き、お互いに協力しあつて効率よく引越しを終えるか。これつて任務でも大事な要素だよな。……ま、いいさ。元暗部のお前がそんなに甘くなつていたとは……。そういえば、五代目もヤマトの指導は甘いつて言つてたような……」

呆れたようなカカシのため息を聞いて、ヤマトは少しムツとした。「別に甘くなんてないですよ！ ここんところ、修行もハードだったし……。いいですよ、手伝いますよ。今からあいつらを起こ

してきますから!」

「いや、いいよ。お前の指導方針に、オレが口出しするわけには……」

「もういいです。手伝うことに決めましたから。じゃ、先輩の部屋に30分後に集合させます。先輩も遅れないで来てくださいよ!」
憤然とした足取りで歩き出したヤマトの後姿を眺めながら、カカシはニヤリと笑った。

「あ、ヤマトさん、ヒビキくんたち、怪我はなかったんですか?」
振り返ったヤマトは、ニツコリ笑った。

「ええ。ぴんぴんしてますよ。アキさんのお守りが効いたのかもしれませんね。ヒビキ、時々取り出しては嬉しそうに眺めてましたよ。今夜、ここを訪れて任務の報告をするつもりだって言っていました」

「良かった。じゃ、疲れているだろうけど、引越しの手伝いも頑張れて伝えてくださいね。マッサージの用意をしておくので、作業が終わったら声をかけてください」

マッサージの言葉に、ヤマトの表情が明るくなった。

「ありがとうございます! では、また後ほど……」

そして、今度は足取り軽く去っていった。

ヤマトの姿が見えなくなると、カカシは新居のドアを開けた。

「確かに、アキさんの家と同じ間取りだ。こんなに部屋数があってもなあ。今まで通り、ワンルームで十分なんだけど」

カカシの横から中を覗いたアキは、

「そうですか? 私が保管室として使っているところは書庫にして、サロンに使っている部屋はご自身の寝室に、私の寝室の部分は客用寝室として使えばいいんじゃないですか?」
と提案した。

「ううん……。その『客用寝室』ってのはいらないんですよ。別の里から客が来ることはないし、ナルトたちは泊まるほど遠い場所に住んでるわけじゃないんだし」

「そうですか？ ヒビキくんが夕飯を食べたあと、修行の疲れで眠そうにしていることがあるんですよ。泊まっていくように言うんですけど、『独身のアキさんの家に泊まるわけには！』って、よいな気を使うんですよ。ほとんど親子といってもいいような年齢差なのに。そういうのが恥ずかしい年頃なんでしょうか」

そして、チラリとカカシに目を向ける。

「なので、時々ヒビキくんに寢室を貸してもらえると嬉しいかも。もちろん、お礼はきちんとしてますから！」

「ええー？　なんか、一人で静かに過ごす時間が大幅に減っていきそうな」

不安げな表情を浮かべるカカシをその場に残し、アキは自宅へ向かった。

「にぎやかなほうが楽しいですし、余計なことを考えずに済みますよ。じゃ、私は自分の仕事に戻ります。早く片付けて、パーティの準備をしなくちゃ」

自宅に戻ったアキは、玄関の戸に寄りかかり、動悸の激しい胸に手を置いた。

まさか本当にカカシが引っ越してくるとは。

（私が提案したこととはいえ……。こんなに近いと、なんか緊張するな）

さっきは隣に突然家が建った驚きで感じなかったが、カカシと二人きりになったとき、先日のことを思い出して、妙に意識してしまっていた。こんな気持ちは初めてで、戸惑ってしまふ。

そのままボーっと立ち尽くしていたら、玄関をノックする振動が背中に伝わり、アキはビクツと飛び上がった。

扉を開けると、カカシが小首を傾げて立っている。

「大丈夫ですか？　なんか顔が赤いですよ。熱でもあるんですか？」

「い、いえいえ！　大丈夫です。なんでもないです」

激しく否定するアキに、カカシはいぶかしげな表情を浮かべる。

「なら、いいんですが……。ヤマトたちをあまり待たせると、うるさそうですね。オレは一度部屋に戻ります。もし必要なものがあれば、ついでに買ってきますが？」

「いえ、大丈夫です。パーティに必要なものについては、サクラさんとお話しますから。じゃ、引越し頑張ってくださいね！」

話しながらどんどん上気していくアキの顔を眺め、カカシは再び尋ねた。

「本当に大丈夫ですか？ なんならナルトたちにパーティは中止にしてくれと……」

「そんな！ 大丈夫ですから。パーティは私も楽しみにしています。こっちは気にせず、ヤマトさんたちのもとへ行ってください。しばらくしたら、普通に帰ると思うので」

動悸が収まらない、というより、どんどん激しくなっていくので、早くカカシが部屋へ戻ってくればいいのに、とアキは願った。

その気持ちが伝わったのか、カカシは頷き、玄関から離れた。

「わかりました。じゃ、また後ほど」

カカシの姿が畑の向こうに消えると、アキはホッと胸をなでおろした。

（あー、びっくりした……。なんであんなに緊張したんだろう？）

そして胸元のペンダントを持ち上げ、眺めながら思う。

（なんでこんなにドキドキするんだろう？）

ペンダントが太陽の光を反射し、キラリと輝く。

（父さん、母さん、それに茂三じいちゃん。また夢に出てきてくれたら、相談したいことがあるんだけどなあ。といっても、今回は生死に関わるんじゃないし、いくらなんでも無理よねえ）

そして小さくため息をつく、ペンダントを胸元に下ろし、両手で頬を叩いた。

「さて、仕事、仕事。サクラさんたちが戻ってくる前に、今日の

ノルマを終わらせないと！」

午後三時過ぎ、サクラとヒナタが両手に袋を提げてやってきた。

「どうやら今回は10人以上集まりそうですよ。人数分の食事を私たちだけで作るのは大変そうだから、パーティメニューを適当に買ってきました」

二人はアキの家に入ると、テーブルの上に袋を置く。チキンなどのおいしそうな香りが、アキの胃袋を刺激した。

「なんかお腹空いちゃったなあ。みんなが集まるまでまだ時間はあるから、オヤツでも食べましょうか？」

そういいながらアキが戸棚からクッキーの入った缶を取り出すと、サクラは手を叩いて喜んだ。

「わーい、いただきます！」

3人はテーブルを囲み、嬉々としてクッキーをつまみ始めた。

「そういえば、アキさんとお会いするのは記憶を失くして以来ですね。記憶が戻ったと聞いて、安心しました。すぐに伺えなくてごめんなさい」

ヒナタがすまなそうに言うと、アキは手を振りながら笑った。

「いいの、いいの。ヒナタさんはあれ以来忙しかったみたいだし、私はこうして元に戻ったんだし。気にしないでね。そんなことより、このクッキー、おいしいわね」

「ほんと！ これ、すごいおいしい！」

サクラは次から次へと口へ放り込んでいく。

オヤツを少しつまむつもりが、結局は3人でぜんぶ平らげてしまった。

「お腹がいっぱいになっちゃった。これじゃ、せっかく買ってきたお料理が食べられないかも……」

お腹をさすりながらヒナタが言ったとき、外から騒がしい音が聞こえてきた。

「おい、ゲンタ！ しっかり支えてくれよー」

「なんだよ、お前がもう少し持ち上げればいいんだろ？ バラン
ス悪いんだよ」

「身長差があるんだから、仕方ないだろ！」

「たった5センチじゃん」

言い合いの後、ガタンと音がした。

「あっ、バカ！ だからもう少し持ち上げろって……」

「持ち直す前に進むからだろ！」

何事かと3人が窓から覗くと、ベッドをはさんでヒビキとゲンタ
がにらみ合っていた。

「どうしたの？」

アキが玄関から声をかけると、二人とも頬を膨らませて「こいつ
が！」と言いながら、お互いを指指す。

「あらあら……でも、すごいわね。ここまで二人で運
んできたなんて。忍術とか使えば楽だったでしょうに」

するとゲンタがため息をついて答えた。

「カカシ先生が、忍術は絶対に使うなって。失敗して家具を壊す
んじゃないかって。そんなことないのにさ。それに手押し車は一台
しかなかったし、棚とか本とかこまごまとしたものを載せるともう
一杯だったんだよ。往復しようと思ったら、ヤマト先生はなんかム
キになって、作業は一回で済ませるぞって意気込んでるし」

「そっかあ。でも、二人で協力してここまで持ってきたんでしょ
う？ すごいね。ご苦労様」

アキにねぎらいの言葉をかけられた二人は、喧嘩したことを恥ず
かしく思ったのか、顔を赤く染めてバツの悪そうな表情を浮かべた。

「まあな。……ここまで大変だったよな」

ヒビキが言うと、ゲンタも頷く。

「ああ。お前、よくやったよ」

「お前こそ」

お互いの健闘をたたえて二人が拳を合わせたとき、ヤマトが押す
手押し車が到着した。

ヤマトの補助をしていたヤオイが二人に向かって声を掛ける。

「ベッドを地面に置いたまま、なにのんびりしてるのよー？ 早く入れちゃいなさいよ」

するとヒビキが口を尖らせて答えた。

「お前は補助だから楽だよな。ベッドを運ぶの、大変だったんだぞ。少しくらい休んだっていいじゃないか」

「家はすぐそこなんだから、ベッドを片付けてからのほうがゆっくりに休めるよ」

ヤマトが言うのと、ヒビキとゲンタは渋々ベッドに手をかけて持ち上げる。

「じゃ、さっさと片付けようぜ」

二人がカカシの家にベッドを運び込むのを見ると、ヤマトは苦笑を浮かべ、手押し車を玄関の近くに寄せた。そしてヤオイに声を掛ける。

「じゃ、僕たちもこれを運び込もうか」

サクラとヒナタも外に出て、手押し車の横に立った。

「私たちも手伝いまーす。夕飯までにさっきのクッキーを消化しなちゃね」

アキも手押し車のもとへ行こうとしたところ、サクラがニツコリと笑って力瘤を見せた。

「力仕事は私たちがやりますから、アキさんはお皿の用意と料理の移動をお願いします」

あのメンバーなら、かえってわたしは足手まといになるかも。そう思い、アキは家に戻った。

皿への盛り付けが終わった頃、サクラとヒナタがまた訪ねてきた。
「あ、もうほとんど終わってるんですね。あっちも終わりましたよ。カカシ先生の荷物少ないんだもん。あっという間でした。そろそろ料理を運びましょうか」

大皿を持ったサクラとヒナタのために玄関の扉を開けると、ヤマトがノックしようと手を上げたところだった。

「引越し作業が終わったので、フットマッサージしてもらおうかと思ったんですが、お時間大丈夫ですか？」

料理を持つ二人の邪魔にならないよう脇に移動して、ヤマトが訊ねる。

「ええ、料理を運び終わったらすぐ戻りますから」

アキも皿を運ぼうとテーブルに向ったとき、サクラが大声で叫んだ。

「あ、いいですよ。わたしとヒナタが運ぶから。ヤマト隊長もさすがに疲れているでしょうから、癒してあげてくださいーい」

するとヤマトが期待のまなざしを向けてきたので、アキは中へ通しながらサクラに頷いた。

「じゃあ、よろしくね。ここは開けておくから、運び終わったら閉めてね」

「はい」

サロンへ移動すると、ヤマトはすでに用意されたリクライニングチェアに座り、靴を脱ぎ始めていた。

「このときをどれだけ心待ちにしていたか。では、よろしく願いします」

フットバスに足を入れると、ヤマトの口から大きなため息がこぼれた。

「家でも時間があればもらったオイルでやってるんですけど、や

っぱり違いますね。雰囲気もあるんでしょうか」

「まあ、それもあるかもしれませんがね。ご自宅だと、仕事の書類やらなにやら目について、なかなかリラックスできないのかも」

答えながら、アキはオイルを調合していた。完成すると、トレイにオイルが入った瓶を載せてヤマトの足元に移動した。トレイを傍らに置き、バスタオルを膝に乗せてヤマトの足を片足ずつ拭いていく。

「では左足から始めます。……ずいぶん固くなってますね。かなり疲れがたまっているようで……」

「ええ、そりやもう。今回は任務から帰ったその足で家を建て、引越しの手伝いまでさせられましたからね。ヒビキたちを連れての任務は、Aランク任務より大変なんじゃないかと思うくらいですし」

「それでも、初めて会った頃に比べると、あの子たちはずいぶん成長しましたよね。可愛らしいのは変わりませんが、どこか頼もしさも感じるようになりました」

話しながら、あまりに足裏の筋肉が固くなっているの、ほぐすように優しく押していく。

「まだまだですよ……。これからさらに……」

ヤマトの声がだんだん小さくなっていく。

見ると、すでに寝ていた。

少しでも疲れが取れますように。そう思いながら、アキは一押し一押しに心をこめて丹念にもみほぐしていった。

マッサージが終わったと声をかけようとしたアキは、熟睡しているヤマトを見て口をつぐんだ。起こす代わりにタオルケットを静かにかけ、音を立てないように器具を片付ける。

カカシの家にはずいぶん人が集まってきたようで、閉ざした窓を通してにぎやかな声が聞こえてくる。

ヤマトが起きたら飲んでもらおうと、ティーポットにハーブを入れたとき、ドアをノックする音が聞こえた。

「アキさん、そろそろ来ないと料理がなくなっちゃいそうです」扉を開けると、困ったような表情を浮かべてヒナタが立っていた。

「あら。でもなくなっても大丈夫よ。簡単なものならすぐ作れるし。ヤマトさん、まだ眠っているから、もうしばらくそっとしておいてあげようと思って」

すると、ヒナタの後ろからサクラが顔を出した。

「じゃー、ヤマト隊長にはそこで一人で寝ていてもらって。アキさんはパーティー会場に来てくださいよー」

「んー、どうしようかな。……じゃ、ちょっとだけ顔を出そうかしら」

サクラに腕を引っ張られたアキは、引きずられるようにカカシの家へ向った。

中に入ると、サイ、シカマル、ナルト、そして金髪の少女がテーブルを囲んで何やらやかましく騒いでいる。

「あ、アキさん、いのは初めてでしたっけ？ あそこがめつく食事をむさぼっているのがいのでーす」

サクラが紹介する声が聞こえると、いのはきつとにらみながらこちらにやってきた。

「がめつって何よ。さっきから食べようとするものを次から次へとナルトに取られてるんだもん。……アキさん、初めまして。サクラから噂は聞いています」

そして、いのは両手でアキの手を握り締めた。

「小顔マツサージっていうのもあるって聞いたんですけど。美肌とあわせてやってもらうってこと、できます？ 任務のあとって、顔はむくむし、お肌もボロボロになっちゃうんですよー」

「できますよ。ぜひいらしてくださいね」

「よかったー。じゃ、あとで予約入れるのでよろしくお願いします。……あ、ナルト！ それはわたしの分でしょ！ 最後の一個なのに！」

いのが駆け寄ると、ナルトは慌てて口に入れようとする。もみ合う二人を見て、シカマルがげんなりした表情を浮かべて「面倒くせー」とつぶやいた。

そんな喧騒には構わず、カカシは部屋の隅に置いた椅子に腰掛け、イチャイチャパラダイスを読んでいる。その横に並んで体育座りをしているヒビキたちは、疲労が極限に達したのか、ぼんやりとしていて今にもまぶたが落ちそうだ。

アキは小さく微笑んで「やっぱり食事は自分で用意するわね。あの子たち、疲れているみたいだから、サロンで休ませてあげます」と3人のもとへ行く。カカシに挨拶代わりに小さく頷いて見せてから、ヒビキの肩に手を置いた。

「3人とも、わたしのサロンにいらっしやい。ヤマトさんも寝ているから、みんなと一緒に休んで」

普段の快活さはどこへやら、まるでゾンビのようにヨロヨロと歩く3人を従えて、アキは自宅に戻った。

「ヒビキさんとゲンタくんはサロンのベッドを使って。ヤオイちゃんもわたしの寝室にどうぞ」

それぞれの場所に案内すると、倒れこむように横になり、あつという間に眠りに落ちる。

「こうやってみると、まだ小さな子供みたい」

それぞれの無邪気な寝顔に笑みを誘われながら、そっとタオルケットをかけ、照明を少し暗くしてから再びカカシの家へ向った。

ふと夜空を見上げると、少し欠けたもののほぼ満月に近い月が優しく輝いている。その輝きの中になんとなく両親や祖父の面影がちらついたように感じ、アキは心の中で語りかけた。

（ねえ、父さん、母さん、茂三じいちゃん。見ているかな。代々受け継がれてきた伝統を、ちょっと変えちゃってごめんね。でもきつと、あの葉は里のみんなの役に立てるはず。3人とも喜んでくれるよね）

返事がないのはわかっていたが、きつと言葉は届いているだろう

と思う。

（わたしだったらトラブルの原因をいっぱい作っちゃって、みんなに迷惑かけ通しだったな。病気のせいで心に直接接触してケアすることはできなくなったけど、でも、わたしにできることを精一杯頑張ろうと思ってます）

そのとき流れ星が3つ、同時に弧を描いて森の向こうへ落ちていった。まるで3人が「それでいいんだよ」と言ってくれているようで、アキは嬉しくなる。

そのまま外壁によりかかり、夜空を見上げていると、畑の向こうから「アキさーん」という声が聞こえてきた。

見るとキバが慌てた様子で手を振りながら走ってくる。よくよく見ると、その前を白いボールのようなものがものすごい勢いで移動していた。

（何かしら……）

と目をこらした瞬間にはすでに目前に迫っており、そのままアキに体当たりしてきた。

「キャッ」と叫びながら尻餅をつくど、その声を聞きつけたのか、カカシの家からはパーティで集まっていたメンバーが、アキの家からはヤマトが、一斉に駆け出してきた。

「なんだ、何が起きたんだ」

先頭を切って走り寄ったカカシは、アキの様子を見てその場に固まった。

「なに、これ」

一足遅れてアキのもとに到着したキバは、息を切らしながら説明する。

「アキさんが番犬が欲しいって言うからさ。探してきてやったんだけど……。アキさんの姿を見たたんこいつ、すごい勢いで走り始めちゃってさ。てか、カカシ先生がここに越してきたんだったら、別に番犬はいらないんじゃないかねえ？」

アキは首元に張り付いて盛んに顔を舐めてくる子犬をなんとか引

き剥がし、胸元に抱いて立ち上がった。

「ううん、いいの。カカシさんだっていつも家にいるわけじゃないし、この子がいたら安心だわ」

子犬は再び首元に這い上がって顔を舐めようと、バタバタ尻尾を振りながら暴れている。

「もう、アキさんのことだから、またトラブルに巻き込まれたのかと思ってびっくりしたってばよ。それにしても、こいつが？ 番犬？」

ニヤニヤしながらナルトが覗きこむと、子犬は振り向いて唸った。

「お前のが嫌いだってよ。あれだな、犬も人を見るからな」

キバが言うと、一同が笑い声を上げる。ナルトはすねたようにそっぽを向いた。

「なんだよ。アキさんの番犬だったら、もっと強そうな奴じゃないとダメだってばよ」

「あら、でもわたしはこの子が大好きになっちゃった。かわいいわよ」

子犬の頭を撫でながら、アキは満面の笑顔を浮かべている。

「もう少し訓練してから連れてきたほうが良かったんじゃないか」呆れたような表情でカカシが言うと、キバは首を振った。

「オレだって、きちんと訓練してから渡そうと思ったんだけどさ。アキさんが子犬のほうがいいって言うから。当然、時間があるときは訓練に来るつもりだぜ。一応、こいつも忍犬の血を引いてるからさ、それなりに訓練すれば十分戦えるようになる」

するとアキは首を振った。

「戦わなくていいの。危険を察知したら、わたしを連れて逃げてくれれば」

「でも、番犬に欲しかったんだろ？」

キバが不思議そうに訪ねると、アキは少し悲しそうな表情を浮かべた。

「こんなにかわいい子が、わたしを守るために傷つくなんてイヤ

なの。それに、わたしを危険から遠ざけてくれるなら、それも守ってくれることになるでしょう？」

「まあいいんじゃない？ 里まで連れて逃げてくれれば、あとはオレたちで何とかできるだろうし」

カカシが言うと、キバは頷いた。

「じゃ、危険を感じたら、とりあえずアキさんを安全な場所に連れていくように教えるよ。でも追い詰められたときのことも考えて、ある程度は戦い方も訓練するって感じでいいよな」

アキは笑顔で子犬を抱え上げた。

「じゃ、これからよろしくね」

子犬は答えるように、「アン！」と甲高い声で鳴いた。アキはふと思いついたように、キバに訪ねた。

「この子って、成長すれば赤丸みたいにわたしを乗せて移動できるのかしら」

「ああ。赤丸と同じくらい大きくなるぜ」

アキは子犬を顔の前に持ち上げて、

「じゃ、これからは、頼もしいボディガードと一緒に日帰りでお墓参りに行けるね」

と嬉しそうに語りかけた。再び子犬は「アン！」と答える。

「でさ、引越し祝いパーティーしてんだろ？ ちよっと遅くなったけど、オレも参加するわ。腹減った」

そういうながら、キバはカカシの家へ向う。その背中に、サクラが声をかけた。

「もう料理は残ってないわよ。もっと早く来ないと」

「ええ！ なんだよ。アキさんの子犬の件でちよっと遅れただけじゃないか。お袋には夕飯いらないって言っちゃったんだぜ！」

キバが愕然とした表情で振り向く。

「ごめんね、キバくん」

アキがすまなそうな表情を浮かべると、キバは苦笑いした。

「アキさんのせいじゃないよ。誘っておいて、料理を残さないこ

いつらが悪い！」

そう言って、ナルトたちを睨んだ。

「わたしもまだ食べていなくて、これから夕飯を作ろうと思っていたの。せっかくだから、みんながつまめるようなものを用意するね。皆さんはカカシさんのお宅でパーティの続きをされていて」

「じゃあ、わたしたちもお手伝いします」

サクラとヒナタ、いのの3人が動きかけたが、アキは首を振った。

「ヒビキ君たちが寝てるから、静かにしていてあげたいの。大丈夫、すぐできる簡単なものにするから。みんなは戻って」

女性陣3人は一様に申し訳なさそうな表情を浮かべたが、素直にカカシの家へ向う。

「じゃー、オレたちも戻るかな」

一同がぞろぞろと移動し始めると、アキはヤマトに声をかけた。

「もう少し横になりますか？」

ヤマトは照れ笑いを浮かべながら応えた。

「いやあ、今回はあつという間に寝ちゃってましたね。十分休ませてもらいましたよ。ヒビキたちは引越しパーティが終わる頃に起こして連れ帰りますので、それまでお願いします」

アキは笑顔で頷くと、子犬を抱えたまま家へ戻った。

子犬に牛乳を与えてから、冷蔵庫の中身を物色する。

「さて、何を作ろうかな」

ep34 (後書き)

つぎのお話で完結予定です。

サンドイッチとチキンソテーを皿に載せて家を出ると、自宅の玄関の前でカカシが本を読んでいた。

「どうしたんですか？」

アキが声をかけると、苦笑しながら答える。

「誰のためのパーティなんだか。うるさくて読書もできないので、月明かりで読むことにしました」

「何もパーティの最中に読書しなくても」

笑いながら近づくと、皿を持ち上げて見せた。

「さっきの食事はナルトくんたちに全部取られちゃいました？」

「いえ、しっかりいただきましたよ。でもこれもおいしそうだな。中に持っていくとまた争奪戦が始まるでしょうから、ここでちよつとつまんでいいですか」

「どうぞどうぞ」

カカシはサンドイッチをひとつつまんで頬張る。

その様子を見ているうちに、再びアキの鼓動が激しくなっていた。目を伏せてカカシを見ないようにしながら、玄関に向かう。

「あ、あの、じゃあこれを持っていきますね」

そう言っただけに入ろうとした瞬間。

「ここでパーティをやっているとネジから聞いてきたのだが、本当だったんだな」

と、いきなり声をかけられた。誰かと振り向くと、シノがポケットに手をつっ込んで立っている。

「誘われなかったのだが、来てみた。きっとまた忘れられているのだと思って」

「いろんな奴に声をかけてたみたいだからな。そういうこともあるだろ。とりあえず、中に入ったら？」

カカシが言うと、シノはアキが持っている皿に目を留めた。

「それはオレが持っていこう。多少は存在感が増すかもしれん」
「じ、じゃあ、お願いしようかな」

シノに皿を渡すと、軽く頷いてスタスタと家の中へ入っていった。
「おお、シノ！ うまそうなもの持ってきたじゃねーか」

嬉々としたナルトの声が聞こえたが、また何やら争奪戦が始まったようで、閉まったドアを通して騒がしい声が漏れ聞こえてきた。

何となく中に入るタイミングを逃してしまい、アキは「ヒビキくんたちの様子を見てこようかな」とそそくさと自宅に戻ろうとする。すると、カカシに手首を掴まれた。

「引っ越してきて以来、なんだかオレを避けてるような気がするんですが。来ないほうが良かったかな」

自分の態度でそんな風に感じてしまうなんて、とアキは驚いて今度ははまともにカカシを見上げた。

「いえ、すごく嬉しいです」

「じゃ、どうして」

カカシは手を離して寂しそうな表情を浮かべる。

「なんていうか……。緊張しちゃって。ほら、村を出てからずーっとここで一人で暮らしてきたでしょう？ だから……」

言いながら自分でも下手な言い訳をしていると分かったし、カカシの表情がさらに曇るのを見て、胸に痛みが走った。

「違うんです。ただ、わたし……。胸が苦しくって」

「えっ。体調が悪いんですか」

アキは激しく手を振った。

「体調はすごくいいですよ。心配しないでください。……なんて説明したらいいのかわからないんです。でも、ごめんなさい。せっかく越してきてくれたのに、わたししたら……。……」

「……」

向かい合ったままの二人の間に、気まずい沈黙が漂う。

（ど、どうしよう……）

顔はどんどん火照り、全身が汗ばんできた。汗を抑えようと手を

額に当てる様子を見て、やはり体調が悪いのではないかとカカシは再び眉をひそめる。

これ以上ここにおいても事態は悪くなるばかりだと思い、アキは小さくため息をついた。

「疲れているのかもしれませんが。家で少し休みますね。……あ、でも、カカシさんが引越してきてくれて、本当に嬉しく思っていますから。……ずっと傍にいてくださいね」

そう言って、アキはそそくさと家に戻っていった。

「うわあ、アキさん、けっこうすごいこと言ったのに、自分で気づいてないんだろうな」

カカシの背後から、サクラが顔を出した。

「なんでいつも人の話を立ち聞きしようとするんだ」

呆れ顔のカカシには構わず、サクラはしきりに頷いている。

「だってカカシ先生、『ずっと傍にいてくださいね』ですよ？

嬉しくないんですか？」

「今日はずっと避けられてたから。迷惑だったのかと……」

「あー、鈍い、鈍すぎる！」

サクラはイライラした様子でカカシに詰め寄った。

「な、なんだよ」

「二人とも大人なんだし、ロマンス小説だって読んでるんだから、もう少し分かってもいいんじゃないかと思うんですけど！ アキさんが頬を赤らめながら、カカシ先生が近くにいると胸が苦しいって言うってことは！」

「言ってるってことは？」

カカシはサクラの勢いに押されて、のけぞっている。

「カカシ先生のが好きなんですよ。里のみんなを好きなのは違う意味で、好きってこと」

「ええ？」

まったく信じていない様子のカカシを見て、サクラはイライラと

した表情を浮かべる。

「もういいです。あとは本人同士でなんとかしてください」と言い放ち、憤然とした様子で去っていった。

（なんだよ、勝手に一人で喚きまくって）

カカシは読書に戻ろうとページを開いたが、目は文字を追うものの、中身がまったく頭に入っていない。本を読むのは諦めて夜空を見上げると、昨日アキと一緒に見上げた月が、今夜も優しく輝いていた。

かつて自分が「アキさんは満月のようですね」と言ったことを思い出す。今もそう思う。守りたいと思う反面、その優しい光に照らされて穏やかな気持ちになりたいという思いもある。ずっと傍で……。

サクラの言葉を信じたわけではないが、今のままではやはり落ち着かない。隣同士で、今まで以上に顔を合わせることになるのだから。

そう思い、カカシはアキの家へ向かった。

その頃アキは、台所のテーブルに突っ伏して自分の行動を反省していた。

（どうしよう。わたし、すっごく失礼な態度を取ったかも……）
気持ちを落ち着かせるため、沈静効果のあるハーブティを淹れようと立ち上がったとき、ドアをノックする音が聞こえた。

ドアを開けてカカシの姿を認めたたん、口から心臓が飛び出すのではないかと思うくらい、さらに動悸が激しくなる。意識しないようにと努力するほど、どんどんひどくなるようだ。

いくらアキが恋愛に疎くても、心の片隅ではなんとなく気づいていた。どうしてこんなにドキドキするのか。ただ、こういう気持ちは初めてだから、どう接していいのか分からないのだ。

「さっき疲れていると言っていたのに、押しかけてしまってますみません。少しだけ話しをしてもいいですか？」

「あ、はい……」

ヒビキたちを起こしてはいけないと、アキは玄関の外へ出た。一緒に外に出てきた子犬は、アキの足元でじゃれている。アキは手を伸ばして抱き上げると、うつむいたまま子犬の頭を撫で始めた。

「ここに引越してきたのは、頼まれたからじゃないですよ。オレが、ここに、来たかったからです」

アキは驚いたような表情を浮かべて顔を上げた。

「そうなんですか？」

「近くにいないせいで、アキさんに何かあったらと思うと、落착かなくて」

「ごめんなさい、いつも心配ばかりかけて。病気のほうはしっかり対策を立てて予防につとめていますし、いくらわたしでも、さすがにもう事件には巻き込まれないんじゃないかなあと……」

申し訳なさそうにつぶやくアキを見て、カカシは苦笑いする。

「そうじゃなくて……。ああ、でもそうかもしれない。いつも心配なんです。だから、傍にいて守りたいと思ったんです」

すると何を思ったのか、アキは笑顔を浮かべた。そして、子犬を抱きしめて頬ずりする。

「皆さんに心配ばかりかけているので、この子を飼うことにしましたんですよ。さっきも言ったように、安全なところまで……」

カカシは首を振った。

「違う。オレが言いたいのは……」

そのまま言葉は消えて、再びぎこちない雰囲気が漂った。

「早く言えよ」

ふいに、オビトの声が聞こえた。

（何をどう言えばいいのか分からないんだ）

心の中でつぶやくと、アキが不思議そうな表情でこちらを見ている。そして、首を傾げて尋ねた。

「言えって、何を？」

今度は驚きでカカシは言葉を失った。

「聞こえたんですか？」

「カカシさんが言ったんじゃないんですか？」

カカシは月を見上げた。会ったこともないオビトたちのために、慰霊碑に朔夜草を供えたアキの姿を思い出す。

この人まで失ったらオレは……。そう思ったとき、自然に言葉が口をついて出た。

「好きです、アキさん」

その後の様子もオビトは見ていた。

カカシの言葉を聞いてしばし固まったアキは、抱いていた子犬をポトリと落としてしまった。子犬の悲鳴を聞いて我に返り、怪我はないかと慌てて抱え上げる。無事だと分かると、今度は抱きしめて「ごめんね、ごめんね」と謝り始めた。カカシは気まずそうな表情を浮かべてポケットに手をつっこみ、その場に立ち尽くしている。

「大丈夫かな」

背後を振り向いて声を掛けたオビトの肩に、手が置かれた。

「大丈夫よ、きっと。不器用だけど、気持ち伝えた訳だから」

「じゃあもういいかな」

オビトはリンの手を握り、その場から離れていった。

「本当にごめんね。痛かったね」

落とされたショックから冷めると、子犬はわざと悲しい泣き声を響かせてアキの気を引こうとしている。カカシは苦笑いを浮かべた。

「甘えてるだけですよ。もう痛くないはずですよ」

「そうなの？ 本当に？」

アキは子犬を抱いたまま立ち上がった。

「もう、びっくりしちゃった。なんで落としちゃったんだろう」
なぜ落としたかという理由に思い至ったとき、アキは再びその場

で固まった。すると、カカシが慌ててアキの腕の下に両手を差し出す。

「落とさないでくださいね」

アキが足元に子犬を下ろすと再び悲しげな鳴き声を上げたが、抱き上げてもらえないと分かると、すねて足元に伏せた。

そんな子犬を見下ろしたまま、アキは黙っている。

カカシは困ったような笑顔を浮かべた。

「いや、突然すみませんでした。でも……」

（アキさんにオビトの声が聞こえたから。それがすごく嬉しかったし、そんな人を絶対に失いたくないと思ったから……なんて言ったら、また混乱するだろうな）

と、心の中で続ける。

アキの顔はまた真っ赤になっているが、意を決したように、今度はまっすぐカカシの顔を見上げた。

「わたしも。わたしもカカシさんが……」

そこまで言ったとき、「あっ」という声とともに、カカシの家からナルトたちが転がり出た。

「ばっ。あんたが押すからっ」

サクラがナルトの頭を小突く。

「だって、サクラちゃんたちがドアに張り付いて何か聞いてるみたいだったからさ。気になるってばよー」

「あんたには関係ないのっ」

カカシはため息をついた。

「それを言うなら、サクラだって関係ないんじゃない？」

「ありますよー。わたしがカカシ先生のお尻を叩いてあげたから、こんなにいい感じに……」

と言いかけたサクラは、呆然としてこちらを見ているアキに気づいて口をつぐんだ。

「あー、じゃあ、もうそろそろ遅いしー。わたしたちはそろそろ帰ろうかなー」

サクラの言葉に、ナルトは口を尖らせた。

「オレは帰らないってばよ。今夜はカカシ先生ところに泊まる」
するとカカシは腕を組んで首を横に振る。

「泊めないよって言ったじゃない。お前はもう帰れ」

「えー、でもヤマト隊長はカカシ先生のベッドで寝てるってばよ」

「嘘でしょ。起こして帰す」

カカシが家に戻ってしばらくすると、「もう少し寝ていたかったのに」とブツブツ言いながらヤマトが現れた。

「じゃ、みんな、お疲れさん。今日はもう帰って休め」

カカシの声を合図に、一同はアキに手を振りながら帰り道に付く。アキも手を振り返し、森の中に姿が消えるまで見送った。足元ですねていた子犬は、再びアキの腕に抱かれ、満足げに手を舐めている。

「それじゃ、オレもそろそろ休みます」

そう言って自宅に向かうカカシをアキは呼び止めた。

「カカシさん」

振り返ると、まだ顔は赤いものの、いつものアキの笑顔が戻っていた。

「わたしも、あなたを守りたいと思います。つらすぎる過去と、心の傷から」

カカシは目を見開いて、その場に立ち尽くした。

「心に接触して傷をケアすることはできないし、今できる技術を総動員したとしても、消すことはできないと思います。でも」

アキはそこで一度言葉を切り、一度深呼吸してから話しを続ける。
「でも、悲しみを少しでも和らげることができればと、そう思っています。だって、大切な人には……好きな人には、いつも笑顔でいてもらいたいから」

そこまで一息に言うのと、「それじゃ、おやすみなさい」とつぶやくように言って家の中へ駆け込んでいった。

後に残されたカカシは依然、目を見開いたままその場を動かない。

しかし次第に満面の笑顔へと変わり、月を見上げて心の中でオビトに語りかけた。

（アキさんに会ってから、悲しみはずいぶん癒されたような気がするけどな。それにしても、守ってあげたいだなんて、初めて言われたよ）

返事は返ってこない。

（ま、お前も向こうでリンと楽しくやってるって言ってたしな。

オレもこれから……）

カカシはアキの家を振り向いた。

（アキさんと一緒に、幸せに……）

そのとき、かすかに声が聞こえた気がした。

「それでいいんだよ。これでやっと、オレもゆっくりできる」

【おしまい】

e p 35 (後書き)

やっと完結です。

ラストはどうしようか悩みましたが、思い切ってくつつけちゃいました。

2になると、原作からさらにかけ離れた内容になっていましたね
へ；

誤字脱字なども多々あったかと思いますが、根気強くここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039h/>

香癒の人2

2011年8月6日00時12分発行